兵庫県埋蔵文化財調査報告　第430冊

伊勢貝遺跡

— (主)三田篠山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成24（2012）年3月

兵庫県教育委員会

伊勢貝遺跡

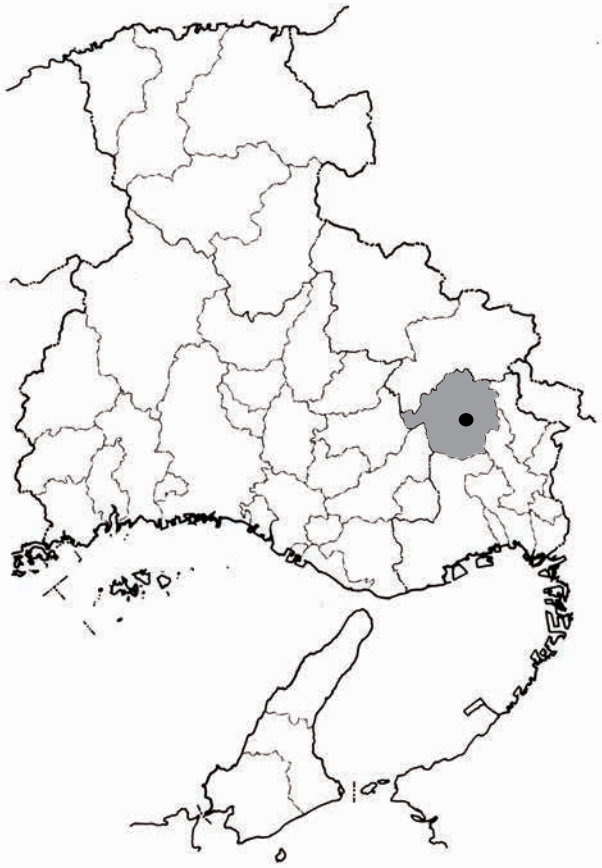
兵庫県埋蔵文化財調査報告
第430冊

兵庫県教育委員会

23教Ⓣ1－034 A4

三田市所在

伊勢貝遺跡



平成24（2012）年３月

兵庫県教育委員会

調査地区全景（西から）

調査地区から北を望む

竪穴住居跡ＳＨ１（南から）

ＳＨ１竈

竪穴住居跡ＳＨ２（南から）

ＳＨ２竈

縄紋調査区（北から）

縄紋調査区（北西から）

縄紋土器

縄紋土器

石器

石器

例　　言

1．本書は、兵庫県三田市小野字伊勢貝所在の「伊勢貝(いせがい)遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．伊勢貝遺跡の本発掘調査は、(主)三田篠山線道路改良事業に伴い、兵庫県阪神北県民局県土整備部三田土木事務所(当時)の依頼によって、平成15年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(当時)が実施し、岸本一宏、別府洋二が調査を担当した。

3．本報告書作成にかかる整理作業は、兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所三田業務所の依頼を受けて、平成21～23年度に兵庫県立考古博物館が実施した。

4．本報告書掲載の地形図は、第１図は国土地理院発行のものを使用した。図版１は旧三田土木事務所作成のものを使用した。航空写真および航空写真測量図は株式会社八州関西支社神戸営業所に委託し、作成したものを使用した。遺物写真は㈱タニグチ・フォトに撮影を委託した。

5．その他の写真・実測図は調査担当者、調査補助員および嘱託職員によるものを使用した。

6．出土したサヌカイトの産地推定は株式会社パレオ・ラボに依頼した。また、竪穴住居跡出土の炭化物の放射性炭素年代測定（AMS測定）は株式会社加速器分析研究所に依頼した。ともに第５章に分析結果を掲載している。

7．本報告書は、八木和子の補助の下、別府が編集し、執筆分担は目次に掲載した。

8．発掘調査、整理作業に際して以下の方々の指導・助言・協力を受けました。記して感謝いたします。
（順不同、敬称略）
高島信之、山崎敏昭、平田　学、畠中　剛、菅本宏明、浅岡俊夫、二葉佐裕利、伊福千加子、
明石久美子

目　　次

第１章　遺跡周辺の環境……岸本一宏　1
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
第２章　調査に至る経緯と調査の経過……別府洋二　9
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査の経過
第３章　遺構
　第１節　古墳時代の遺構……岸本　13
　第２節　平安時代以降の遺構……別府　16
　第３節　縄紋時代調査区……岸本　23
第４章　遺物
　第１節　古墳時代の土器……岸本　25
　第２節　縄紋土器……岸本　29
　第３節　平安時代以降の土器……別府　31
　第４節　石器……久保弘幸　37
　第５節　金属器……岸本　41
第５章　自然科学分析
　第１節　伊勢貝遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）……㈱加速器分析研究所　45
　第２節　伊勢貝遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定……竹原弘展（パレオ・ラボ）　48
第６章　まとめ……岸本　51
　第１節　三田市域の弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について
　第２節　オンドル状遺構について

表　目　次

表１　遺跡名表……4
表２　調査概要一覧……10
表３　伊勢貝遺跡出土石器組成表……38
表４　出土石器計測表……43・44
表５　測定対象資料……46
表６　〃　……47
表７　分析対象一覧……48
表８　原石採集地と判別群名称……49
表９　分析値および産地推定結果……49

挿 図 目 次

第１図　周辺の遺跡……3
第２図　三田市域の高地性集落の位置関係……7
第３図　製品の石材組成……38
第４図　暦年較正年代グラフ……47
第５図　サヌカイト産地推定判別図(1)……50
第６図　サヌカイト産地推定判別図(2)……50
第７図　三田市域の弥生時代後期末～古墳時代前期の土器変遷……52
第８図　オンドル状遺構（Ｌ字形竈）の分類と諸例……54

図 版 目 次

図版１　調査位置図
図版２　遺構配置図
図版３　竪穴住居跡SH１
図版４　竪穴住居跡SH２
図版５　SH２土層断面図
図版６　SH２土層断面図
図版７　柱穴・土坑・集石土坑
図版８　土坑
図版９　縄紋時代調査区
図版10　掘立柱建物跡
図版11　土坑
図版12　集石土坑SX２
図版13　集石土坑SX２
図版14　集石土坑SX１・３
図版15　井戸
図版16　井戸
図版17　出土土器１　竪穴住居跡・土坑
図版18　出土土器２　柱穴・土坑・井戸
図版19　出土土器３　包含層出土縄紋土器
図版20　出土土器４　包含層出土縄紋土器
図版21　出土土器５　包含層出土縄紋土器他
図版22　出土土器６　掘立柱建物跡・柱穴・土坑
図版23　出土土器７　集石土坑
図版24　出土土器８　井戸・包含層
図版25　出土金属器
図版26　出土石器１

図版27　出土石器 2
図版28　出土石器 3
図版29　出土石器 4

巻首図版目次

巻首図版 1　調査地区全景(西から)・調査地区から北を望む
巻首図版 2　竪穴住居跡SH 1 (南から)・SH 1 竈
巻首図版 3　竪穴住居跡SH 2 (南から)・SH 2 竈
巻首図版 4　縄紋調査区(北から)・縄紋調査区(北西から)
巻首図版 5　縄紋土器
巻首図版 6　石器

写真図版目次

写真図版 1　遠景
写真図版 2　全景
写真図版 3　調査地区から望む
写真図版 4　調査区全景
写真図版 5　竪穴住居跡
写真図版 6　竪穴住居跡
写真図版 7　竪穴住居跡
写真図版 8　竪穴住居跡
写真図版 9　竪穴住居跡
写真図版10　竪穴住居跡
写真図版11　竪穴住居跡
写真図版12　土坑
写真図版13　柱穴
写真図版14　掘立柱建物跡
写真図版15　柱穴
写真図版16　土坑
写真図版17　集石土坑
写真図版18　集石土坑
写真図版19　井戸
写真図版20　井戸
写真図版21　縄紋時代調査区
写真図版22　縄紋時代調査区
写真図版23　遺跡周辺の様子
写真図版24　竪穴住居跡出土土器
写真図版25　竪穴住居跡・土坑出土土器
写真図版26　柱穴・土坑出土土器
写真図版27　井戸・柱穴・包含層出土土器
写真図版28　包含層出土縄紋土器
写真図版29　包含層出土縄紋土器
写真図版30　掘立柱建物跡出土土器
写真図版31　柱穴出土土器
写真図版32　土坑出土土器
写真図版33　土坑・包含層出土土器
写真図版34　集石土坑出土土器
写真図版35　集石土坑出土土器
写真図版36　集石土坑・井戸出土土器
写真図版37　井戸出土土器
写真図版38　井戸出土土器
写真図版39　出土金属器
写真図版40　出土石器
写真図版41　出土石器
写真図版42　出土石器
写真図版43　出土石器
写真図版44　出土石器・石製品
写真図版45　出土石製品・木製品

第１章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

三田市は兵庫県の南東部に位置し、六甲山と丹波山系との間にあり、中央を流れる武庫川が開析した盆地状地形を呈している。旧国名では摂津国の北西部に位置していることから北摂地域と呼ばれ、もとは有馬郡に属していた。盆地中央部を南流する武庫川には相野川、青野川とその支流の黒川、内神川、羽束川などの支流が合流するが、それぞれの支流が開析谷を形成し、数多くの谷状地形が存在している。

市内における武庫川本流域での標高は144～184mで、武庫川北東部や北西部では標高600m級の山地となっているのに対し、武庫川南西部では標高220m前後の低い丘陵がひろがっており、平地部との比高差は約50～70mである。また、青野ダムや北摂ニュータウンの建設により増加した人口は約11万人で、大阪・阪神方面のベッドタウンとしての役割を担っている。市域の面積は約210㎢で、可住地面積は約30％と少ないが、平均的な値である。

第２節　歴史的環境

三田市内では昭和50年代以降、圃場整備事業や青野ダム建設および北摂ニュータウン建設に伴う遺跡の発掘調査が相次いで行われ、遺跡の内容が明らかとなっているものが多い。それら三田市域の遺跡については、最近、『三田市史』第１巻通史編Ｉと第８巻考古編が刊行され、これまでの資料に加えて最新の資料がまとめられていることから、それをもとに伊勢貝遺跡周辺の歴史的環境を時代順に述べることとしたい。

旧石器時代

三田市域において旧石器時代の遺跡の数は少なく８例を挙げるにすぎない。そのなかで、現在のところ、亀ヶ森遺跡、溝口遺跡、有鼻遺跡（83）、天神遺跡（173）といった武庫川本流に近い台地や丘陵上に位置している遺跡と、川端遺跡（72）、溝向遺跡（51）、溝ノ尾遺跡（48・49）、乾遺跡（47）など武庫川支流の青野川流域の台地上に存在する遺跡にその分布を分けることができる。

溝口遺跡ではナイフ形石器やスクレイパーをはじめ多数の石器が発掘調査により出土しており、石器製作の場所が明らかにされている。一方、その他の遺跡では石器が遊離した状態で出土するなど遺構面としての確認ができないものが大半である。有鼻遺跡ではナイフ形石器・刃部磨製石斧・台形石器など多くの石器が出土し、天神遺跡でもナイフ形石器や翼状剥片、刃部磨製石斧が発見されているが、いずれも遊離した状態であり、亀ヶ森遺跡の翼状剥片も同様である。

青野川流域の青野ダム周辺に存在する遺跡でも、出土状況は同様に遊離した状態または遺構面としての確認はできていない。落合古墳の盛土中からはスクレイパーなどが出土し、川端遺跡でナイフ形石器と思われる石器、溝向遺跡ではナイフ形石器、溝ノ尾遺跡でもナイフ形石器など、乾遺跡ではナイフ形石器と石核が発掘調査により出土している。

これらの石器はすべて後期旧石器時代に属している。

縄紋時代

縄紋時代では遺跡数が増加し、武庫川とその複数支流の流域に遺跡が存在するようになり、20箇所程度の遺跡数を挙げることができる。しかし、それらのうち、伊勢貝遺跡（145）のように発掘調査によってその内容が詳細に判明した遺跡の数は多くない。

梶下ケ谷遺跡（117）は北摂ニュータウン建設関連の発掘調査により27基の陥し穴が検出され、包含層からは縄紋時代中期前葉の船元Ⅰ式の爪形文土器小片が出土している。ただし、陥し穴埋土に含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定では、縄紋時代早期末〜前期初頭に相当する結果が得られている。陥し穴は長径1.2〜1.6m、短径1.0〜1.2mの平面楕円形が多数を占め、径1.0〜1.2mの円形も存在する。深さは0.8〜1.0m程度のものが多い。底は平坦で、底面には杭や柱状の痕跡を残すものが10基程度存在し、中央に1箇所のものや十字に5箇所認められたものもある。また、小穴の周囲を礫で固めたものも認められた。これらは、上端を尖らせた柱や杭を垂直に立てていた痕跡と想定できる。

加茂・六地蔵遺跡（86）では後期の北白川上層Ⅲ式の土器群が発見されており、深鉢が土坑内より発見されていることから墓の可能性があり、他の土坑群や柱穴も縄紋時代の所産と推定されている。

青野川流域の北台遺跡（42）では発掘調査によって柱穴状も含め多数の土坑が検出されており、墓や住居などの機能が考えられている。有舌尖頭器1点のほか、石鏃を中心とした多数の石器とともに後期中葉の北白川上層式の小片土器が出土しており、尖頭器の存在と石鏃の型式分類から、草創期・早〜前期・後期〜晩期に分けられている。

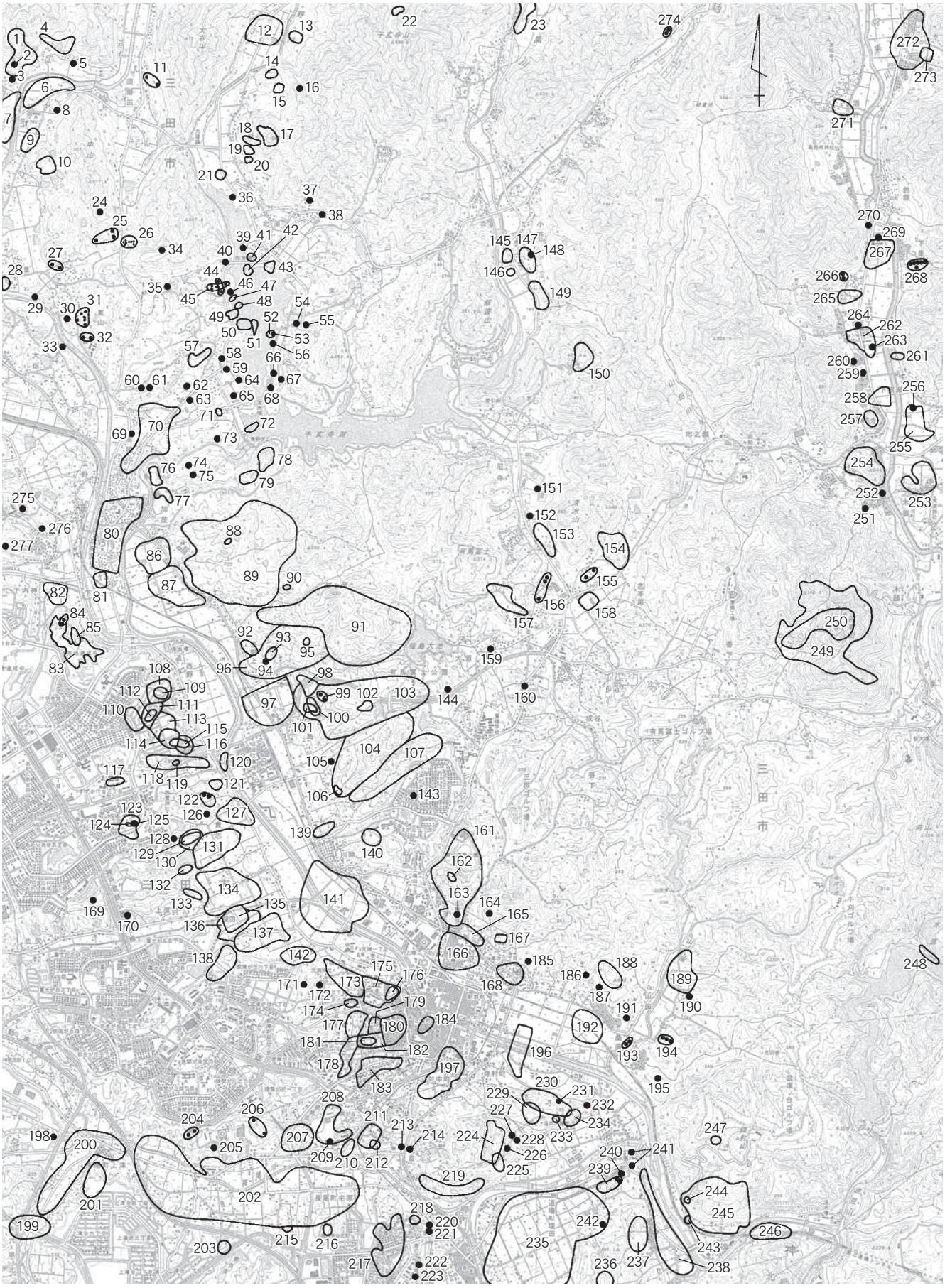
羽束川流域の谷部では5箇所の縄紋時代遺跡が発見されているが、布木・堂ノ前遺跡では発掘により晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ式）の深鉢を使用した土器棺が調査されている。

また、今回報告する伊勢貝遺跡は青野川支流の黒川流域に存在するが、発掘調査により多量の縄紋土器が出土している。

その他の縄紋時代遺跡のうち草創期に属するものは、武庫川本流域の下西山遺跡（113）で長さ5㎝弱の有舌尖頭器、有鼻遺跡で長さ3㎝弱の有舌尖頭器、平方遺跡（111）で有舌尖頭器と尖頭器があり草創期にあたるとされている。武庫川支流の青野川流域では、川端遺跡で有舌尖頭器、先述の北台遺跡の有舌尖頭器とともに草創期に位置づけられている。同じく武庫川支流の羽束川流域では、木器荘園内遺跡（252）で長さ9㎝程度の有舌尖頭器が工事中に出土している。以上は有舌尖頭器が発見されていることにより草創期に位置づけられるものである。

早期の遺跡のうち、土器が出土している遺跡では、羽束川流域の小柿・東村遺跡で早期押型文の黄島式土器に加えて局部磨製の可能性のある石鏃があり、大藪遺跡（262）では早期末の竹管押引文の土器がある。青野川流域では泓遺跡（21）で神宮寺式土器の押型文と石鏃を中心とした石器、北台遺跡では黄島式土器が出土している。早期の石器のみ発見されている遺跡では、青野川流域の川端遺跡で局部磨製異形石器や石鏃が出土しており早期に位置づけられ、ほかに溝向遺跡で局部磨製異形石器に含まれる製品、八木ノ谷中世墓（40）で早期に位置づけられる石鏃が出土している。

前期の土器が出土した遺跡は現在のところ認められないが、中期の土器は先述の梶下ケ谷遺跡と大藪遺跡に限られて出土している。大藪遺跡では楕円区画文内に刺突文を充填する中期末の土器片がある。土器を伴わず石器のみ出土した遺跡では、武庫川本流域の溝口遺跡で早期〜前期の石鏃を中心とした多量の石器が出



第１図　周辺の遺跡

第１表　遺跡名表（番号は第１図に対応）

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	本庄丸山城跡	57	吉兵衛谷窯	112	平方古墳・窯跡群	168	高次・北ノ垣内	223	北神N.T.№45
2	城山古墳	58	求メ塚古墳	113	下西山	169	上丁田古墳	224	立石城跡
3	森鼻城居館跡	59	求メ塚	114	西山西	170	新林古墳	225	川北古墳群
4	茗荷谷古墳群	60	博地谷古墳	115	西山西古墳群	171	三田谷古墳群第１号墳	226	上山南古墳群第1・2号墳
5	東家地古墳	61	塩ヶ谷窯	116	西山	172	三田谷古墳群第２号墳	227	上山南古墳群第３号墳
6	東向・藤ノ木	62	朱詰古墳	117	梶下ヶ谷	173	天神	228	塩田北山西古墳
7	田中・五ノ坪	63	兵丹古墳	118	奈良山古墳群	174	池ノ首	229・230	上山古墳群
8	嘉正寺古墳	64	郡塚1号窯	119	奈良山	175	三田城跡	231	上山墳墓群
9	東向・地蔵家地	65	道東古墳	120	福島・松ノ本	176	古城	232	昭願寺古墳
10	森本城跡	66	貝谷窯	121	貴志城跡	177	西垣内	233	遍明院裏山古墳
11	烏帽子形古墳群	67	蛭田	122	貴志城居館跡	178	平家垣内	234	自彊
12	大町居館跡	68	落合窯	123	奈カリ与	179	大池ノ南	235	塩田
13	トノヤブ	69	小人松古墳	124	釜屋城跡	180	屋敷町	236	東山中
14	見付	70	宮脇古墳群	125	奈カリ与古墳	181	芳ノ塚古墳群	237	ショブ谷
15	祥楽寺跡	71	双子塚１・２号墳	126	貴志古墳群第3号墳	182	西山・芳ノ塚	238	生野
16	見付山	72	川端	127	貴志・下所	183	南が丘・打上り	239	南所古墳群
17	青野城跡	73	川端古墳	128	五良谷古墳群第11号墳	184	三田町	240	唐崎群集墳
18	青野城山古墳群	74	溝ノ上古墳群第13号墳	129	五良谷古墳群	185	池ノ谷古墳	241	尼崎学園古墳群
19	城山付通り古墳群	75	溝ノ上古墳群第14号墳	130	五良谷城跡	186	高野越古墳	242	城谷古墳群
20	タカミヤシキ	76	賀茂・溝ノ上城跡	131	貴志・樋戸	187	観音山古墳	243	中野駅北群集墳
21	泓	77	溝ノ上古墳群	132	與元古墳群	188	桑原城跡	244	中野道南古墳群
22	正福寺跡	78	加茂・小山城跡	133	矢ノ原古墳群	189	山田・寺ノ下	245	中野古墳群
23	乙原・宮ノ前	79	加茂・池ノ谷	134	貴志	190	山田古墳群第4号墳	246	北区№２
24	井谷古墳	80	上井沢・小屋垣内	135	稲田城居館跡	191	大濤古墳群	247	鏑射山
25	大戸ノ松古墳群	81	下井沢城跡	136	下深田・城戸	192	桑原	248	千刈採石場跡
26	角蓮寺古墳群	82	下井沢	137	下深田	193	川崎古墳群	249	香下城跡
27	沢古墳群	83	有鼻	138	下深田・大山	194	山田古墳群	250	旧香下寺址
28	井ノ草・森田	84	有鼻古墳群	139	大原城跡	195	桑原・平野古墳	251	木器1号窯
29	川向古墳	85	風呂ノ谷城跡	140	川除古墳群	196	下田中城跡	252	木器荘園内
30	畑ノ谷古墳	86	加茂・六地蔵	141	川除	197	対中	253	木器・宮北
31	赤子谷古墳群	87	加茂・吉田	142	下深田・坂ノ下	198	上上津北	254	木器城跡
32	新坂古墳群	88	加茂・大谷	143	本谷西古墳	199	竜ヶ坪	255	下槻瀬・灰ブ
33	大畑古墳	89	加茂古墳群	144	上野ヶ原古墳	200	上津	256	木器４号窯
34	角蓮寺古墳第9号墳	90	東野上・中尾	145・146	伊勢貝	201	茶臼山城址	257	蓮花寺中世墓
35	深崎古墳群	91	城ケ岡古墳群	147	小野・風呂ヶ谷	202	宅原遺跡群	258	下槻瀬・新井
36	前ノ谷古墳・遺跡	92	戎山古墳群	148	小野・風呂ヶ谷古墳	203	豊浦古墳群	259	井上古墳
37	地王堂古墳	93	青龍寺裏山古墳群	149	小野・岡谷	204	寺谷群集墳	260	出雲古墳
38	東仲古墳	94	福島・萬代	150	花山院菩提寺	205	長尾小学校裏古墳	261	浅倉古墳群
39	岡ノ谷古墳	95	福島・柴ヶ谷	151	下角古墳	206	奥田群集墳	262	大藪
40	八木ノ谷古墳群	96	萬代古墳群	152	清水古墳	207	定塚古墳群	263	大藪古墳
41	岡ノ谷	97	福島・長町	153	辻之浦古墳群	208	畑中	264	福田古墳
42	北台	98	平唐山	154	清原	209	炭焼群集墳	265	上槻瀬・池尻
43	平井	99	福島古墳群	155	川ノ上古墳群	210	天皇山古墳群	266	エン谷古墳群
44	井桶窯跡群	100	上龍王谷古墳群	156	西ノ曽古墳群	211	横山城跡	267	下里・大田口
45	井桶古墳群	101	福島・上龍王谷墳墓群	157	富士山古墳群	212	鉢屋群集墳	268	北ノ脇古墳群
46	乾窯	102	福島・切池	158	志手原・山崎	213	墓山古墳	269	塚本古墳
47	乾	103	福島古墳群	159	惣林古墳	214	尾張谷古墳	270	上四ツ辻古墳
48・49	溝ノ尾	104	大原古墳群	160	梅ノ木古墳群	215	普門邸	271	酒井・門田
50	南台	105	大原・根坂	161	茶臼山城跡	216	宅原城跡	272	十倉
51	溝向	106	大原・天神ノ尾	162	丸山古墳群	217	北神N.T.№４	273	十倉城居館跡
52	井ノ方	107	千ヶ坂古墳群	163	三輪古墳群	218	北神N.T.№１	274	見比1・2号窯
53	井ノ方窯	108	中西山	164	土ノ谷古墳	219	八景中学校南古墳群	275	北山
54	みどろ池窯	109	中西山古墳群	165	三輪・宮ノ越	220	北神N.T.№２	276	広沢塚跡
55	地福窯跡群	110	平方西	166	三輪・餅田	221	北神N.T.№３	277	内神古墳群第1号墳
56	庵ノ谷古墳	111	平方	167	寺ノ垣内廃寺	222	北神N.T.№10		

土しており、下相野・大藪遺跡では第２テクノパーク建設による試掘調査で多数の石器類が出土し、早期～前期を中心に複数の時期にわたると推定されている。青野川流域では溝ノ尾遺跡で早期～中期と想定される石鏃・尖頭器、下青野の前ノ谷遺跡（36）でも同時期と推定される石鏃、そのほか井ノ方遺跡（52)、乾遺跡などで縄紋時代と判断される石鏃等が確認されている。

後期の土器は大藪遺跡で出土しており、後期初頭の中津式から末葉の宮滝式まで続いている。後期は遺跡数が増え、羽束川流域では大藪遺跡のほかに酒井・門田遺跡（271）で福田ＫⅡ式土器が出土し、武庫川本流域では桑原遺跡（192）で福田ＫⅡから四ツ池式の範疇の、有鼻遺跡や西安・中筋遺跡で北白川上層Ⅰ式、加茂・六地蔵遺跡で北白川上層Ⅲ式の土器群、下井沢遺跡（82）で元住吉山Ⅰ式土器と石刀、井ノ草・森田遺跡（28）で後期の土器と石鏃が出土している。青野川流域では北台遺跡で北白川上層式土器が出土している。これらの遺跡はいずれも台地の縁辺部にあたる。また、今回報告の伊勢貝遺跡でも元住吉山Ⅱ式～宮滝式土器が出土しており、後期末葉に位置づけられる。黒川支流域では伊勢貝遺跡以外に縄紋時代遺跡は未発見であるが、この流域に他にも縄紋時代の遺跡が存在している可能性がある。

晩期では遺構・土器は先述の布木・堂ノ前遺跡で滋賀里Ⅲｂ式、武庫川本流域では対中遺跡（197）で長原式と弥生時代前期後半の土器があり、河内系胎土の土器も含まれている。藍本庄遺跡では晩期後半の小片土器が認められる。石器では、先述の川端遺跡で多数の石鏃があり後期を中心としているが、晩期も認められるようである。武庫川本流域の溝口遺跡では後期・晩期の多量の石鏃が出土しており、早期～前期とともに石器製作の場所であったことが推定されている。石器製作跡では、三田市の南に位置する神戸市北区においても竜ヶ坪遺跡（199）で確認されている。なお、神戸市北区の宅原遺跡（202）も縄紋時代から続く遺跡である。

弥生時代

今回報告の伊勢貝遺跡では弥生時代の遺構が検出されていないことから、三田市域の弥生時代の特質をあげるにとどめておく。

前期の遺跡には対中遺跡、貴志遺跡（134)、川原・早苗遺跡、平井遺跡（43）がある。三田市域の弥生時代遺跡は前期から始まるが、すべて後半に降る。対中遺跡や川原・早苗遺跡では縄紋晩期土器と共伴している可能性があり、同時性をうかがわせるものである。また、神戸市域では塩田遺跡（235）でも前期後半の土器が出土している。

三田市域の前期の遺跡は４遺跡にすぎないが、中期の遺跡は主要なものだけでも22遺跡にものぼり、その数は大幅に増大する。住居跡が発見された遺跡としては三輪・餅田遺跡（166)、天神遺跡、貴志遺跡、奈カリ与遺跡（123)、平方遺跡（111)、中西山遺跡（108)、有鼻遺跡、福島・長町遺跡（97）があり、住居跡以外の遺構や土器などが発見された主要な遺跡には三輪・宮ノ越遺跡（165)、川除遺跡（141)、古城遺跡（176)、下深田・坂ノ下遺跡（142)、下深田遺跡（137)、貴志・樋戸遺跡（131)、下深田・大山遺跡（138)、西山遺跡（116)、奈良山中央公園遺跡、上井沢・小屋垣内遺跡（80)、岡ノ谷遺跡（41)、泓遺跡、十倉遺跡（272)、田中・五ノ坪遺跡（７）があげられる。なかでも中期初頭（Ⅱ期）の遺跡では三輪・餅田遺跡や三輪・宮ノ越遺跡、古城遺跡などがあり、神戸市北区の塩田遺跡も含めて、それらの遺跡では地元である神戸市北区道場町道場から塩田付近で採取できる通称「塩田石」と呼ばれる、層状剥離の性質を持った、凝灰岩と頁岩または泥岩が互層となった堆積岩を素材とした石包丁製作がこの時期から行われている。この石包丁製作は三輪・餅田遺跡が著名であるが、塩田遺跡を筆頭に、中期後半の天神遺跡や川除遺跡で大量の未成品

が発見されており、福島・長町遺跡でも３点の未成品が出土しており、所属時期が不明であるが対中遺跡（前期末？）でも１点発見されている。これらのことから、神戸市北区も含めた三田盆地では少なくとも中期初頭頃から塩田石の石包丁製作を開始しており、それらは猪名川流域の摂津加茂遺跡・田能遺跡・勝部遺跡、六甲山南麓の本山遺跡・戎町遺跡や楠・荒田遺跡、明石川流域の玉津田中遺跡・今津遺跡・新方遺跡にまで未成品を含めた供給がされており、丹波市の春日七日市遺跡や大阪府茨木市の東奈良遺跡でも塩田石製石包丁が製品として発見されている。

また、中期初頭に出現した遺跡では、三輪・餅田遺跡や川除遺跡、貴志・樋戸遺跡も含めた貴志遺跡、古城遺跡も含めた天神遺跡のように、規模の縮小化がみられるものの、後期まで連続して中核となってゆく集落跡も出現しており、方形周溝墓も古城遺跡・天神遺跡、貴志・樋戸遺跡で築造されており、首長集団のような核となる集団が集落内に出現したことを物語っている。

一方、奈カリ与遺跡、平方遺跡、中西山遺跡、有鼻遺跡、奈良山中央公園遺跡、下深田・大山遺跡、西山遺跡のように弥生時代中期末（Ⅳ期）になって突如、丘陵上や台地上に出現する高地性集落が顕著に認められ、下西山遺跡（113）でも斜面からⅣ期の土器が出土していることから高地性集落であった可能性がある。この時期の低地に存在する遺跡は下深田遺跡、貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡、三輪・餅田遺跡、三輪・宮ノ越遺跡、川除遺跡、福島・長町遺跡、上井沢・小屋垣内遺跡など、低地性遺跡の数が減少しているわけではない。また、もともと台地上に存在した天神遺跡も低地性遺跡の範疇でとらえられよう。三田市域の高地性集落は、その数が多いものの、武庫川西岸の一定のエリア内に集中して存在していることが特徴としてあげられる。このことは、出現の段階ではその分布範囲はやや広いものの限定的であり、これら集落相互においてまとまりがあったことを示していよう。また、低地性集落に大きな変動が認められないことは、他地域の高地性集落出現時における集落の様相とは異なる点において三田市域における高地性集落の特質となっている。さらに、塩田石製石包丁生産が、低地性遺跡では前代に引き続き行われているのに対し、高地性集落内において行われなかったと想定できることは、機能や構成員といった集落自体の差に要因を求めるべきであろう。そのことは、高地性集落の消滅後の後期にいたっても、高地性集落が存在した地域やその近隣において遺跡数の増大が認められないことも理由とすることができるであろう。三田市域における高地性集落の出現は、他地域からの短期間の移住である可能性があることを指摘しておきたい。

後期には塩田石製石包丁生産が終息するが、鉄器の普及がその要因のひとつととらえられよう。後期から出現する主要遺跡のうち後期後半や後期末を含めても桑原遺跡、高次・北ノ垣内遺跡（168）、加茂・六地蔵遺跡（86）、十倉遺跡（272）、伊勢貝遺跡をあげうるにとどまり、断絶していた対中遺跡や後期前半を欠くが、天神遺跡、貴志遺跡、三輪・餅田遺跡、三輪・宮ノ越遺跡、川除遺跡、上井沢・小屋垣内遺跡など、多くの集落跡は前代から引き続き営まれている。しかし、多数の方形周溝墓が築造されていた天神遺跡では認められなくなる。その一方で、後期末から古墳時代初頭には川除遺跡や平唐山墳墓群（98）のように巨大な円形墳丘墓（周溝墓）、方形の墳丘墓群を営むようになり、円形墳丘墓に葬られる首長個人の台頭や、方形墳丘墓群にみられるような首長集団の出現を読み取ることができるであろう。川除遺跡の円形墳丘墓は集落内に存在していることからその被葬者である首長の所属集落が明確にできるが、平唐山方形墳丘墓群のように丘陵上に存在する場合は、被葬者である首長集団の居住集落を特定することはむずかしい。この点については平唐山墳墓群のような円形墳丘墓を核として方形墳丘墓群を構成したのは複数の集落にまたがる首長および各集落の首長層であって、一集落の枠を超えた集落群としてのまとまりを考えておく必要があると思わ

第２図　三田市域の高地性集落の位置関係（縮尺：1/20,000）

れる。また、丘陵尾根上に立地し、やや時期が降ると思われる神戸市北区定塚古墳群（207）や円墳の奈良山１号墳（118）は、平唐山墳墓群の中核である円形墳丘墓の周囲に存在する方形墳丘墓群と同様の被葬者像がさらに独立化した状況を想定しておきたい。

古墳時代

古墳時代では、今回報告の伊勢貝遺跡は中期末～後期の集落関係遺構に限られることから、関連する事項について記述することとする。

三田市域の古墳時代中期末～後期の竪穴住居跡が検出された集落跡は、武庫川本流域では桑原遺跡、川除遺跡、貴志・下所遺跡（127）、貴志・樋戸遺跡、平方西遺跡（110）、西山遺跡（116）、下西山遺跡（113）などがあり、青野川流域では平井遺跡（43）、溝ノ尾遺跡、岡ノ谷遺跡（41）があげられる。川除遺跡で13棟と多くの竪穴住居跡が検出されている以外は各遺跡で１～数棟に限られている。したがって、古墳時代集落の様相はいまだ明らかにすることができない。

一方、三田市域では約600基の古墳の大半が古墳時代後期の所産であり、後期でも後半の６世紀中葉以降の古墳の主体部は木棺直葬から横穴式石室へと変化している。しかし、この変化は武庫川西岸ではほとんど認められないことが指摘されている。三田市域で調査が行われた横穴式石室のうち、最も古く位置づけられるのは上野ヶ原古墳（144）と沢山１号墳および茗荷谷３号墳（４）である。茗荷谷３号墳の石室は片袖で奥壁幅が2.02m、沢山１号墳の石室も片袖で幅2.1m、上野ヶ原古墳の後円部側石室は両袖で幅1.89mとなっており、これらの石室はＴＫ10型式期～ＭＴ85型式併行期と判断される。そのほか、ＭＴ85型式併行期と判断される石室は、宮脇８号墳（70）が両袖で幅2.2m、宮脇12号墳（70）後円部石室が両袖で幅1.93m、川

ノ上２号墳（155）が1.96m、岡ノ谷古墳（39）が片袖で幅1.95m、東仲古墳（38）が片袖で2.06m、福島13号墳（99）が片袖で1.6m、上野ヶ原古墳前方部石室が両袖で1.45mであり、ＭＴ85型式併行期～ＴＫ43型式期の石室では、宮脇13号墳（70）が片袖で幅1.85m、福島24号墳（99）が無袖で1.5m、次いでＴＫ43型式期の石室は、東家地古墳（５）が片袖で1.7m、高川１号墳が片袖と推定され幅1.5m、道東古墳（65）が片袖で1.5m前後、八木ノ谷１号墳（40）が両袖で幅1.5m、やや時代が降る八木ノ谷２号墳では無袖で幅1.2m、時期の限定が難しいが中西山３号墳（109）は両袖で幅1.75mである。このように、６世紀後半でも時代が下がるにつれて石室幅も縮小してゆく傾向が読み取れる。その直後の資料には恵まれないが、７世紀中葉のＴＫ46型式期では、落合古墳が無袖で幅1.1m、陶棺出土の博地谷古墳（60）が無袖で幅0.73m、青龍寺裏山１号墳（93）は無袖で幅0.92mであり、詳細時期が不明であるものの、青龍寺裏山２号墳がＴＫ46型式期であることからほぼその時期と推定される。この石室縮小傾向は、播磨加古川流域の石室検討結果の縮小第３段階と大きな齟齬は認められず、むしろ合致している状況に近い。

伊勢貝遺跡の約200m東方の丘陵尾根突端には、小野・風呂ヶ谷古墳（148）が存在する。墳丘上には祠が存在し、西側は崖面となっており、横穴式石室の壁体外面が露出している。石室内は土砂で埋もれているため石室形態および規模は不明であるが、伊勢貝遺跡で検出された竪穴住居跡の時期がＴＫ47型式期～ＭＴ15型式期であり、この時期の古墳であればほぼ木棺直葬であり、横穴式石室である可能性が極めて少ないことから、被葬者と竪穴住居跡の関連はほぼ認められない。ただし、土坑や柱穴からＭＴ85型式併行期～ＴＫ217型式期の須恵器が出土しており、古墳の推定時期に該当する時期にも集落として存続していた可能性が高いことから、風呂ヶ谷古墳の被葬者が伊勢貝遺跡に居住していた可能性もある。

奈良時代以降

伊勢貝遺跡では奈良時代以降の遺構としては平安時代末～鎌倉時代、室町時代、江戸時代以降の遺構・遺物に限られることから、関連する事項について記述する。

平安時代末～鎌倉時代初頭の遺跡では、対中遺跡で掘立柱建物跡９棟と井戸が検出されている。同時期の遺物に墨書土器があり、井戸からは蘇民将来の呪符木簡が出土している。また、窯跡では井ノ方窯跡（53）や見比窯跡群があり、井ノ方窯跡に近接した溝ノ尾遺跡では同時期の掘立柱建物跡も検出されている。見比窯跡群（274）では２基の窯跡が推定され、須恵器埦や皿、鉢が焼成されている。形態的には鎌倉時代の所産と思われる。一方、川除遺跡では60棟にもおよぶ掘立柱建物跡が検出されており、それらは９群に分けられてそれぞれが屋敷ととらえることができるようである。貴志・下所遺跡では木棺墓が検出され、白磁碗と土師器小皿が副葬されていた。

鎌倉時代後半から室町時代前半の東向・地蔵家地遺跡（９）では掘立柱建物跡に接して方形竪穴建物跡が検出され、農作物や農具を保管する倉庫と推定されている。

南台遺跡（50）では甕に入れられた銭埋納遺構が検出され、6,200枚以上の中国銭が100枚前後の単位で緡銭のかたちになっており、埋納時期が14世紀前半まで遡る可能性が指摘されている。

室町時代の亀ヶ森墳墓は、周囲を土塁と溝で方形に区画した墳墓が２基発見されており、一辺は15mと13mにもおよぶ。内部には木棺墓や火葬墓が検出されている。

平安時代末から室町時代の中世丹波焼の窯跡は篠山市今田町域に存在するが、上相野の大武古窯跡で灰原が確認され、14世紀後半から15世紀初頭の丹波焼が発見されている。なお、近世の丹波焼窯跡は三田市域で数多く存在している。

第２章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

遺跡の発見

伊勢貝遺跡の発見は、昭和49年３月の青野ダム建設用地の埋蔵文化財分布調査による。

青野ダムは武庫川の支流である青野川・黒川を利用して計画された多目的ダムで、その予定地内に磯崎正彦氏を中心とした青野ダム建設予定地内埋蔵文化財分布調査団によって101ヶ所の包蔵地が記録された。今回報告する伊勢貝遺跡の範囲は、その中の黒川最上流部の小野において、須恵器・土師器・陶磁器片の他、土錘やサヌカイト製の石鏃が採集され、AO－3・4地点として登録されている。

この分布調査の結果を受けて、昭和51年に青野ダム埋蔵文化財発掘調査団によって、小野地区の遺跡範囲確認調査が実施された。黒川左岸の河岸段丘や沖積低地に約30ヶ所の試掘坑を設定した結果、小野集落の南西部の東西100m、南北250mの範囲で、土坑・柱穴などが検出された。しかし、遺構密度も低く、遺物量も少ないことから、遺跡範囲を把握するために第２次確認調査が必要であると判断された。

第２次確認調査は、昭和52年に兵庫県教育委員会によって実施され、一部拡張して遺跡範囲の絞りこみと、遺跡の性格把握に努めた。集石の見られる円形状遺構や柱穴・土坑などが検出され、縄紋時代後期の粗製深鉢形土器、7世紀後半の須恵器杯や近世の陶磁器も出土しているが、10～12世紀の須恵器椀、13世紀の丹波焼など平安時代後半から中世にかけての時期を中心とした集落跡が南北100m、東西40mの範囲に存在することがわかった。また、南側にも狭い範囲ではあるが遺跡が存在することが推定された。

さらに昭和53年にはAO－103地点の調査として、今回の本発掘調査地点を含めた範囲の確認調査を実施し、古墳時代前期の土器が出土する遺構を検出している。

これらの調査の記録は青野ダム建設に伴う調査報告或いは概報として公表されており（兵庫県教育委員会1979・1987）、伊勢貝遺跡は縄紋時代・古墳時代前期・古墳時代後期・中世前半・中世後半といった様々な時期の歴代遺跡であることが知られていたが、その内容や性格などは不明であった。

青野ダム建設工事に際しては工法変更をおこない、伊勢貝遺跡は干し上げ工事によって保存されることとなった。そのため本格的な発掘調査は実施されていない。

第２節　調査の経過

分布調査

兵庫県阪神北県民局県土整備部三田土木事務所では（主）三田篠山線三田市小野県単独道路改良事業を計画しており、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では平成14年度に延長1.4㎞にわたって道路改良予定地内の分布調査（遺跡調査番号2002153）を実施した。

当該地では現県道より西側の水田部分にバイパスとして新設されることとなっており、分布調査の結果、

伊勢貝遺跡を含んだ範囲で土器の散布が認められた。

確認調査

分布調査によって遺物の散布が認められた周辺は、農業基盤整備事業により旧地形が大きく改変されていた。路線内における確認調査は平成14・15年度に４回にわたって実施された。

その結果、青野ダム建設の際に遺跡範囲とされた範囲内の水路と水田畦畔に挟まれた一筆分の用地において土坑・ピットと焼土が確認され（遺跡調査番号2002175)、本発掘調査が実施されることとなった。また、同じく青野ダム建設の際に遺跡の存在が推定されていた南側の地点でも遺跡の可能性が考えられたが、再確認調査（遺跡調査番号2002192）の結果、大きく地形が改変されており、工事範囲内には遺跡は存在していないことが判明した。

本発掘調査範囲の南側の確認調査（遺跡調査番号2003215）では、遺構・遺物包含層が検出された前回の確認調査に接した直近の試掘坑からも遺物包含層や遺構面が検出されたが、遺構は確認されなかった。そのためさらに隣接して試掘坑を追加したが、遺構面の広がりも認められなかった。さらに南側では急激に地形が低くなり、厚い洪水堆積物が広がっていることが判明した。

本発掘調査範囲の北側も同様に洪水堆積物が認められ、遺構面・遺物包含層は認められなかった（遺跡調査番号2002220)。

これらの確認調査結果から、本発掘調査範囲が決定された。

本発掘調査

本発掘調査は平成15年12月25日から開始し、平成16年２月27日に終了した。発掘作業請負工事は㈱白原工務店、空中写真測量は株式会社八州に委託した。

年末に調査開始日を設定されたため、年内は調査範囲の測量をおこない、実際の掘削作業は年明けの平成16年１月６日から開始した。

時折雪が舞い、水が凍結する中、作業は進んだが、南端部からさらに南へと広がる遺構が検出され、協議の結果、水路直近まで調査区を拡張することとなった。この拡張区では中世の遺構に削平されてはいたが、古墳時代の竪穴住居跡が検出された。この調査において出土した遺物はこれまでの調査で知られていたものと大きな相違はなかったが、伊勢貝遺跡として初めての広範囲の本発掘調査であったことから、古墳時代の竪穴住居跡を検出するなど、遺跡の性格を知る上で重要な資料を得ることができた。

さらに１月末になって調査区内の段差断面の下層に遺物包含層が広がることを確認し、縄紋時代の層であることが判明。対応策を協議した。

２月２日には上面の空中写真測量を実施する予定であったが、雨のため延期、３日後の２月５日に前日の雪が解けるのをまって空中写真測量を実施した。

２月10日には地元三田市小野小学校の五年生、六年生約80名や、三田市文化財ボランティア等約30名の見学を受けた。

翌11日には地元説明会を実施。近隣の方を中心に約70名の参加を得た。

遺構断ち割りを終え、部分的に広がる下層の縄紋時代面の調査を実施。石器をはじめとする多くの遺物が出土するが、明瞭な遺構は検出できなかった。

2月26日に中間検査を受け、翌27日に現場を撤収し、神戸市兵庫区の埋蔵文化財調査事務所へ戻った。

各調査の担当者等は以下のとおりである。

表2　調査概要一覧

調査種別	遺跡調査番号	調査年月日	調査面積	調査担当
分布調査	2002153	H14年9月25日	14,400㎡	深井明比古
確認調査	2002175	H14年11月5・6日	96㎡	渡辺　昇
確認調査	2002192	H14年11月25・26日	100㎡	吉識雅仁
確認調査	2002220	H15年1月22日	40㎡	渡辺　昇
確認調査	2003215	H15年11月26日	40㎡	渡辺　昇
本発掘調査	2003228	H15年12月25日～H16年2月27日	1,015㎡	岸本一宏、別府洋二

整理事業

平成21～23年には、兵庫県加古郡播磨町大中の県立考古博物館および明石市魚住町の魚住分館にて、出土遺物の水洗い、ネーミング、接合・補強、復元、保存処理、分析や遺物実測、写真撮影、トレース、レイアウト等の整理作業を行い、報告書を作成した。

平成21年度

担当者　　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第1班　　岸本一宏

調査第2班　　別府洋二

整理保存班　　森内秀造、岡田章一、菱田淳子、篠宮　正、岡本一秀

水洗い・ネーミング　；　家光和子、小野潤子、小林陽子

接合・補強　；　眞子ふさ恵、島村順子、蔵　幾子、伊藤ミネ子、早川有紀、荒木由美子、藤池かづさ、嶺岡美見、小谷桂加

金属器保存処理　；　大前篤子、藤井光代、長濱重美、前田恵梨子、有馬利耶子

平成22年度

担当者　　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第1班　　岸本一宏

調査第2班　　別府洋二

整理保存班　　村上泰樹、岡田章一、篠宮　正、山本　誠

実測・写真整理・図補正　；　岡田美穂、古谷章子

復元　；　眞子ふさ恵、三好綾子、斎藤有紀、奥野政子、藤尾裕子

写真撮影　；　㈱タニグチ・フォト

分析鑑定　；　株式会社パレオ・ラボ、株式会社加速器分析研究所

平成23年度

担当者　　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

調査第１課　　岸本一宏、久保弘幸

調査第２課　　別府洋二

整理保存班　　村上泰樹、篠宮　正、山本　誠、深江英憲、

蛍光Ｘ線分析　；　岡本一秀

トレース・レイアウト　；　八木和子

木製品保存処理　；　今村直子、前田恵梨子、村上令子

［参考文献］

兵庫県教育委員会　1979 「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報（2)」

兵庫県教育委員会　1987 「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1)」 兵庫県文化財調査報告書第50冊

整理作業風景

第３章　遺構

第１節　古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には竪穴住居跡や土坑、柱穴などがあり、遺物が出土した遺構には、SH１およびSH２、SK８・13・15・20、P28・42・43・50・54・70・74があり、混入して出土したと判断される遺構にはSK10、SE１・６がある。

竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区の南端および中央部の２箇所で検出した。どちらも平面方形を呈し、北辺に造り付けの竈を有するものである。

SH１（図版３、巻頭図版２、写真図版５～７）

調査区南端に位置し、その一部が検出されたことから、遺構全体の調査をおこなうべく調査区を南側に拡張した。しかし、SH１の中央部以南は水田間の水路によって深く削られており、すでに破壊されていたことが判明したため、調査区の拡張部分は幅約1.5m、長さ約６mにとどまった。また、本住居跡の西側は中世の遺構であるSX２と重複していたことから、わずかに壁の一部分を確認できたにすぎない。また、住居跡内では竈１基と柱穴が１箇所で検出された。

本住居跡は壁方向が座標方位方向にほぼ合っているが、わずかに14°程度時計回りに振れている。北壁はほぼ完存しているが、西側コーナー部分が緩やかな丸みをもっている。確認できた東西方向の残存規模は、検出面では3.76m、床面では3.46mである。西側のSX２の西肩以西には本住居跡はおよんでいないことから、床面の残存部分からさらに西側に大きくひろがることはないものの、若干大きくなる可能性が高い。

一方、南北方向では住居跡本体の遺存状況が悪く、削平を免れた床面中央部が南側に尖るように張り出している。その部分での床面残存長は2.3mを測る。また、壁面は東側が最も残存していたが、その長さは1.1mにすぎない。床面北西部に存在していた柱穴は掘形径47㎝、検出面からの深さは42㎝であった。

なお、本住居跡の検出面は南に傾斜しており、壁上部の検出面は北端と南端では最大で30㎝の高低差がある。北端での検出面の標高は、186.0mであり、検出面から床面までの深さは最大で29㎝である。

竈は北側壁のほぼ中央に位置するが、袖の方向は住居跡北壁とは直交せずに若干振れて座標方向とほぼ等しい。袖部分外側での幅は70㎝、残存長は63㎝である。竈上部は崩落しており、崩落土の下面には土師器甕の破片が多く認められた。竈の燃焼部は赤化しており、平面的には径約45㎝の円形を呈している。赤化部分は検出できた竈袖部分南端よりも15㎝南側に張り出していることから、赤化部分の南端付近に竈焚口が存在していたと想定できる。そうすると、屋内での竈南北長は約80㎝となろう。赤化部分の北端には深さ約４㎝、径約15㎝の円形の小穴が認められた。この位置は竈のほぼ中央部にあたり、たとえば石製の支脚を立てるための掘形であろう。そうすると、この竈の掛け口は１口であった可能性がある。

赤化部分から南側へは焦土が帯状に遺存しており、竈掻き出しのものと思われるが、その遺存部分の長さ

が約1.2mと非常に長い。なお、焦土の東側の床面からは土師器甕と須恵器甕の破片が出土している。

本住居跡は出土土器の年代から、ＭＴ15型式期と判断される。

SH２（図版４～６、巻頭図版３、写真図版８～11）

調査区の中央部西端に位置する、平面矩形の竪穴住居跡である。調査時には東西２棟の竪穴住居跡が重複しているものと判断していたが、検討の結果、住居跡は単独である可能性のほうが高いと思われる。住居跡の重複関係については、埋土の上面で精査をおこなったが、識別が非常に難しく、確たる証拠に欠けるものであった。ここでは、単一の住居跡として報告する。

平面的には、東側壁の全体、北側壁のほぼ全体と南壁・西壁の一部を確認することができた。それによると、東西規模約7.7m、南北規模は西部で最大約5.6mの長方形を呈し、43㎡強におよぶ大規模な床面積を有しており、住居跡の隅部分はやや丸みをもっている。検出面から床面までの深さは約13㎝と浅く、最も深く遺存していたのは北壁付近である。このことは、調査区の北側が高く南側が低い地形と関係しており、検出面においても住居跡北壁と南壁では15㎝の差をもって南側が低くなっている。床面については、西側では北側と南側の差が約１㎝と水平であるが、東側においては北と南の差が約11㎝とやや大きい。東西については最大でも６㎝の差しか認められない。

床面においては、北西部で貼床部分が明瞭に遺存していた。貼床が残存していたのは、北壁ぎわ中央部に存在する竈を含めた部分から西側の部分で、住居跡北部に限られている。その幅は1.2m～1.6mが大半で、東西長約5.2mにわたって10YR4/2.4灰黄褐色の極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫を含んだ層が３㎝程度の厚さに貼られていたものである。肉眼の感覚では濁茶褐色を呈していた。西端は水田構築のため大きく削平を受けているが、ほぼ住居跡西壁まで貼られていたものと推定できる。また、柱穴は北東隅部分の１箇所で検出できたのみであり、精査したものの、それ以外の柱穴を検出することができなかった。検出した柱穴は掘形の長径48㎝、短径34㎝、深さ33㎝で、北東隅に非常に近い部分に位置している。主柱穴の可能性があるが、他に柱穴を検出できなかったことから、後世のものである可能性も含め、判断することができない。床面からは竈の東側で土師器甕が検出された。なお、本住居跡南西外側で焼土のひろがりが認められたが、それに関連する遺構は検出できなかった。

本住居跡では竈は合計３基検出することができた。ただし、いずれも同時に存在していたとは考えられない。最も西側の竈（竈ａ）は北側壁のほぼ中央に位置しているが、袖部分の方向はSH１の場合と同様に壁とは直交せず、やや南東方向に振れている。竈ａは最終段階のものであるが、そのすぐ東側で袖部分の下層から検出された焦土および赤化部分はひとつ前の段階の竈跡（竈ｂ）と思われる。さらにその部分から約１m東側でも竈（竈ｃ）が検出された。竈ｃは西側の袖部分が削平されており、最も早い段階の竈と推定することもできるが、東側の袖部分が低いながらも遺存していたことから、竈ａと同時に存在していた可能性もある。

竈ａは袖部の残存長約102㎝、最大幅約92㎝で、床面から約８㎝の高さが遺存していた。袖部の南半部には東西約56㎝、南北約42㎝の楕円形に焼土が認められたことから燃焼部と判断でき、この赤化部分の東西径が竈内部の幅であると推定できる。また、この焼土の南側には焼土および袖部を避けるようにして焦土層が三日月形に広がっており、その東西長は約112㎝、南北幅は最大約26㎝である。

燃焼部すぐ北側の煙道部は削平のため遺存していなかったが、その北側には東西にのびる幅約38㎝の溝状

遺構が存在していた。この溝は住居跡北壁と平行しているうえにこの部分の住居跡北壁がこの溝を避けるように住居跡内側に入り込んでいることや、溝内に土師器甕および須恵器片が含まれていたこと、溝底が住居跡床面の高さとほぼ等しいか若干低いこと、埋土は焦げたような茶褐色系の色調を呈していたことなどから、煙道と考えられる。この煙道は竈ａの北側から東側に2.9m以上も長くのびていると同時に、西側にも90㎝程度のびている。竈とあわせれば「Ｔ」字形に近い形状であるが、「Ｌ」字形煙道に分類されるべきものであろう。煙道の残存長は最大で東西約4.4mを測るが、東端は後世の撹乱により破壊されている。断面形は「Ｕ」字形に近く、竈付近では底が平らで箱形に近い。検出面からの深さは約５～10㎝であり、底の高さは西側が低く東側が高いことが特徴である。竈ａ北側と煙道東端での溝底の高さの差は約６㎝を測る。竈ａよりも東側にあたる煙道の大部分は住居跡北壁から約30㎝の間隔をおいて壁と平行方向にのびているが、竈よりも西側では住居跡壁とは約10㎝に満たない間隔である。

煙道部がいわゆる「オンドル」であるとするならば、屋内にベンチ状の段が存在していたことになることから、煙道が存在する部分の南側にあたる住居跡北壁と称した部分は、厳密には住居の北壁ではなく、住居跡内「オンドル」の住居側側面下端にあたると判断できよう。したがって、住居跡の北壁は「オンドル」の北側に存在していたと想定でき、煙道北側の肩のラインが煙道よりも西側にあたる住居跡北壁のラインとほぼ一直線に揃っていることは、このことを示していると考えられる。

竈ｂは竈ａの東側袖部の下層で検出した。竈ｂの袖部は遺存していなかったが、長径約70㎝、短径約48㎝で、検出面から約８㎝の深さの浅い落込が検出され、その内部の北寄りの底で円形の焼土面が認められた。焼土は径約24㎝のほぼ円形に遺存していた。この落込の主軸は住居跡北壁ラインよりも若干振れており、竈ａの主軸に近い。竈ａが構築される前に存在していたものである。

竈ｃは最も東側で検出したものであるが、東側の袖部のみ検出され、平面形状が不完全なものである。また、燃焼部である焼土面が検出されなかったことから、竈ではない可能性も残す。東側袖部と推定される部分の長さは約80㎝である。検出面での高さは床面から最大で６㎝ほどであることから、竈であるとしても廃棄されたものであり、竈ａとは同時存在していなかった可能性もある。

以上がSH２およびその付属施設に関するものであるが、以下には本住居跡が複数の重複した住居跡ではなく単一である可能性が高いとするにいたった理由について述べる。

本住居跡SH２は、SH１と同様に北側に造り付け竈をもつが、煙道と判断される部分が住居跡北壁にそって東側に長く続いており、「Ｌ」字形に近い煙道を有する「オンドル」構造状となっている点に特徴がある。ただし、煙道は西側にも若干のびていることから、正確には「Ｔ」字形に近いものである。この煙道が「オンドル」構造とすれば、屋内に床面よりも１段高い部分が存在し、煙道の外側に住居の壁が存在していることになる。このことから、仮に竈ａの東側を東壁とした１棟とその東側の１棟、煙道の西端部を西壁とした１棟とその西側の１棟といった、２棟の竪穴住居跡が重複しているとすれば、煙道部の西端が住居跡の西壁にほぼ等しいと判断することができるものの、煙道部の途中部分に住居跡東側の壁が存在する可能性は極めて低いことになる。一方、竈周囲に認められた貼床部分は、その南北幅をほぼ一定にしたまま住居跡西端まで連続して続いている。このことは、煙道部の西端に住居跡の西壁が存在していたとの仮定と齟齬が生じる。さらに、煙道部西端から西側の住居跡北壁は、煙道部と約10㎝の間隔をおいたのち、北側にひろがっている。このように、住居跡北壁ラインは煙道部北側ラインと一直線でつながるように同じ位置まで北側にひろげられていることは、これらが同一住居跡であることを示す材料として極めて示唆的である。

以上のことから、本報告ではSH２を単一の住居跡ととらえたのであるが、そうした場合東西方向の規模が８ｍに近くなり、南北６ｍ弱を考慮すれば、非常に規模の大きな住居跡となる点で疑問が生じることも免れない。そうした場合、逆に貼床部分の連続を誤認とすれば、煙道部の西端を西壁とする住居跡とその西側に存在する別の住居跡がその一部を重複して存在していたとすることもできよう。

この点については今後の検討の余地が十分残されている。

柱穴

Ｐ50（図版７、写真図版13）

SH１とSH２のほぼ中間地点の東寄りに位置し、古墳時代の土器が出土したＰ42・43に近接して存在する、楕円形に近い平面形の柱穴状遺構である。検出面での南北方向の長径は41㎝、短径は35㎝で、検出面からの深さは約９㎝を測る。底は丸みがあり椀形に近く、埋土は10YR3/4暗褐色の中砂混じり極細砂である。この埋土上部の検出面に近い高さで、南側に偏って集中的に須恵器・土師器の甕片が出土した。この遺構の断面形状および柱痕が認められなかったことから、柱穴である可能性は低いと判断される。

Ｐ60（図版２、写真図版13）

SH２の南東側、南壁のすぐ南側に存在する円形の柱穴で、直径は33㎝を測る。この柱穴の南壁に立てかけるようなかたちで鉄鏃が１点出土した。鉄鏃の上部は検出面に非常に近い深さであった。柱痕は検出できなかったが、柱穴とすれば掘形に含まれていたものとすることができるであろう。

Ｐ70（図版２、写真図版13）

SH２の北側約６ｍの位置で検出した柱穴であるが、土坑の可能性が高い。直径43㎝前後で検出面からの深さは32㎝を測る。底は平坦に近く、上下２層の埋土層が認められた。上半は褐色系、下半は黄褐色系の土層である。底から約６㎝上部の下層中からは長さ23㎝の土師器甕がほぼ完形で横位になって検出された。甕の体部径は約22㎝であることから、甕の上部である体部の一部は上層埋土にまでおよんでいる。平面的には東側に偏った位置に存在し、柱痕が認められなかったことから土坑である可能性が高くなった。住居跡SH２の時期よりも古く、合わない。

第２節　平安時代以降の遺構

今回の調査では、古墳時代から近世に至る遺構がほぼ同一面で検出され、また一部下層に縄紋時代の包含層が存在した。出土土器には平安時代に遡る緑釉陶器などが存在するが、時期がある程度認定できた遺構には鎌倉時代に属するもの、室町時代に属するもの、江戸時代に属するものがある。

掘立柱建物跡

調査では多くの柱穴（Ｐ）が検出された。柱穴群は調査区南側部と中央西寄りに集中している。旧水田が一段下がる北西部や、北端部・中央東寄りのように地形が高い部分ではほとんど検出されなかった。後世の

削平によって失われたことが大きい。

調査段階では掘立柱建物跡（SB）を復元することはできず、すべて図上の復元である。復元できた建物は南端部に集中している。

SB 1（図版10、写真図版14）

SB 1 は、その一部が調査区外西へ広がるもので、3 間（4.8m）× 1 間（1.6m）＋ α の側柱建物を復元した。柱間は1.6mの等間である。建物の軸をN40°Wにもち、他の掘立柱建物跡よりもやや西へ振っている。

比較的大型の柱穴で構成されており、北東隅の柱穴で直径約45㎝、深さ約45㎝を測る。

P29からは古墳時代の土器片が出土しているが、遺構は中世に属するものであろう。

SB 2（図版10、写真図版14）

SB 2 もその一部が調査区外西へ広がるもので、5 間（11.2m）× 3 間（5.4m）＋ α 間が復元でき、最も規模の大きな建物となる。柱間は1.8〜2.2mに収まるが、一部不均質な部分がある。建物の軸をN10°Wにもち、隣接するSB 3 と近似する。柱穴の規模は不揃いで、最大径をもつP34で直径約40㎝、深さ約28㎝を測る。

P34から104の土師器小皿、P20から105の土師器皿、P18から106の土師器皿、P23から109の須恵器椀片が出土しており、これらの遺物は鎌倉時代に属するものであろう。

調査区南半部の西壁で検出されたP33は、SB 2 の建物の内部に位置するが、建物を構成する柱穴かは不明である。ほぼ褐色粗砂混り極細砂のベース面から切り込んだ直径35㎝、深さ48㎝の柱穴である。直径20㎝の柱根部のみ深くなり、埋土に礫や土器を含んでいる。柱根部から107の瓦器椀が出土している。この土層断面からもわかるように、調査区周辺では本来の遺構面である土壌層から遺構が掘られておらず、後世に削平されている様子が伺われる。包含層としている層も本来の土壌層ではなく、削平された面の上に新たに堆積した層であるらしい。

また、SB 2 建物内部で検出されたP28からは37の古墳時代須恵器杯が出土している。

SB 3（図版10、写真図版14）

SB 3 は、3 間（7.4m）× 3 間（6m）の側柱建物を復元した。柱間は東西が1.8〜1.9m、南北が2.3〜2.5mと異なる。建物の軸をN7°Wにもち、SB 2 と一致するが、柱通りは異なる。比較的小型の柱穴で構成されており、ほとんどの柱穴が非常に浅くしか残存しない。最も規模の大きいP26で直径約25㎝、深さ約35㎝を測る。

P26から111の須恵器鉢が出土している。鎌倉時代初頭頃のものである。

SB 4（図版10、写真図版14）

SB 4 はその一部が調査区外東へ広がるもので、3 間（6.8m）× 1 間（2.0m）＋ α 間を復元した。建物の軸をN17°Wにもち、SB 2 ・3よりもやや西へ振っている。柱穴の規模は不揃いで、北西隅の柱穴で直径約25㎝、深さ約10㎝を測る。

柱穴

この他、構成する建物の復元ができなかった柱穴も多く検出されたが、柱痕が見つからず小型の土坑とするほうがよいものも含まれる。

この中で、古墳時代の遺物が出土したものにはＰ28・42・43・50・54・60・70・74があり、鉄鏃が出土したＰ60やＰ70は前節で報告している。

また、平安時代以降でも青磁碗が出土したＰ41など図化できる遺物が出土した柱穴には、Ｐ3・7・10・11・16・19・35・36・39・40・41・61がある。これらの柱穴では出土した土器も破片であり、意図的に埋納した状況のものはなかった。Ｐ3からはＭ４の角釘も出土している。

Ｐ77・78・79のように底に礎盤石が置かれたものも認められる。

Ｐ53（図版２、写真図版15）

SE３の東側に存在する遺構で、SE３に約半分切り取られたかたちで残存していた。平面形は円形で直径は約50㎝と思われるが、東西方向の残存幅は約20㎝である。検出面からの深さは11㎝で、柱根は認められなかった。埋土から鉄滓（Ｍ７）が出土している。

土坑

土坑（SK）は20基検出している。このうち当初SK２と呼んでいたものは、調査区を拡張して調査した結果、古墳時代の竪穴住居となりSH２と名称変更したため、SK２は欠番となった。

これらの土坑の内、SK８・10・13・15・20からは古墳時代の土器が出土しており、同時代の遺構の可能性が高いが、ここであわせて報告する。

SK１・3・4（図版11、写真図版16）

調査区の南端部で検出された。SK１は集石土坑SX２の北東部に、SK３は同じく北西部に繋がっており、土層観察による切り合い関係ではSK１がSK３・SX２埋土を切り込み、SK３もSX２埋土を切り込んでいたが、平面的には分別できなかった。SK１・３ともSX２のような礫は全く含まれない。

SK１は、2.4×1.65ｍの不整隅丸長方形の平面形をもち、深さが10㎝ほどの浅い土坑で、底や一隅に杭状の小柱穴が検出された。糸切りの須恵器底部が出土しているが図化できなかった。

SK３は、3.8×2.5ｍの不整隅丸長方形の平面形をもち、深さは約0.3ｍで、東の壁面に沿って杭状の小柱穴が並んで検出された。125〜129の土器が出土している。

SK４は、SK１の北東隅に接するように検出された小規模な土坑である。0.55×0.23ｍの隅丸長方形の平面形をもち、深さは10㎝ほどの浅い土坑で、北側に深さ0.2ｍほどの小柱穴を有する。縄紋土器らしい小片が出土しているが図化できなかった。

SK５（図版11、写真図版16）

SK５は、調査区南端の西寄りで検出された。集石土坑SX１に屈曲して繋がるSD１と同じ方向性を有する。両者は埋土や深さも近しい。2.0×2.2ｍの不整方形の平面形をもち、深さは約10㎝を測る。土坑の一部は西側調査区外へ続き、東へ突出する部分はSK３に切られているらしい。土坑内部には大小の礫が認めら

れたが、他の集石土坑ほど石が多くなく、また深さも浅いことから土坑とした。

130〜133の土器が出土している。

SK 6 ・ 7 ・ 9（図版 2 、写真図版16）

SK 6 ・ 7 ・ 9 は調査区南半部の東寄りで検出された、比較的浅い土坑群である。当初、木棺墓あるいは土壙墓の可能性を考慮して調査をおこなったが、墓址とする資料は全く得られなかった。

SK 6 は、南北方向に主軸を置く1.6×0.8ｍの隅丸長方形の平面形をもち、深さは 6 ㎝と浅い。埋土は10YR2.7/3暗灰褐色極細砂混り細砂（中砂〜φ1㎝小礫非常に多く含む）単層である。土師器鍋片や須恵器椀片が出土しているが図化できなかった。

SK 7 は、南北方向に主軸を置く1.4×1.0ｍの隅丸長方形の平面形をもち、深さは10㎝を測る。埋土は10YR4.3/1.6暗灰褐色極細砂混り細砂（中砂〜中礫多く含む）単層である。土師器鍋片が出土しているが図化できなかった。

SK 9 は、東西方向に主軸をもつ1.2×0.85ｍの長円方形の平面形をもち、深さは 9 ㎝と浅い。埋土は10YR4.4/2灰黄褐色極細砂混り細砂（中砂〜φ1㎝小礫含む、炭含む）単層である。遺物は出土していない。

SK 8（図版 7 、写真図版12）

SK 8 は調査区南半部で検出された。平面形が直径0.7〜0.8ｍの円形を呈しているが、深さ23㎝と皿状に浅く掘られた土坑である。埋土上層から平たい礫とともに23・24の古墳時代の土器が出土している。

SK10・14・18・19（図版 2 、写真図版12・16）

SK10・14・18・19は調査区中央部で検出された。東から西へと地形的に下る方向に一致し、細長い不定形を示すことから、削平を受けた自然流路の底辺部の残存の可能性が高い。

遺物はSK10からは45の土師器甕底部が出土している。SK14からも古墳時代と思われる土師器小片が出土しているが、図化できなかった。

SK11（図版 2 、写真図版16）

SK11も調査区中央部で、SH 1 とSX 4 に挟まれた位置で検出された。不定形の平面形をもち、深さは13㎝ほどを測る。土坑は一旦浅くなって、SH 1 の煙道の外側を囲むように広がっている。SK11内には散漫であるが集石が認められるが、意図的に配したものかはわからない。遺物は出土していない。

SK12（図版 7 、写真図版16）

SK12は調査区中央部で検出された。直径0.95ｍの円形の平面形をもち、深さは0.3ｍを測る。形態は多くの井戸状遺構と類似するが、埋土の状況が異なることから土坑とした。出土した遺物はサヌカイト片や縄紋土器小片で、図化できなかった。

SK13・15・20（図版 8 、写真図版12）

SK13・15・20は調査区中央部西寄りのSH 1 の南に接した位置で検出された。

SK13は、1.1×0.65ｍの長円形を呈した土坑で、中央部が深くなり、深さ約45㎝を測る。昭和53年度のＡＯ103地点の確認調査の際に32トレンチ内で一部検出された遺構である。17〜20の古墳時代の土器が出土した。

SK15は、0.9×0.55ｍの長円形を呈した土坑で、深さ約10㎝を測る。21・22の古墳時代の土器が出土した。

SK20は、確認調査の際に検出されていた遺構である。0.8×0.7ｍの隅丸方形の平面形をもつ。南側がやや深いが、8㎝ほどの浅い土坑である。25・26の古墳時代の土器が出土した。

SK16・17（図版２）

SK16・17はSE１・2の東に隣接して検出された。

SK16は、一辺が0.65ｍの隅丸方形の平面形をもち、深さが7㎝と浅い。土師器・須恵器小片が出土しているが、古墳時代のものの可能性が高い。

SK17は、SE２に切られている。残存長が1.7ｍで、深さは28㎝の皿状の土坑である。SE１・２やＰ67に切られる。古代から中世の土師器鍋片や須恵器椀片が出土するが、図化できなかった。

集石土坑

土坑の中でも意図的に石を配しているものを集石土坑（SX）とした。

SX１（図版14、写真図版18）

調査区の南西端で検出された。大半部は調査区外へ広がるものであろう。南北で２ｍ以上の規模をもつものと思われる。北側に近接する東西に走るSD１は、南に直角に曲がってこのSX１にあたるが、土層断面観察によるとSX１を切っている。但し、断面が凍結によって痛んだことから図化できなかった。15㎝ほどの深さをもつ土坑底と、北東隅部に礫が集中している。土坑底で検出された石は最大一辺が35㎝を超えるものが見られる。隅部のものは一回り小さい。

134〜139の土器が出土している。

SX２（図版12・13、写真図版17・18）

調査区の南端部で検出された。４×3.5ｍの隅丸方形の北側の短辺に突出部が付き、南東部に幅1ｍほどの溝状の落ち込みが流れ出ている。この溝状遺構の底はSX２の土坑底よりは浅いが、南側が徐々に深くなっていく。溝状遺構部は古墳時代の竪穴住居SH２を切って掘削されている。SX２の北端部では土坑SK１・３が上面を切っている。

SX２の土坑底はさらに一段深くなり、大小の石が集積されている。北辺には最大で長辺が48㎝ある山石を横方向に並べており、面をそろえている。但し石垣状に積み上げたものではない。東辺から南辺にかけては一辺が50㎝を超える山石が配されているが、この部分では面をそろえたものではない。その間には比較的小型の石が乱雑に置かれている。集石の下が最も深くなり58㎝を測る。

140〜145の土器が出土している。

SX１・２は後述するSX３・４とは立地や形態が異なっている。集落遺跡のある微高地の縁辺部に位置するこのSX２やSX１は、溝状遺構を周辺に伴うことから、用排水に関連した施設である可能性が高いものと

考えられる。

SX 3（図版14、写真図版18）

SX 3 はこれまで述べたSX 1 ・ 2 とはやや異なり、比較的小さな石を浅い土坑上面に集めたものである。調査区南半部の東寄りで検出された。

4.4×4.7mの隅丸方形を呈した深さ10㎝ほどの浅い土坑内に石混じりの土を入れた状態であり、 2 ～35㎝大の石は土坑底に貼りついているものではない。土坑底の偏った位置から直径50㎝、深さ20㎝と直径30㎝、深さ20㎝の柱穴が見つかっており、埋土が異なることからこの集石土坑は柱穴よりは新しい遺構である。集石内から中世丹波焼擂鉢146や近世丹波焼擂鉢147が出土しており、近世に属するものかもしれない。

SX 4（図版 7 、写真図版18）

SX 4 は調査区北半部の東寄りで検出された。他の集石土坑とは異なり、比較的小さな土坑内に石を入れているもので、後に述べる井戸（SE）とは埋土、形状が異なるものであることから、集石土坑とした。直径0.8～0.93m、深さ0.3mの皿状を呈する土坑内に最大で30㎝近い角礫を含めた多くの礫を詰め込んでいる。遺物は出土していない。

井戸

井戸（SE）とした遺構のほとんどは、平面形が円形の掘り方内に一回り小さい円形の別埋土が堆積するもので、水溜状の土坑である。一部にはシルト質の土を壁面に貼りつけており、水漏れを防ぐ措置と思われる、桶などを設置したような木質やその痕跡が確認できたものはなかった。出土遺物から見てすべて近世以降のものと考えられるが、SE 1 埋土からは弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器がまとまって出土している。湧水を求めて掘削した石組の井戸はSE 9 の 1 基のみである。

これらの水溜状の遺構は調査区上段で南北・東西のＬ字形に分布している。調査区の東側を走る県道側が近世においても屋敷表と考えられるため、これらの遺構は近世の屋敷裏に配されたものであろう。

SE 1（図版15・16、写真図版19）

調査区南半部西寄りで検出された。SE 1 は、直径1.9mの円形の土坑で、土坑中央部が直径1.0～1.2mの円形に一段深くなっている。最深部までの深さは0.97mである。底の一部にシルト質の土層が残るが、礫を多く含む土層が認められることから人為的に埋められたものであろう。

埋土からは丹波焼・伊万里焼・京焼等の陶磁器片や燻瓦片が出土しているが図化できなかった。他に38～44の弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が出土している。古墳時代の遺構か包含層を削った土で埋められたものであろう。

SE 2（図版15・16、写真図版19）

調査区南半部西寄りで検出された。SE 1 がSE 2 を切って構築されている。SE 2 は、径が2.1～3.0mの長円形をしたやや大きめの土坑内に、直径1.3m、深さ0.72mの円形の土坑を設けたもので、円形土坑の内面に黄褐色シルト質ブロックを多く含んだ土を貼っている。黄褐色シルトは底の部分では顕著ではない。

図化できた148の他、京焼系の椀や櫛引き卸目の丹波焼擂鉢などや瓦片の他、149の中世の丹波焼擂鉢などが出土した。近世に属する。

SE 3（図版15・16、写真図版19）

SE 3 は、直径1.45mの円形の土坑内面に20㎝ほどの厚さで黄褐色のシルト質の土を貼って、直径0.8mの円形の水溜状の土坑を設けたもので、黄褐色シルトは底の部分では薄くなる。内部は大小の礫をもって埋められている。150・151の土器が出土した。近世に属する。

SE 4（図版15・16）

調査区西寄りで検出されたSE 4 も直径1.3mの円形の土坑であるが、他の井戸と比べても非常に浅く埋土も自然堆積に近い。南側に偏った位置に一段低い部分がある。遺物は出土していない。

SE 5（図版15・16、写真図版19）

調査区西寄りで検出されたSE 5 は、長径が2.2mのいびつな形をしたやや大きめの土坑内の東寄りに、直径0.75m、深さ0.5mの円形の土坑を設けたもので、円形土坑の埋土下層には礫を多く含んでいる。152の土鈴や153～160の土師器、陶磁器が出土した。18世紀後半以降に属する。

SE 6（図版15・16、写真図版19）

SE 6 は、調査区の東寄りで検出された。直径1.9～2.4mの長円形の土坑で、中央部がわずかに深くなる。埋土の上層は大小の礫をもって埋められている。土坑の下層には黄褐色シルト層が堆積していた。

161の土師器皿が出土した。礫には石臼片(S57)が含まれていた。また鉄釉を施した丹波焼鉢や肥前系磁器の網手紋碗片も出土しており、近世に属する。

SE 7（図版15、写真図版19）

SE 7 は北西部下段の西寄りで検出されたが、直上まで削平されている。不定形の土坑底から礫が検出され、礫の下から木片が出土した。埋桶を礫でもって埋めたものの可能性もあるが不明である。他に遺物は出土していない。

SE 8 ・10・11（図版15）

これらは調査区北半部で検出された。

SE 8 は直径1.5～1.8mの楕円形の土坑で、深さは0.5mを測る。埋土の南側に礫が多く含まれるが、漏水防止のシルト層などは認められず、周辺の土と類似した土で埋められている。図化できなかったが、近世の陶磁器・瓦片が出土している。図化できた163は中世のものであり、混入であろう。

SE10・11は東寄りに並んで検出された。SE10 は直径が1.2m、深さ0.7m、SE11は直径1.5m、深さ★mを測る。この 2 基も周辺の土で埋められたものであろう。埋土に特徴的なものはない。SE11からは図化できなかったが、肥前系陶磁器の広東碗や網手紋椀、青磁碗片が出土しており、19世紀に入るものである。

SE 9（図版15、写真図版20）

SE 9 は調査区北西部の下段に降りた位置で検出された。直径3.2mの円形の掘方内に内径0.8〜0.9mの石組を有する井戸である。深さは検出面から2.1mまで掘削されており、直径20㎝ほどの礫を含んだ砂礫層に達し、現状でも湧水が認められる。

底の周囲には直径３〜５㎝、長さ55㎝ほどの杭を打ち込んでいるのが確認され、四隅に打たれていた可能性がある。底から0.5mの高さで、直径約14㎝、長さ約1.1mの4本の丸太材が井桁状に組んであった。各木材は、両端の同一面をＬ字状に切り込んで組み合わせてあった。石組はこの根太の上に積み上げているが、その下層にも部分的に石が積まれている状況が観察できた。井戸底には25㎝の厚さに粘土が堆積しており、明瞭な水溜は検出できなかった。根太下層の部分的石積みや杭は、井戸底を掘り直したものの可能性がある。

井側となる石組は、根太の上に1.45m、概9段に積まれるが、石の大きさは不均等であり、積み方も小口積みや横手積みが乱雑に組み合わされている。

埋土からは164の土師器炮烙の他、伊万里・丹波焼片が出土し、井戸底からは、腐朽の著しい棕櫚縄や円盤状の木製品など（Ｗ１〜３）が出土した。近世に属する。

第３節　縄紋時代調査区　（図版９、巻頭図版４、写真図版21・22）

SH 2 の北側に存在する土坑や柱穴を掘削している際に、埋土や地山である黒い土層から縄紋土器が出土していたことから、縄紋土器が出土する範囲についてさらに面を下げて遺物の採集および遺構存在の有無確認の調査を実施した。南北延長方向は約30mである。

調査の結果、確実に縄紋時代の遺構と判断できるものは検出されなかったが、上下層に分かれた縄紋土器包含層の両方から、比較的多くの土器が出土した。調査後の地形は凹凸が激しく、あたかも山からの土石流で埋められたような印象を受けた。しかし、土器は大きめの破片も多く出土していることから、土器を使用し、廃棄した当初の位置が調査地点からそう遠くない東側に存在していることが推定された。縄紋時代の遺構とは確定できないが、集石部分が１箇所認められ、その礫に混じって多くの縄紋土器が破片となって検出された。この集積の下部は土坑状の窪みとなっていた。また、SK102は、小さな谷川の痕跡のようにも見え、埋土から縄紋土器の破片が出土した。

縄紋時代の包含層は、北側は扇状地を流れる旧河道状の礫層までに限られ、南側は次第に薄くなって下層の礫層までで途切れる。検出面には礫群や土坑状の落ち込み、柱穴状の小穴も見られたが、人為的な遺構とするには躊躇される。遺物は細片が散漫に出土しているため、流されてきた状態と判断される。但し、炭や焼土片、多量のサヌカイトチップや石鏃・石錐などの石器が含まれていることから、東側の近接した位置に縄紋時代の集落が存在していたことを物語っている。出土した縄紋土器には巻貝を用いて施紋したものや、数条の凹線が巡らされているものがあり、縄紋時代後期末の元住吉山Ⅱ式〜宮滝式のものが大半を占める。

第４章　遺物

第１節　古墳時代の土器

遺構出土土器（図版17・18、写真図版24～27）

古墳時代の遺物が出土した遺構には、SH１およびSH２、SK08・13・15・20、P28・42・43・50・54・70・74があり、混入して出土したと判断される遺構にはSK10、SE１がある。

SH１出土土器（１～４）

１・２は須恵器坏蓋、３・４は土師器甕である。

１は竈の焚口付近の床面から出土したもので、口径10.8㎝を測る。天井部のヘラケズリ範囲は広い。２は住居跡内のSK２埋土から出土したもので、口径は12.4㎝を測り、残存器高は4.7㎝である。１に比べてヘラケズリの範囲はやや狭い。１・２ともにＭＴ15型式期と思われる。

３は口径9.9㎝で、短く外反する口縁部を有した小型の甕である。体部外面はタテハケ調整、内面はナデ仕上げである。内面の口縁部と体部との境には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。口縁部内面はヨコハケ調整である。体部外面には煤が付着している。４は口径11.6㎝を測り、体部内面はヘラケズリとしている。内面の口縁部と体部の境は口縁部下端が内側に突き出すと同時に、粘土紐の接合痕を明瞭に残している。器表が磨滅しているため調整痕は不明である部分が多い。

SH２出土土器（５～16）

５～９は須恵器、10～16は土師器である。５・７・８・13・15・16は住居跡埋土、６・10・11は竈構築土、９・12は竈の煙道部付近、14は床面直上からそれぞれ出土したものである。

５・６は坏蓋で、５の口径は10.9㎝、６は口径12.0㎝を測る。５の天井部の回転ヘラケズリの範囲は広い。６の断面はセピア色を呈している。ＴＫ47型式期の可能性がある。

７は無蓋の高坏で、口縁部はゆるやかに外上方にのびる。杯部外面には５～６条１単位の櫛描波状文をめぐらせている。回転ヘラケズリは波状文の直下まで達している。口径は15.9㎝を測る。杯部外面底部付近に、透孔を穿った際のヘラの痕跡が残存している。

８は口径16.6㎝の壺口縁部で、埋土から出土している。口縁端部は上下に拡張し、その下にはカキメののち、12条以上を１単位とする櫛描波状文を施している。

９は短脚高坏の脚部である。脚端部径は10.0㎝である。長方形の透孔は脚部外面にカキメを施したのち、３方向に穿っている。

10～14は土師器甕である。口径15.6㎝の10は粘土紐接合痕を明瞭に残し、外面全体と口縁部内面をヨコナデ、体部内面は横方向のケズリを施している。概して器壁が厚い。11は小片のため口径は不明とした。口縁部断面は下部の器壁が厚く三角形状を呈している。体部内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残り、ケズリに近いイタナデ調整である。12の口径は14.1㎝で、口縁部はほぼ直立する。内面は荒掻きのようなケズリを施して

いる。概して器壁は薄い。13の口縁部はゆるやかに外反し、口径16.8㎝を測る。体部最大径は22.4㎝である。体部内面は横方向を基調としたヘラケズリ、外面はナデ調整である。口径20.5㎝の14は口縁部が外反し、端部は面をもつ。本住居跡出土土師器甕のうち、面をもつ口縁部を有するものはこの１点のみである。体部内面はヘラケズリ、外面はナデ仕上げである。

15は口径7.7㎝で、小型の壺あるいは甕と思われる。口縁部は外上方に直線的に短くのび、体部はやや扁平になるものと思われる。体部最大径は7.7㎝を測る。体部外面は粗いハケ調整、内面は横方向のヘラケズリである。体部上端の内外面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。

16は坏に似た形態と思われるが、器壁が最大８㎜と非常に厚い。口径10.2㎝で、残存高は3.5㎝である。内外面はヨコナデ調整と思われるが、内面の器壁表面が一部剥離している。

SH２出土土師器のうち13～16は東半部分から出土し、調査時にSH３とした部分にあたる。

SK13出土土器（17～20）

埋土中から出土した須恵器４点を図示できた。17・18は坏蓋である。17の口径は11.4㎝、18は12.9㎝を測る。口縁端部は内方に傾く面をもち、断面はセピア色を呈している。ロクロ回転は左である。17は口径・胎土・焼成・色調が20の高坏と似ていることから、20の蓋である可能性がある。残存高は4.4㎝である。18の下外方にのびる口縁部端は凹面をなしている。天井部のヘラケズリ下端には工具の当たり痕が残っている。ロクロ回転は右方向である。

19は坏身で、高いたちあがり部はゆるやかに外上方に外反しており、端部は内上方に凹面をもつ。口径は11.2㎝を測る。

20は短脚の有蓋高坏で、脚部の下半を欠損している。口径は11.1㎝で、たちあがり部はやや内傾し、端部に面をもつがややあまい。脚部にはカキメのち３方向の透孔が穿たれている。ロクロ回転方向は左である。

SK13出土の須恵器は、ＴＫ47～ＭＴ15型式期と思われる。

SK15出土土器（21・22）

21はSH２出土の８とよく似た須恵器壺の口縁部であり、口径はこちらの方が13.9㎝と小さいが、同一個体である可能性もある。外反しながら外上方にのびる口縁部の端部は上下に拡張している。口縁部上方の外面に７～８条の櫛描波状文を施文している。

22は土師器の甕である。「く」字形に体部から曲折して外上方にのびる口縁部で、端部は丸くおさめている。体部外面にはユビオサエ、内面には粘土紐接合痕を残している。口径は16.0㎝を測る。

21・22ともに埋土から出土した土器である。

SK８出土土器（23・24）

埋土中から出土した須恵器杯蓋と土師器甕をそれぞれ１点図示した。23の杯蓋は天井部と口縁部の境に明確な稜をもたず、丸くなっている。また、口縁端部も丸くおさめている。ＭＴ85型式併行期からＴＫ43型式期と思われる。内面天井部の中心付近には細筋の同心円タタキを２～３回施している。内外面の器表が磨滅しているのは、使用によるものである可能性がある。

24はやや異形の土師器甕であると判断した。口縁部は、直線的な体部上半から外反して、短くやや外上方

にのびる。体部下半の径が口径を凌駕し、下膨れの形態となっている。体部内面には粘土紐接合痕が全体に明瞭に残っているが、体部外面は縦方向のハケ目としている。口径は10.9㎝、体部最大径は14.2㎝を測る。体部内面の調整は粗掻きのようなハケ目を施し、外面は縦方向のハケ目となっている。

SK20出土土器（25・26）

25・26がともに埋土中から出土したものである。土師器甕の16は口縁部が外反気味に上方に長くのびており、口縁部中央には粘土紐の接合痕が内外面で認められる。口径は11.5㎝である。

26は小型鉢と思われ、内外面にユビオサエ痕が残っている。口径は10.7㎝で、口縁端部は丸くおさめている。

柱穴出土土器（27～37・46～49）

27～30はＰ70から出土した土師器である。27は図上完形の甕で、口径16.2㎝、器高23.0㎝、体部最大径21.8㎝を測る。体部は最大径が下半部にあり、底部は尖底気味の丸底となっている。口縁部は体部から鋭く屈曲して外上方に直線的にのびる。口縁端部は外側に面をもつようにナデており、同時に内面は若干窪ませて端部上端が上方にはねあがるようにしている。また、口縁部の下外面はやや下膨らみとなっている。底部付近は内外面ともに調整不明であるが、体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリとなっている。時期的には庄内式期の後半から布留式期の初頭頃と思われる。

28・29は外面にタタキを残す甕である。28の口縁部は外反、29は外反気味に外上方にのびる。28の口径は15.4㎝、29は14.4㎝である。ともに体部外面は平行タタキ、内面は横方向のハケあるいはイタナデで仕上げている。28のタタキ目はやや細筋となっている。体部は円形に近いと思われ、体部最大径は28が16.8㎝、29は18.6㎝を測る。前述の甕27と同時期の所産と判断している。

30は小型丸底壺である。小片であることや、器表の磨滅によりやや歪な形態の図となっている。口径は11.2㎝、器高8.8㎝で、体部と口縁部の屈曲はあまい。底部は尖底気味となっているが、上記の理由により不正確である。27～29の甕と同時期と判断できよう。

31はＰ54から出土した土師器の甕である。口縁部は、体部から鋭く屈曲して外反しながら外上方にのびる。口縁端部は丸い。体部上部は外側に大きく広がっている。体部外面はハケ、内面はナデ調整となっている。古墳時代中期頃のものと思われる。

32はＰ74出土の土師器甕で、口径は15.0㎝である。体部から外反して外上方にのびる口縁部を有し、端部は丸く仕上げている。SH２中央南部埋土出土土器と接合したものである。

33～35はＰ43から出土した須恵器杯である。33は柱痕から出土した坏蓋で、口径11.8㎝、残存高3.0㎝を測る。口縁部と天井部の境は不明瞭で、口縁部は外下方に丸みをもってのびる。口縁端部は丸くおさめている。天井部の回転ヘラ削りの範囲は狭い。ＴＫ209～ＴＫ217型式期のものと判断できる。34の坏身は口径11.3㎝で、たちあがり部は内上方に短くのびる。柱痕から出土したもので、ＴＫ43～ＴＫ209型式期と思われる。35も柱痕から出土した図上完形の坏身で、口径12.0㎝、器高5.2㎝を測る。たちあがり部は内上方に長くの

び、口縁端部には面をもつ。回転ヘラケズリの範囲は狭い。ＭＴ15型式期頃と思われる。ロクロ回転は左方向となっている。

36はＰ42から出土した須恵器杯蓋の小片で、口径は11.4㎝を測る。形態的には34に近く、時期的にも同一とみてよいであろう。

37はＰ28の柱痕から出土した須恵器杯身である。図上はほぼ完形品で、口径13.3㎝、器高3.7㎝を測る。受け部外面とたちあがり部の内面は曲面をなしていないが、たちあがり部は内上方に短くのびる。回転ヘラケズリの範囲は狭く、焼成も不良である。ＴＫ209～ＴＫ217型式期と思われる。

46～49はＰ50の埋土上部からまとまって出土した須恵器・土師器である。46・47は古墳時代須恵器甕の口縁部である。46の口径は21.6㎝で、口縁部は外反しながら外上方にのび、端部は主として下方に拡張している。体部外面は平行タタキ、内面は同心円の当て具痕をナデ消している。ＭＴ15型式期前後と推定される。47は口径27.5㎝で、口縁端部は主として下方に拡張し、突帯をめぐらせていることから、外見上は２条の突帯があるようにみえる。体部外面は平行タタキののちカキ目を加えている。カキ目は一部頸部にも施している。体部内面は同心円の当て具痕をナデ消している。

48は土師器の甕である。口径11.9㎝で、内傾する体部上半から大きく外反しながら外上方にのびる口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。体部と口縁部の境の内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ仕上げのようである。古墳時代中期末～後期の所産と思われる。

49は甕と判断した。傾きはやや不正確であるが、内傾する体部上半から緩やかに外反して直立する口縁部を有する。端部は平面的であるが、丸みをもつ。口径は25.6㎝と大型品である。口縁部の内外面と体部外面はハケ、体部内面はヘラケズリをおこなっている。

SE１出土土器（38～44）

SE１の埋土中に混入するかたちで数多くの弥生土器・土師器が出土した。図示した38～44はその一部である。38～42は甕である。38～41は体部外面にタタキを有し、42は体部をハケ調整している。口径は順に13.9㎝、14.6㎝、14.0㎝、13.8㎝、15.6㎝を測る。体部内面はいずれもヨコナデまたはヨコナデと推定される。口縁部はすべて外反または外反気味に外上方にのび、端部は丸くおさめる。39～42は弥生後期の伝統を残した甕であるが、時期的には庄内期まで降る可能性もあろう。

43は口径19.5㎝を測る、複合口縁の壺口縁部である。口縁部は若干内湾し、端部を丸くおさめている。内外面とも横方向のヘラミガキを施しているように観取できる。一部に黒斑を有している。

44は鉢の口縁部片で、口径は11.7㎝を測る。内外面ともヨコナデ調整で、内外面に煤が付着している。

以上のSE１出土土器は、基本的には弥生時代後期末～古墳時代初頭と判断されよう。

SK10出土土器（45）

45は古墳時代前期初頭頃と思われる土師器甕の体部下半である。底部は丸底に近く、底部付近の外面は平行タタキ、それより上側は木目を残した縦方向のイタナデを加えている。体部内面は横方向のヘラ削りであ

る。直径22.2㎝を測る最大径は体部中位にあり、丸い体部を有するものと思われる。SK10の埋土に混入した状態で出土したものである。

包含層出土土器（図版21、写真図版27）

100・101は坏蓋である。100は縄紋包含層下層か他遺構内からの混入として出土したものである。口径11.9㎝で、口縁部は長く、端部は内面に段をもつ。101は調査区中央部の床土～包含層から出土している。口径12.4㎝で、口縁端部は内下方側に凹面をもつ。100・101ともにＭＴ15～ＴＫ10型式期と思われる。

102は土師器の甕である。Ｅは口径16.0㎝、外反する口縁部を有し、端部は丸い。口縁部下部の内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残る。体部外面は粗い斜め方向のハケ、内面は横方向のヘラケズリで、のちナデ仕上げのようである。古墳時代中期末～後期の所産と思われる。

103は遺構面第２面まで掘削中に出土した製塩土器の口縁部である。口縁部は内傾し、口径は9.1㎝を測る。ナデ仕上げであり、外面にはユビオサエ痕が残る。古墳時代後期頃と思われる。

第２節　縄紋土器（図版19～21、巻頭図版5、写真図版28・29）

伊勢貝遺跡では、調査区北部の東半において黒褐色土層の溜り状部分があり、そこから縄紋土器が集中的に出土した。また、包含層上層や柱穴・井戸・溝・土坑からも混在するかたちで出土している。

図示した縄紋土器のうち27点が凹線文を施すもので、全体の半数以上を占め、ほかに沈線を施しているものや粗製のもの、底部などがある。また、注口土器の注口部分と思われる破片や口縁部の突起部分も認められる。

Ａ類：口縁部や体部外面に凹線文を施すもの（50～76）

Ａ類のうち、口縁部内面の端部付近に１条の沈線を施すものと施さないものがあり、前者をＡａ類、後者をＡｂ類とする。また、Ａａ類のうちただし、体部については口縁部の状態が不明であることから、細分類はおこなえなかった。

Ａａ類（50～56）

Ａａ類のうち、内面の沈線上側に斜め方向の連続した刻目文を施すものとそうでないものがあり、ここでは便宜上、前者をＡａ１類、後者をＡａ２類とする。

Ａａ１類は50～53の４点を図示した。口縁部は外傾するもの（50～52）と内傾するもの（53）が認められるが、いずれも小片のため傾きに不安を残している。連続刻目文は、52では外面の凹線文下にも施している。内面の連続刻目文は右上がりのもの（50・51）と左上がり（52・53）が認められるが、文様の傾き方向と口縁部の傾きとの相関関係は認められないようである。また、50・52が縄紋包含層上層出土、51・53は下層出土であるが、層位的にも無関係のようである。なお、50の内面は横方向の条痕で、ヨコナデを加えているようである。

Ａａ２類は内面の口縁部下に１条の沈線を施すが、刻目は認められないものである。54～56の３点を図示した。口縁部は直立気味のものとなっているが、小片のため正確とはいいがたい。外面の凹線文は、Ａａ１類や55・56は口縁部直下から施されているのに対して、54では端部から約1.5㎝下がった位置から施されて

いる。内面の調整は横方向の条痕が認められ、56の外面には巻貝の押捺痕が遺存している。また、Ａａ１類にも押捺が施されていたと思われるが、遺存部分は認められなかった。なお、55は縄紋包含層上層、その他は下層出土である。

Ａｂ類（57～69）

Ａ類のうち、口縁部内面の沈線が認められないものである。口縁部の傾きは、外傾するもの（57～62）と内傾あるいは内傾すると推定されるもの（63～69）があり、それぞれ６点と７点であり、ほぼ半数ずつとなっている。縄紋包含層上層から出土したのは57・58・61～63・69の５点、縄紋包含層下層からは60・65・68の３点であり、層位的には分離できないようである。59は柱穴Ｐ70、64が床土～包含層までの層、66は井戸ＳＥ９から出土しており、67は出土場所不明となっている。57・58や65・67の外面には扇形に押捺された巻貝の圧痕が認められ、69も不明瞭であるが、凹線文が途切れていることから、押捺文が施されている可能性は高い。また、57・58・60や63・64・67の内面には巻貝によるものと思われる横方向の条痕が明瞭に残っている。

63や64は小片であるが、推定口径は63で32.8㎝、64では34.0㎝である。65は屈曲部上側の凹線文に加え、屈曲部下の凹線文も遺存しており、２条の凹線と巻貝押捺文が扇形に残っている。また、上側の押捺文の外側で凹線文が途切れる部分には、巻貝先端で施したと思われる小さな円形の刺突文が４点認められる。屈曲部上側では凹線文の下端や中央と思われる部分に連続刻目文が施され、凹線文が途切れる部分の凹線文端には刺突文、凹線文が途切れる部分には巻貝押捺文がそれぞれ施されている。屈曲部分の最大径は15.6㎝を測る。66では外面口縁部下の凹線文間に連続刻目文を１帯のみ施しているのが確認できる。

Ａ類体部（70～76）

凹線文を有する破片のうち、口縁部が遺存していないものである。70～72は凹線文が途切れて押捺文が存在する部分の破片であり、扇形の巻貝押捺文が遺存している。73～76は凹線文のみ遺存し、巻貝の押捺文部分が欠失しているものである。いずれも小片のため傾きは不正確であるが、体部の傾きは直立（70・74・75）のものや、外傾あるいはやや外傾（71～73・76）しているものが認められる。

内面には横方向の条痕が遺存しているもの（72・73）や条痕ののち磨いているようにみえるもの（70・75）も認められる。

出土層位別では、71・72・74・76の４点が縄紋包含層下層、70・73が上層出土であり、75は出土層位不明となっている。

以上、Ａ類の文様は宮滝式の特徴を示しており、一部元住吉山Ⅱ式に含まれるものもあるかもしれない。

Ｂ類：口縁部や体部外面に縄紋を残すもの（77～83）

Ｂ類は土器の外面に縄紋を施したもので、沈線や磨消縄紋も加えられているものである。

77は口縁部外面に３条のほぼ平行した沈線が残る。器表が磨耗していることから縄紋は遺存していないが、もとは部分的に施されていた可能性が高い。縄紋包含層上層から出土したものである。

78・79は水平方向の２条の沈線とその下に斜め方向の沈線が残る破片である。79の上方の水平沈線の右端は下方にまるく下がっている。78は器表が磨耗していることから縄紋は遺存していないが、79と同様の紋様である可能性が高い。79の下半は磨消の可能性がある。78はSD１から出土した。79は出土位置・層位不明である。北白川上層３式から元住吉山Ⅰ式の可能性がある。

80では水平とした沈線は垂直方向である可能性もある。２条の沈線で囲まれた範囲の縄紋を残し、外側は

磨り消している。縄紋包含層下層から出土したものである。あるいは中津式か。

81・82は水平方向の小さな段を有し、そこから上側の縄紋を磨り消したものである。一乗寺K式の可能性がある。縄紋包含層下層出土である。

83も縄紋包含層下層出土で、やや大粒の縄紋が遺存している。内面は横方向の条痕となっている。

C類：刺突や沈線などで文様を構成し、縄紋が認められないもの。(84～86)

84は内側に屈曲する口縁部付近の破片と思われ、体部上部には凹線文を4条以上施し、最上部の凹線上に径1.5㎜の円形連続刺突文を施したものである。縄紋包含層下層から出土した。

85は沈線間に外径4㎜の竹管文を連続して施したものである。沈線の外側は磨いているようである。出土位置・層位は不明である。

86はP101から出土したもので、3条以上の沈線を施し、沈線間に押し引きの文様、沈線の上側に斜め方向の条線を多条に施したものである。

D類：粗製の土器（90～94）

内外面とも条痕のみで、文様が認められないものである。91には径7㎜の焼成後穿孔が1箇所認められる。92はSK101出土で、その他は縄紋包含層下層から出土したものである。

E類：底部（96～99）

96～99の底径はそれぞれ7.6㎝、6.5㎝、4.8㎝、4.2㎝を測る。98の底面は弧を描いて上げ底状になっている。98のみSD1から、その他は縄紋包含層下層出土である。

F類：その他（87～89・95）

87は床土～遺物包含層から出土した波状口縁の波頭部分と思われる破片である。頂部には円形浮文状に粘土を貼り付けており、その下には凹線文状の窪みをめぐらせている。頂部からやや下がった位置には刺突がなされているようにみえる。

88はSE9から出土したもので、波頭部の飾り部分と思われる。上と左右および外側の斜め下方向に円形の透かしが認められる。端部の状況から、波状口縁の最も低い位置に取り付けられたもののようにもみえる。

89は小片であるが、注口土器の注口部分である可能性が高い。縄紋包含層上層から出土している。基部に近い部分での外径は約4㎝と推定できる。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。

95は縄紋包含層上層から出土したもので、器壁はきわめて直線的で、稜線も鋭い。内面は条痕であるが、外面はヘラミガキを加えているように見える。屈曲部のすぐ上には凹線文が施されているようであるが、欠失している。

第3節　平安時代以降の土器

104～171は平安時代以降の土器である。掘立柱建物跡を構成する柱穴出土の土器、その他の柱穴出土の土器、土坑（SK）、集石土坑（SX）、井戸（SE）出土の土器、および包含層他出土の土器の順で掲載した。

1．遺構出土土器

掘立柱建物跡出土土器（図版22、写真図版30）

SB 2 出土土器（104～109）

104～109はSB 2 を構成する柱穴から出土した。

104はＰ34から出土した土師器皿である。指頭圧痕を残しており、手づくねによって作られる。口縁端部は横方向のナデで仕上げる。内面に煤が付着している。口径8.3㎝、器高2.1㎝を復元した。Ｐ34からは無釉陶器擂鉢片も出土しており、ヘラ描き一本引きの卸目を有している。

105はＰ20から出土した土師器皿である。手づくねにより、指頭圧痕を残し、口縁部は横方向のナデで仕上げる。口径11.0㎝、器高1.7㎝を復元した。

106はＰ18から出土した土師器皿である。手づくねにより作られ、底部外面には指頭圧痕が残る。口縁部は厚く、端部のみつまみ上げてヨコナデで仕上げる。底部内面は一方向のナデを施す。歪みが大きいが、口径11.0㎝、器高3.0㎝を測る。

107はＰ33から出土した瓦器椀である。Ｐ33はSB 2 を構成するものではない可能性が高いが、ここに含める。貼り付け高台の基部がわずかに残る。内面には横方向の暗紋が残るが不明瞭である。外面には指頭圧痕が残る。口径12.7㎝を復元し、器高は4.4㎝残存する。

108はＰ31から出土した須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、端部は丸く納める。内面には自然釉が付着する。口径13.8㎝を復元した。

109はＰ23から出土した須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、端部は丸く納める。外面の重ね焼き痕には自然釉が付着する。

SB 2 を構成する柱穴からは鎌倉時代に属するものが多く出土しているが、無釉陶器擂鉢の破片を考慮すると、14世紀以降の時期があてられる。

SB 3 出土土器（111）

111はSB 3 を構成するＰ26から出土した須恵器鉢である。口縁部のみ残存するが、小型の鉢である。端部はヨコナデによって三角形状に作り、端面は外方を向く。口径19.9㎝を復元した。12世紀末頃のものである。

柱穴出土土器（図版22、写真図版31）

112はＰ61出土の土師器皿である。手づくねによって作られた小型のものである。口径6.9㎝、器高1.6㎝を測る。

113はＰ3から出土した土師器皿である。手づくねによって作られ、口縁内面はヘラミガキ状に調整後、ナデによって仕上げられる。口径9.0㎝、器高1.5㎝を復元した。

114はＰ16から出土の土師器皿である。手づくねによって作られる。ユビオサエを残してナデによって調整しており、口縁端部は横方向のナデで仕上げる。口径9.6㎝、器高2.1㎝を復元した。

115はＰ35から出土した土師器羽釜である。硬質に焼成される。横方向の平行タタキによって成形された胴部に断面方形の短い鍔を貼り付ける。口縁端部はやや器壁を厚くして、丸く納める。口縁部は内外面ヨコナデで仕上げ、胴部内面は斜め方向のケズリ状のナデで仕上げる。口径21.7㎝を復元した。

116はＰ19出土の土師器鍋口縁部である。肩部から直立する頸部を経て、三角形状に外方に屈曲させた口縁部に至る。ヨコナデによって仕上げる。口径20.0㎝を復元した。

117はＰ10から出土した土師器鍋口縁部である。肩部から直立する頸部を経て、直角に外方に屈曲させた口縁部に至る。ヨコナデによって仕上げる。口径27.0㎝を復元した。118は同じくＰ10 から出土した須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、端部は尖らせ気味に納める。口径12.9㎝を復元した。

119はＰ39から出土した瓦器椀である。口縁端部は外面を強くヨコナデして断面三角形状にしている。内面には横方向のヘラミガキにより暗紋としているが、不明瞭である。口径13.7㎝を復元した。

110はＰ4から出土した須恵器椀である。ヨコナデによって仕上げられ、口縁端部は丸く納める。口径13.8㎝を復元した。

120はＰ36から出土の須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、端部は尖らせ気味に納める。口径12.0㎝を復元した。焼成不良だが、重ね焼き痕が残る。

121はＰ11から出土した須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、やや外反する口縁端部は丸く納める。口径13.9㎝を復元した。

122はＰ7出土の須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、やや外反する口縁端部は丸く納める。内面には自然釉が付着する。口径12.9㎝を復元した。

123はＰ40から出土した須恵器椀底部である。糸切り後、おそらく底部の形を修正するための平行タタキを施した底部から、稜をもたずに緩やかに立ち上がる。底径5.5㎝を測る。

124はＰ41から出土した龍泉窯系青磁劃画紋碗である。底部を欠くが、内椀して立ち上がり口縁端部は尖らせ気味に終わる。外面にはヘラ削りを施し、端部はヨコナデにより仕上げる。内面には片切彫りによる劃画紋を施す。胎土は灰白色、内外面に灰オリーブ色の釉薬をかける。口径16.0㎝を復元し、器高は5.5㎝残存する。

土坑出土土器（図版22、写真図版32～33）

SK 3 出土土器（125～129）

125は土師器皿で手づくねで作られる。外面には指頭圧痕が残る。口径12.8㎝、器高2.3㎝を復元した。

126は土師器鍋で、やや硬質に焼成される。大きく張った胴部は横方向の平行タタキで成形され、頸部内面は左上がりから横方向のハケ状のナデによって調整、底部も同様のナデを不定方向に施して調整され、一部はさらにナデによって仕上げている。緩やかに屈曲して直立する頸部から三角形状に肥厚する口縁部へ続く。口縁内面にはヘラによる一条の沈線が斜めに刻まれる。外面には煤が付着する。口径22.5㎝、器高133㎝を復元した。長谷川編年Ⅲ期のものである。

127は須恵器皿である。口径8.0㎝、器高1.5㎝を復元した。

128は須恵器椀で、糸切り底部から斜めに立ち上がる。底部は薄い。口径12.8㎝、器高4.0㎝、底径5.5㎝を復元した。

129は白磁碗である。玉縁状の口縁部を有する。内外面には灰白色の釉薬を施す。口径15.5㎝を復元した。

SK 3 から出土した土器は時期幅があるが、14世紀前半までのものであろう。

SK 5 出土土器（130～133）

130は土師器鍋で、胴部は横方向の平行タタキで成形される。強く屈曲して開き気味に直立する頸部から三角形状に外方につまみ出す口縁部へ続く。頸部・口縁部内外面はヨコナデによって仕上げられる。口径

17.7㎝を復元した。

131～133は須恵器椀である。131はわずかに突出する糸切り底部から稜をもたずに立ち上がる。口縁端部は尖らせ気味に納める。底部内面には回転ヘラケズリが残る。口径13.8㎝、器高5.7㎝を測る。

132は糸切り底部から稜をもたずに立ち上がる。底径は5.7㎝を測る。

133は糸切り底部から稜をもたずに立ち上がり、ヨコナデによって凹部を巡らせた後、口縁端部は尖らせ気味に納める。口径14.4㎝、器高4.1㎝、底径4.9㎝を測る。

SK 5 から出土した土器は13世紀後半頃のものと思われる。

集石土坑出土土器（図版23、写真図版34～36）

SX 1 出土土器（134～139）

134は須恵器小皿で、糸切り底部から稜を持たずに緩やかに立ち上がる。口径7.9㎝、器高1.5㎝、底径4.8㎝を復元した。

135・136は須恵器椀口縁部である。ヨコナデによって仕上げられ、口縁端部は丸く納める。135は糸切り底部から稜をもたずに緩やかに立ち上がる。135は口径13.8㎝、136は口径15.6㎝を復元した。

137～139は瓦器椀である。137は口径14.6㎝を測り、指頭圧痕を残した体部からヨコナデによってわずかに外反する口縁部に至る。内面には暗紋が施される。

138・139は底部である。138は三角形に近い逆台形の高台は比較的高く、外側へ踏ん張っている。内面見込みにはジグザグ方向の暗紋が施されている。底径7.7㎝を測る。

139は底径4.8㎝の底部で、逆台形状の低い貼り付け高台をもつ。内面見込みには一方向平行の暗紋が観察できる。外面は黒化していない。

SX 1 から出土した土器は13世紀前半頃の時期が考えられる。

SX 2 出土土器（140～145）

140・141は土師器鍋である。140は非常に硬質に焼成されている。横方向の平行タタキによって成形された胴部から肩部はあまり張らない。内面は圧痕やユビオサエが残り、部分的な強いナデが見えるが、仕上げ調整は見られない。屈曲して直立する頸部から、口縁直下外面の強いヨコナデによって三角形状に外方に拡張する口縁部へ続く。頸部から口縁部の内外面はヨコナデによって仕上げる。口径19.0㎝を復元した。

141は硬質に焼成されている。横方向の平行タタキによって成形された胴部から肩部はあまり張らない。内面は圧痕の上を斜め方向のナデで仕上げる。肩部から緩やかに続き短く直立する頸部から、口縁直下外面の強いヨコナデによって外方に拡張する口縁部へ続く。頸部から口縁部の内外面はヨコナデによって仕上げる。口径21.3㎝を復元した。外面には煤が付着する。

142は緑釉陶器口縁部小片である。須恵質の土器で、わずかに外反する口縁端部の内面に 2 条の沈線を巡らせる。内外面に薄い緑色（7.5Y6/2灰オリーブ色）の釉薬を施している。緑釉陶器はこの小片が唯一の出土である。

143は須恵器椀底部であるが、小型の鉢の可能性もある。底径6.5㎝の糸切り底部から緩やかに立ち上がる。

144・145は無釉陶器甕で、丹波焼である。144は復元口径40.2㎝。いわゆるN字状口縁をもつもので、短い頸部を外方に強く屈曲させ、外下方に面を持つ端面をヨコナデによって強く窪ませ、口縁上面に深い凹線

を巡らせる。内外綿とも横方向のナデによって仕上げる。

145は復元口径44.2㎝。いわゆるN字状口縁をもつもので、短い頸部を外方に強く屈曲させ、外下方の面は不明瞭で、尖らせ気味の端部の外直下に沈線を巡らせている。口縁上面に深い凹線を巡らせる。内外綿とも横方向のナデによって仕上げる。SX 2からは接合できなかったが、く字形に屈曲して張る胴部の破片も出土している。

SX 2から出土した土器は14世紀前半までのものである。

SX 3出土土器（146・147）

146・147はともに無釉陶器擂鉢であるが、礫検出上面出土のものである。146は丹波焼擂鉢で、ヘラ描き一本引きの卸目を不均等に配する。口縁端部は上方に拡張して外方に面を有する。内面は使用のためによく摩耗している。口径28.95㎝、器高11.75㎝を復元した。

147も丹波焼であろう。8本1単位の櫛によって卸目を引く。口縁端部は上方に大きく拡張して外面を作り、凹線を巡らせる。外面にはユビオサエの痕跡が残り、口縁部はヨコナデによって仕上げられる。口径30.8㎝を復元した。大平編年Ⅲ型式にあたり、17世紀前半のものである。

井戸出土土器（図版24、写真図版36～38）

148～164は井戸から出土した平安時代以降の土器である。平安時代より前の土器も出土しており、第1節で記述している。石組を有した井戸はSE 9のみで、他のものは円形の水溜状の土坑であり、すべて近世に所属する遺構である。

SE 2出土土器（148・149）

148は筒型を呈した香炉様の軟質陶器で、内外面には釉がかけられる。口径8.5㎝、器高3.5㎝、底径7.0㎝を復元した。底部の外周部が一部削り残され高台状になる。

149は無釉陶器擂鉢で、丹波焼である。ヘラ一本引きの卸目を口縁直下にまで配する。口縁端部は上方に尖らせ気味に納める。口径29.6㎝を復元した。中世後半のものである。

SE 3出土土器（150・151）

150は土師器皿で、ユビオサエを残した手づくねで、口縁端部と内面はナデによって仕上げる。口径7.7㎝、器高1.3㎝を測る。口縁端部内面や底部の内外面の一部に煤が付着する。

151は陶器壺口縁部である。湾曲して立ち上がる頸部から玉縁状の口縁部へ続く。内外面には緑褐色の釉がかかる。口径11.0㎝を復元した。

SE 5出土土器（153～160）

152は無釉土師質の土鈴である。内面に絞り痕を残す円錐形の摘みには、焼成前の一方向の穿孔が施される。下面には一文字の切れ目を入れている。

153は土師器皿である。手づくねによって作られ、ナデで仕上げている。口径7.9㎝、器高1.6㎝を復元した。

154は染付椀である。肥前系磁器でいわゆるくらわんか手である。高台畳付以外は全面施釉し、体部外面には圏線と草花紋が描かれる。高台内面にも圏線と文字らしい模様が描かれる。口径10.0㎝、器高5.7㎝、底径4.4㎝を測る。

155は陶器鉢である。く字に張った肩部から直立する頸部を経て、外方に開く口縁部に至る。口縁端部は丸く納める・胴部外面には自然釉が付着する。口径11.6㎝を復元する。

156は施釉陶器鉢である。内外に肥厚させた口縁部は上面に凹線を巡らせる。内面に灰釉を施す。底部外面は無調整で、別の胎土が付着している。丹波焼であろう。口径14.7㎝、器高6.2㎝、底径7.9㎝を測る。

157は無釉陶器擂鉢で、丹波焼である。8本1単位の櫛によって比較的粗に卸目を引く。口縁端部は上下に大きく拡張して三角形状を呈し外面には凹線を施す。外面にはユビオサエの痕跡が残り、口縁部はヨコナデによって仕上げられる。片口部を残すが顕著ではない。大平編年Ⅶ型式にあたり、18世紀前半のものである。

158は施釉陶器鉢である。口径19.8㎝、器高14.0㎝、底径13.8㎝を測る。無調整の底部から一旦広がった後、直立する体部には凹線を巡らせ、内外に拡張して上面を作る口縁部に至る。内外面には赤ドベを施した後、外面の一部に緑灰色釉をかける。胎土は軟質であるが丹波焼であろう。

159も施釉陶器鉢である。丹波焼であろう。口径は36.65㎝と大型である。直立する体部にはカキメを巡らせ、内方に拡張して上面を作る口縁部に至る。内外面には赤ドベを施した後、外面の一部に灰白色釉をかける。

160は陶器甕底部である。外面には赤ドベを施し、底部内面には自然釉が付着する。無調整の底面には別胎土が付着する。底径16.0㎝を測る。

SE 6 出土土器（161）

161はSE 6 から出土した土師器皿である。手づくねで作られ、ナデによって仕上げられる。口縁端部には煤が付着する。口径6.3㎝、器高1.3㎝を測る。SE 6 からは石臼の破片（S 5 7）も出土している。

SE 8 出土土器（162・163）

162は土師器皿である。指頭圧痕を残して手づくねで作られ、ナデによって仕上げられる。口径7.4㎝、器高1.2㎝を測る。

163は土師器羽釜口縁部で、断面三角形の短い鍔を貼り付ける。口縁端部は外面を強くヨコナデし、内端部をケズリ気味のナデによって納める。口径19.8㎝を復元する。

SE 9 出土土器（164）

164はSE 9 から出土した土師器焙烙である。湾曲する底部は薄く、屈曲して立ち上がる体部は徐々に厚さを増して玉縁状の口縁部へ続く。底部外面には煤が残る。口径35.0㎝を復元する。SE 9 からは他にも丹波焼甕や鉄釉を施した鉢、蛸唐草を描いた肥前系磁器筒茶碗などの破片も出土している。

SE 9 出土木器

また、SE 9 の底からは有機質の遺物も出土した。（写真図版45）Ｗ１は直径約4.3㎝の広葉樹の丸太を厚さ約1.4㎝に輪切りにしたもので、樹皮は残存していない。両木口面には一定方向の擦痕がみられ、鋸で切

断されたものであろう。樽などの栓に用いられたものであろうか。

Ｗ２も広葉樹の丸太材を輪切りにしたものであるが、直径が12.5～14.4㎝と大きい。木口面の一方には段が残され、鋸で切断したような擦痕がみられる。このため厚さは0.9～3.3㎝と均一ではない。もう一方の木口面は平坦だが、細かい直線的な擦痕が放射状に広がり、一部には削った痕跡がみられる。鋸で切断し、一部を手斧などで成形したものであろう。側面には樹皮は残存せず、一部には加工が加わっている可能性がある。

Ｗ３は棕櫚縄である。直径約0.5㎝の細縄を２条縒り合せて直径0.8㎝の縄としている。長さ50㎝ほど残存している。

２．包含層他出土土器（図版24、写真図版33）

165～171は近世以降の暗渠や包含層、確認調査トレンチから出土した土器である。

165は包含層及び暗渠出土の土師器鍋で、胴部は横方向の平行タタキで成形され、内面はハケ状のナデによって左上がりから横方向の順に調整し、一部ナデによってハケ状ナデを消すように仕上げる。直立する頸部から玉縁状に肥厚する口縁部へ続く。口縁部内外面はヨコナデで仕上げる。外面には煤が付着する。口径21.1㎝を復元する。

166は確認調査（遺跡調査番号2002192）時に本発掘調査区より南の地区のトレンチで出土した須恵器甕で、口径28.0㎝を復元する。肩部には横方向の平行タタキが残り、短く屈曲する口頸部はヨコナデによって仕上げられる。口縁端部は上方に拡張して外方に面をもつ。所謂、東播系須恵器である。

167は土師器皿である。底部の広い杯状の形態をもつ。手づくねにより作られ、外面には指頭圧痕が残る。口縁端部は一段のヨコナデで仕上げる。口径11.5㎝、器高2.2㎝を測る。

168は須恵器椀底部で、糸切りの底部から斜めに立ち上がる。内面には不定方向の仕上げナデを施す。底径6.3㎝を測る。

169は確認調査（遺跡調査番号2002192）時に本発掘調査区より南の地区のトレンチで出土した無釉陶器擂鉢で、丹波焼である。ヘラ描き一本引きの卸目を口縁端部よりかなり低い位置で配する。口縁端部は上方に尖らせ気味に納める。外面には浅い凹線が1条巡り、それ以下ではナデが不均質となる。口径30.2㎝を復元する。使用痕が顕著である。

170は無釉陶器擂鉢で、丹波焼である。ヘラ描き一本引きの卸目を不均等に配する。口縁端部は上方に拡張して外方に面を有する。口径29.4㎝を復元する。

171は無釉陶器擂鉢で、丹波焼である。6本1単位の櫛によって上端に間隙を作って卸目を引く。口縁端部は上方に拡張して三角形状を呈する。外面にはユビオサエの痕跡が残り、口縁部はヨコナデによって仕上げられる。口径39.3㎝を復元する。大平編年Ⅲ型式にあたり、17世紀前半のものである。

第４節　　石器

（１）概要

今回の調査では、縄紋時代の遺物包含層を中心に、多数の石製遺物が出土した。ここでは、それらのうち

主要なものについて報告する。

縄紋時代の遺物包含層は、上下２層に細分されたため、調査にあたっては、層位別の取り上げをおこなった。層位ごとの出土点数では、下層より上層がやや多いが、縄紋時代の遺構に伴うものは、製品ではわずか１点であり、石器全体を見ても遺構との関係を把握できる要素はきわめて希薄である。

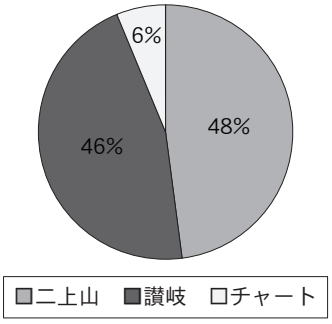
製品のみの組成では石鏃が多数を占めており、縄紋時代包含層上層で64%、同下層では35%を占める。次いで上層では楔形石器が20%、下層では石錐が29%をそれぞれ占めている。出土した総点数が少ないため、この組成比を確定的に取り扱うことには慎重でありたいが、本遺跡における組成の傾向を示す可能性は考慮してもよかろう。

第５章第２節に掲載したとおり、原産地分析の結果、打製石器の素材には、二上山産と讃岐産のサヌカイトがともに用いられているが、製品の肉眼観察によれば、二上山産のものと讃岐産のものがほぼ拮抗している（第３図）。

以下では、主要な製品および石核・剥片類について図化をおこない、記載する。なお、各遺物の計測値については、後掲する表４に一括して示している。

表３　伊勢貝遺跡出土石器（報告分のみ）組成表

	上層	下層	遺構内	合計
石鏃	16	6		22
石錐	2	5	1	8
楔形石器	5	4	2	10
ＲＦ	0	3	1	4
叩石・磨石	2	0		2
石核	2	1		3
合計	27	19	4	50
＊ＲＦ＝二次加工のある剥片			＊楔形石器にはスポールを含む	



第３図　製品の石材組成

（２）形態分類

報告書記載にあたり、石鏃および石錐について下記のとおり形態分類をおこなった。

【石鏃】

今回の調査で出土した石鏃は、上・下層を通じて凹基無茎式石鏃を主体としており、少数の平基式石鏃が伴う。

凹基無茎式石鏃は、１．長幅比が１：１に近いもの、２．長幅比が1.5：１～２：１の間にあるもの、に大別できる。これらはさらに、1－①両側縁を緩やかな弧状に作り、基部の抉りが長さの１/２に近いもの、1－②両側縁を直線的に作り、基部がわずかな凹基となるもの、1－③両側縁が非対称を示すもの、2－①両側縁を緩やかな弧状に作るもの、2－②両側縁を直線的に作るもの、の５形態に分類できる。

【石錐】

１．幅の広いつまみを作るもの、２．棒状を呈するもの、３．剥片の一端にノッチ状の二次加工を施して

錐部を作り出すもの、４．紡錘形を呈するものの４形態に分類される。ただし３については、１の錐部が折損したものを再加工している可能性を否定できない。

（３）縄紋時代包含層上層出土の石器（図版26・27・29、写真図版40・41・44）

【石鏃】（Ｓ１～S16）

上層出土の石鏃は、1－①類（Ｓ１・Ｓ２）、1－②類（Ｓ３）、1－③類（Ｓ４・Ｓ５）、2－①類（Ｓ７・Ｓ８）、2－②類（Ｓ９～S11）に分類される。Ｓ６・S12・S15・S16などは断片的資料であるため、形態を判断し難い。

凹基式石鏃Ｓ１・Ｓ２は類似した形態を見せる。二次加工は、器表面のほぼ全体にわたって丁寧に施されている。Ｓ４・Ｓ５は、左右非対称形を示す。Ｓ４は、あたかも片脚が折損したかのような形態であるが、子細に観察すると、側縁から脚端部への二次加工は連続的であり、本来、左右非対称形であった可能性が高い。Ｓ５は、図左面の二次加工が、右面に比べて急斜度に施される。加工順位は図左面→右面である。

平基式石鏃（S13・S14）は、他の凹基式石鏃と比較して加工度が低い。特にS14では片面に広く自然面を残していることを併せて考慮するならば、未製品である可能性が高く、平基という形態が最終的なものか否か、判断を留保しておきたい。

【石錐】（S17・S18）

上層出土の石錐は、いずれも１類である。S17は、扁平で幅広のつまみ部に短い錐部がつく。また、S18は、表裏とも丁寧な二次加工が施された、やや厚みのあるつまみ部に、太く短い錐部がつく。

【楔形石器】（S19～S23）

楔形石器は5点が出土している。S19が3辺から打撃を行っている他は、相対する2辺を打撃したものである。いずれも1ないし2側縁に截断面が形成されている。

【叩石・磨石】（S24～S26）

円礫、ないしは亜円礫を素材としたものであるが、S24・S26は叩石、S25は磨石と考えられる。S24・S26では、楕円形を呈する礫の端部に、顕著な打撃痕が濃密に分布している。S25では、打撃痕が顕著ではなく、礫の凸面にわずかながら擦痕が認められることから、磨石と判断した。

【石皿】（Ｓ５６）

大型の、板石状の礫を用いた石皿である。表面に、使用による磨痕が認められるが、多くの石皿で見られるような凹面は形成されておらず、石皿としては未製品、ないしは使用が進行しない段階で廃棄されたものかと推量される。

【石核】（S27・28）

S27は片面に礫の表皮を残す石核である。図左面から剥離された剥片は、いずれも礫表皮が付着したものと思われ、主たる剥離作業面は、図右面であったろう。なお、図右面の右側縁は、強い力による折れで形成された面である。S28は扁平な剥片を素材とした石核である。縁辺には折れ面が形成されている。

【剥片】（S29・S30）

S29は打面を折損した剥片である。背面には広く自然面をとどめている。S30は、背面中央に石核稜を形成した剥片である。背面中央の稜上から左側縁に向けて、細かな剥離が行われており、その末端が腹面によって切られていることから、これらの剥離痕は石核上での稜形成に伴うものと判断した。ただし他の石核・剥

片に類同の資料を見ないため、これが石刃技法における稜形成のような技術的基盤に基づくものか否か、俄に判断できない。打面は１枚の剥離痕から成る。

（４）縄紋時代包含層下層（図版27・28、写真図版42・43）

【石鏃】（S31～S36）

下層出土の石鏃ではS35が1－②類に相当する可能性があるが、他に１類は見られず、２－②類（S31～S33）が認められる。断片的資料であるがS34も本類であろう。S36は凹基無茎式石鏃であるが、両側縁に抉入部を設けた特異な形態である。器身はきわめて薄く、図右面の二次加工はごく粗雑である。

【石錐】（S37～S41）

S37・S38が１類に、S39が２類に、S40が３類に、S41が４類に、それぞれ分類される。S37～S39・S41では、錐部の稜に使用による摩耗あるいは光沢が認められる。S39は棒状を呈するため２類としたが、基端部は古い折れとも考えられる。S41は厚みのある素材に、丁寧な二次加工を施したものである。下端は折れているが、短い錐部を作りだしたものであろう。

なおS40はチャート製の資料である。形態上錐に分類したが、全体の稜がダメージを受けているほか、剥離痕も全体にやや摩耗していることから、二次堆積資料、あるいは偽石器の可能性が排除できない。

【楔形石器】（S42～S45）

S42～S45は楔形石器である。いずれも相対する２辺を打撃したもので、１ないし２側縁に截断面が形成されている。

【二次加工のある剥片】（S46～S48）

S46～S48は、二次加工のある剥片とした。いずれも小型・不定型の剥片に、細かな二次加工を施したものである。S47は、石鏃未製品の可能性も捨象できないが、比較的急斜度の二次加工を片面のみに施していることから、二次加工のある剥片に分類した。S48は、ごく小型の横長剥片の末端いっぱいに、細かな二次加工を施した縁辺の形状から、削器的な機能が推測される。

【石核】（S49）

S49は石核とした。厚みのある素材の表裏が剥離作業面となっており、打点を大きく移動させつつ不定型な剥片を剥離している。

礫集中部出土の石器

S50は、二次加工のある剥片とした。縄紋時代包含層下層で検出された、礫集中部の下層より出土した。不定型な剥片の末端側縁辺に、主として腹面側から急斜度の二次加工を施して、厚い刃部を形成している。削器あるいは掻器的な機能をもつものであろうか。

（５）遊離遺物（図版28・29、写真図版43・44）

SK11

S51は、楔形石器である。小型の剥片を素材とし、上下両縁から打撃をおこなっている。

SK18

S52は、石錐である。断面が凸レンズ状を呈する基部から、長い錐部がのびる。錐部の稜線に、やや摩耗

が認められる。

P70

S53は、楔形石器のスポールである。図上端に、顕著に潰れた打面をとどめ、その縁辺には階段状の剥離が認められる。

SE１・２・６

S54はSE１から、S55はSE２からそれぞれ出土した。いずれも細粒の堆積岩を用いた砥石である。S57はSE６から出土した花崗岩製の石臼の上臼である。やや幅広の磨り目が刻まれているが、全体にやや摩耗している。側面に柄孔が残る。外面は火熱を受けており、赤褐色の変色部が認められる。

（６）小結

近畿地方において、石鏃の形態を層位的・編年的に分析した事例としては、大阪平野中心部の資料に基づく菅の研究がある（菅榮太郎　1995）。これによると、菅によるA類が本稿の１類に、同じくB類が２類にそれぞれ相当するであろう。菅によれば、大阪平野中央部ではA類の石鏃は、縄紋時代早期～前期に、B-１類は同早期～後期、B-２類は中期～後期に出現するという。

本遺跡で出土した縄紋土器には、一乗寺K式（後期中頃）・元住吉山Ⅱ式・（後期末）～宮滝式（後期末）が認められることから、本遺跡で出土した２類の石鏃が土器に示される時期に伴うとすれば、概ね菅の編年に整合的である。一方、本遺跡で分類した１類の石鏃（菅のA類）は、大阪平野中心部では縄紋時代早期～前期に見られるとされているが、本遺跡では、この時期の土器は出土していない。また今回報告した１類石鏃と２類石鏃との間には、風化度や転磨度において明確な差を認めるこができず、両者の間に時期差が存在することを積極的に支持する根拠はない。

ただ、三田盆地では、縄紋土器の出土がまったくないにもかかわらず、多様な時期の石鏃が多数出土した溝口遺跡（久保弘幸　2010）のような事例も存在する。大阪平野中心部での編年を、ただちに三田盆地で適用することは危険ではあるが、本遺跡でも縄紋時代前期以前に、石器を使用する活動が行われていた可能性まで否定し去ることはできないだろう。

なお今回の報告では、肉眼観察によるサヌカイトの推定原産地と、蛍光Ｘ線分析結果を、後掲の表４に併記している。両者の結果を照合すると、肉眼観察による原産地の推定は、二上山と讃岐という二つの原産地の峻別に関しては、ほぼ正しかったと評価できる。無論、この結果から肉眼観察が万全であるとは言えないが、今後の調査・分析にあたっても同様の試みを実施したい。

第５節　金属器

Ｍ１は、包含層出土の角釘である。下端部を欠損しており、残存長2.45㎝と短いが、形状から長く続くものではない。断面の幅・厚みの最大値は0.55㎝を測る。

Ｍ２も、包含層出土の角釘である。下端部を欠損し、残存長は4.0㎝を測る。頭部は叩き延ばして折り曲げているが、横方向に広げている。断面の幅・厚みの最大値は0.60㎝を測る。

Ｍ３は、SE２出土の角釘である。頭部・下端部とも欠損し、残存長は2.2㎝を測る。断面の形状は崩れて

いるが、本来、方形で0.5㎝角のものである。

Ｍ４は、Ｐ3の柱痕から出土した角釘で、環状に曲がっている。復元すると長さが5.3㎝、幅0.7㎝、厚み0.5㎝と大型の部類にはいる。意図的に環状に曲げた可能性が高いが、先端部と頭部はやや食い違う。

Ｍ５は、Ｐ60から出土した長頸鏃である。茎端を欠失し残存長は16.2㎝である。鏃身部の下側には平面台形で、箆被のような部分が存在し、二段逆刺のようにみえる。しかし、側面は外側にやや反った形状で、刃部を形成していないため、関と判断している。この部分の長さは0.7㎝、最大幅1.1㎝である。鏃身部は柳葉形を呈し、片鎬造と思われる。鎬は片面のみに認められるが、反対面はやや膨らみを有している。鏃身部の長さは2.8㎝、最大幅1.4㎝で外側全体に刃部を形成している。頸部は長さ8.5㎝で、幅0.6㎝、厚さは0.4〜0.5㎝で、断面は長方形を呈する。茎との間には関を作り出しており、茎に向かって袴状に広がる台形関である。この部分の長さは約0.6㎝である。下端での残存部分の形状を見ると、方形に近く、幅1.0㎝、厚さ0.9㎝となっている。茎は徐々に細くなっているが、先端は欠損している。断面は方形に近い。Ｐ60では、ほかに土器類が出土していないため詳細な時期は不明であるが、鉄鏃の型式から古墳時代後期に属する可能性が高い。

Ｍ６は、SX２の北半部の灰褐色の埋土から出土した。1.52㎝×1.28㎝、厚さは0.95㎝のＬ字形を呈しており、重さは4.25ｇを測る。Ｌ字形の内側は窪んでおり、表面にも段がみられるが、全体的に丸みを帯びながらも角を形成していることから、銅製品の可能性を考えるが、製品名・用途など不明である。銅滴の可能性もある。部分的に緑青を生成しており、表面が皮状に剥がれた内面には、暗紫色を呈した丸みを帯びた塊がのぞく。蛍光Ｘ線分析装置による材質分析の結果、銅、鉛の元素が顕著に検出され、わずかに錫の元素も認められた。表面部分は鉛の検出される割合が多く、内部は銅の元素が検出される割合が多かった。

Ｐ53埋土から鉄滓（Ｍ７）が出土した。椀形を呈し、平面は楕円形に近く、長径約7.0㎝、短径約6.0㎝を測る。断面では下面は弧状に近く、上面も丸みを有している。厚さは最大で約4.0㎝である。現重量は、土などの付着物も含めて約210ｇである。遺構からほかに遺物が出土していないため、時期を判断することは難しい。

［参考文献］

大平　茂　1991「近世丹波焼擂鉢の型式分類とその編年」『下相野窯址群』 兵庫県文化財調査報告第107冊 兵庫県教育委員会

岡田章一　1996「兵庫県における土器からみた貿易陶磁」『中近世土器の基礎研究』 XI　日本中世土器研究会

長谷川眞　2007「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』 21　日本中世土器研究会

菅榮太郎　1995「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」『長原・瓜破遺跡 発掘調査報告』 Ⅷ (財)大阪市文化財協会

久保弘幸　2010「溝口遺跡」『三田市史』 第８巻　考古編　三田市

兵庫県教育委員会　1987「青野ダム建設に伴う発掘調査報告書（1)」 兵庫県文化財調査報告書第50冊

兵庫県教育委員会　1979「三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報（2)」

表 4　出土石器計測表

報告番号	器種	形態	石材	産地(肉眼)	遺構	土層	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	分析No.	産地
1	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	15.3	15.9	2.7	0.3		
2	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　上層	10.7	16.7	3.5	0.5		
3	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　上層	14.4	13.9	2.8	0.3		
4	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	二上山？		縄紋包含層　上層	19.5	17.2	3.9	0.7		
5	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　上層	17.9	14.5	3.8	0.9		
6	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	(13.5)	(16.5)	3.5	0.6		
7	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	23.9	16.7	3.3	0.8		
8	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　上層	22.6	13.4	3.5	0.6		
9	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	二上山？		縄紋包含層　上層	15.6	9.7	3.0	0.1		
10	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	19.8	12.5	3.7	0.4		
11	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	(15.8)	15.5	3.3	0.4		
12	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	(15.3)	14.5	3.3	0.5		
13	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	22.0	18.7	4.3	1.3		
14	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	(18.0)	14.5	5.5	1.2		
15	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	？		縄紋包含層　上層	(16.4)	(19.4)	3.7	0.4		
16	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	(10.0)	(10.4)	4.5	0.09		
17	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　上層	28.1	21.0	5.0	1.7		
18	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	(16.3)	22.8	5.2	1.1		
19	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　上層	33.3	26.7	13.5	12.6	11	二上山
20	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　上層	35.0	26.1	11.5	9.1	6	二上山
21	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　上層	35.5	22.5	16.2	11.5	8	二上山
22	楔形石器		ﾁｬｰﾄ			縄紋包含層　上層	26.5	21.9	12.0	6.7		
23	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	46.9	38.5	18.7	31.0		
24	叩石		砂岩			縄紋包含層　上層	84.0	66.9	49.5	383.3		
25	磨石		不明			縄紋包含層　上層	96.5	89.0	71.0	786.7		
26	叩石		砂岩			縄文包含層　上層	96.5	75.0	45.0	454.6		
27	石核		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	44.1	30.6	18.4	24.0	15	二上山
28	石核		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　上層	53.3	23.9	15.5	23.3	7	二上山
29	剥片		ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　上層	49.2	36.5	12.8	15.3		
30	剥片		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　上層	28.5	25.7	11.0	5.9	5	二上山
31	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	二上山？		縄紋包含層　下層上面	13.1	9.7	3.5	0.3		
32	石鏃	凹基無茎式	ﾁｬｰﾄ			縄紋包含層　下層上面	16.8	13.3	3.6	0.4		
33	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　下層	(17.6)	18.8	4.0	0.9		
34	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　下層	12.5	17.9	3.0	0.4		
35	石鏃	不明	ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	17.1	17.8	3.5	0.4		
36	石鏃	凹基無茎式	ｻﾇｶｲﾄ	二上山？		縄紋包含層　下層	25.0	(11.5)	2.9	0.4		
37	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	？		縄紋包含層　下層	47.7	26.9	6.0	3.3		
38	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　下層	27.7	19.8	5.7	1.7		
39	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	金山？		縄紋包含層　下層	27.0	6.0	4.0	0.5		
40	石錐		ﾁｬｰﾄ			縄紋包含層　下層	24.5	19.3	6.0	1.9		
41	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	二上山？		縄紋包含層　上層	23.5	10.5	5.4	1.2		
42	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	26.0	18.2	12.8	5.1	14	二上山
43	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	23.3	27.4	9.5	5.0	13	二上山
44	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	39.0	20.8	13.3	5.7	10	二上山
45	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　下層	17.1	28.6	8.2	3.6	3	讃岐
46	二次加工剥片		ｻﾇｶｲﾄ	金山		縄紋包含層　下層	15.0	20.4	4.3	1.1		
47	二次加工剥片		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	21.1	12.8	3.2	0.7	9	二上山
48	二次加工剥片		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　上層	28.3	9.5	3.1	1.0	2	二上山
49	石核		ｻﾇｶｲﾄ	二上山		縄紋包含層　下層	53.8	28.6	18.8	24.7	12	二上山
50	二次加工剥片		ｻﾇｶｲﾄ	二上山	礫集中部下層	縄紋包含層　下層	36.7	20.3	11.9	5.0	16	二上山
51	楔形石器		ｻﾇｶｲﾄ	二上山	SK11	遊離遺物	28.1	23.4	9.0	5.5	4	二上山
52	石錐		ｻﾇｶｲﾄ	二上山？	SK18	遊離遺物	37.3	12.0	5.3	1.5		
53	楔形石器	スポール	ｻﾇｶｲﾄ	二上山	P70	遊離遺物	44.6	18.8	7.3	5.2	1	二上山
54	砥石		凝灰岩		SE1		42.0	49.0	12.0	29.6		
55	砥石		砂岩？		SE2		65.0	28.0	20.0	43.4		
56	石皿		不明			縄紋包含層　上層	409.0	387.0	62.0	13600		
57	石臼		花崗岩		SE6		161.0	263.0	99.0	5300.0		

第５章　自然科学分析

第１節　伊勢貝遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

㈱加速器分析研究所

１．測定対象試料

伊勢貝遺跡は、兵庫県三田市小野字伊勢貝に所在する。測定対象試料は、竪穴住居跡（竈）出土炭化物（１：IAAA-102492、２：IAAA-102493）２点である（表５）。

２．測定の意義

遺構の年代を確定する。

３．化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ(1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表５に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

(6) グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

３MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C)、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

(1) δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表５）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2) ^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用す

る（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表5に、補正していない値を参考値として表6に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表5に、補正していない値を参考値として表6に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal 09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表6に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6．測定結果

竪穴住居跡（竈）出土炭化物の^{14}C年代は、1が1930±30yrBP、2が1810±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、1が31～122cal AD、2が139～242cal ADの間に各々3つの範囲で示される。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表5　測定対象資料

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-102492	1	遺構：竪穴住居跡（竈）	炭化物	AAA	-24.99 ± 0.61	1,930 ± 30	78.64 ± 0.26
IAAA-102493	2	遺構：竪穴住居跡（竈）	炭化物	AAA	-26.44 ± 0.58	1,810 ± 30	79.83 ± 0.28

[#4027]

表 6　測定対象資料

測定番号	δ13C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-102492	1,930 ± 30	78.65 ± 0.24	1,929 ± 26	31calAD - 37calAD (4.8%) 52calAD - 88calAD (46.5%) 104calAD - 122calAD (16.9%)	18calAD - 130calAD (95.4%)
IAAA-102493	1,830 ± 30	79.60 ± 0.26	1,809 ± 27	139calAD - 158calAD (14.0%) 167calAD - 196calAD (23.3%) 209calAD - 242calAD (30.9%)	129calAD - 258calAD (91.2%) 300calAD - 318calAD (4.2%)

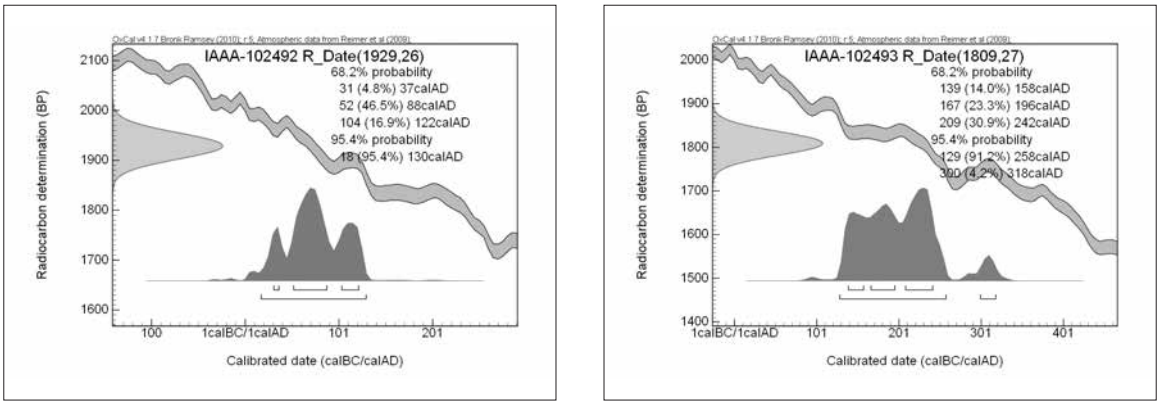
[参考値]

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150



第 4 図　[参考]暦年較正年代グラフ

第２節　伊勢貝遺跡出土サヌカイト製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

１．はじめに

三田市小野字伊勢貝に所在する伊勢貝遺跡は、南北方向の谷に東から突き出た扇状地上に立地し、古墳時代、平安～室町時代、近世の遺構、遺物および縄紋時代、弥生時代後期の遺物が出土している。当遺跡より出土した縄紋時代のサヌカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

２．試料と方法

分析対象は伊勢貝遺跡より出土したサヌカイト製石器16点である（表７）。時期は、出土土器より縄紋時代後期末の宮滝式期と思われる。石器は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

表７　分析対象一覧

分析№	ﾈｰﾐﾝｸﾞ番号	報告番号	出土
1	2	53	P-70
2	8	48	
3	35	45	№2測点
4	36	51	SK-11
5	38	30	№6～南2m　縄紋包含層上層
6	39	20	№6～南4m～10m（№5）縄紋包含層上層
7	40	28	
8	41	21	
9	42	47	№6～南5m　縄紋包含層下層
10	43	44	
11	44	19	
12	46	49	№5北2m～南5m　縄紋包含層下層
13	47	43	
14	50	42	№4～北5m　縄紋包含層下層
15	52	27	
16	53	50	№5南2m　礫集中部下層　縄紋包含層下層

分析装置は、㈱セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管はRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射径10㎜、電流1～63μA（デッドタイムが20%未満になるよう設定）、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）とルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

1）Rb分率=Rb強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

2）Sr分率=Sr強度×100/（Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）

3）Mn強度×100/Fe強度

4）log（Fe強度/K強度）

そしてこれらの指標値を用いた２つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度/K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定するものである。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象の石器と同様

の条件で測定した。表 8 に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

表 8　原石採取地と判別群名称

エリア	判別群	原石採取地（試料点数）
二上山	春日山	春日山みかん畑内（10）
讃　岐	国分台 1	自衛隊演習場付近（5）、神谷神社前（13）、高産霊神社谷（12）、国分台下みかん畑（5）、蓮光寺（10）
	国分台 2	
	赤子谷•法印谷	赤子谷第1地点（5）、赤子谷第2地点（5）、法印谷（10）
	金山	北峰道路脇（10）、金山南麓（10）
	城山	城山南側（5）、城山北側（5）
	雄山•雌山	雄山（5）、雌山（5）
	双子山	双子山南嶺（10）

3．分析結果

表 9 に石器の測定値及び算出された指標値を、図 5 、図 6 に、サヌカイト原石の判別図と石器をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

判別図において、讃岐エリアの原石は雄山•雌山を除き非常に近接しており重複部分も多く、明確な区別は難しい。しかし、二上山エリアの原石と讃岐エリアの原石は明確にプロットされる位置が異なり、十分に区別可能である。

測定した石器のうち、分析№. 3 を除く15点が春日山、分析№.3は金山の範囲にプロットされた。表 9 に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少ないため、他の産地の可能性が無いとは言い切れないが、少なくとも判別図の一致しなかった産地のサヌカイトでないとはいえる。

表 9　分析値および産地推定結果

分析№.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{Mn*100}{Fe}$	Sr分率	$\log\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	報告№.
1	1.20	9.85	252.00	4.59	19.44	1.27	13.69	11.77	3.91	49.86	2.32	春日山	二上山	53
2	0.67	8.79	219.19	5.33	22.23	2.25	14.61	12.00	4.01	50.04	2.51	春日山	二上山	48
3	1.23	9.37	223.50	5.96	17.56	2.16	19.81	13.10	4.19	38.60	2.26	金　山	讃　岐	45
4	0.68	8.61	225.35	4.24	19.46	1.97	12.55	11.09	3.82	50.91	2.52	春日山	二上山	51
5	0.62	8.82	229.88	4.27	19.15	1.90	13.62	10.96	3.84	49.18	2.57	春日山	二上山	30
6	1.15	9.21	245.90	4.59	20.19	1.89	13.00	11.56	3.74	50.90	2.33	春日山	二上山	20
7	0.71	8.41	218.33	3.66	17.93	1.86	12.91	10.06	3.85	49.33	2.49	春日山	二上山	28
8	0.79	8.53	215.35	3.34	17.04	1.36	11.96	9.92	3.96	50.55	2.44	春日山	二上山	21
9	1.13	9.66	238.69	4.81	20.74	1.77	13.18	11.88	4.05	51.21	2.33	春日山	二上山	47
10	0.91	8.45	225.19	4.62	18.70	1.94	12.69	12.18	3.75	49.28	2.39	春日山	二上山	44
11	1.07	8.29	216.41	3.75	16.90	1.33	11.64	11.15	3.83	50.27	2.31	春日山	二上山	19
12	0.99	9.41	235.44	3.37	17.20	1.37	12.04	9.91	4.00	50.62	2.37	春日山	二上山	49
13	1.03	9.00	235.27	4.36	19.77	1.72	13.60	11.04	3.82	50.11	2.36	春日山	二上山	43
14	0.58	8.45	216.91	3.99	18.07	1.59	12.87	10.91	3.90	49.49	2.57	春日山	二上山	42
15	0.58	9.40	225.99	4.40	18.98	1.89	13.15	11.44	4.16	49.40	2.59	春日山	二上山	27
16	0.86	8.55	228.57	4.25	19.31	1.65	12.76	11.19	3.74	50.87	2.42	春日山	二上山	50

4．終わりに

伊勢貝遺跡より出土したサヌカイト製石器16点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、16点のうち、15点は二上山産、1点は讃岐地方産の可能性が高いと推定された。

[引用・参考文献]

望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」：511-517，かながわ考古学財団.

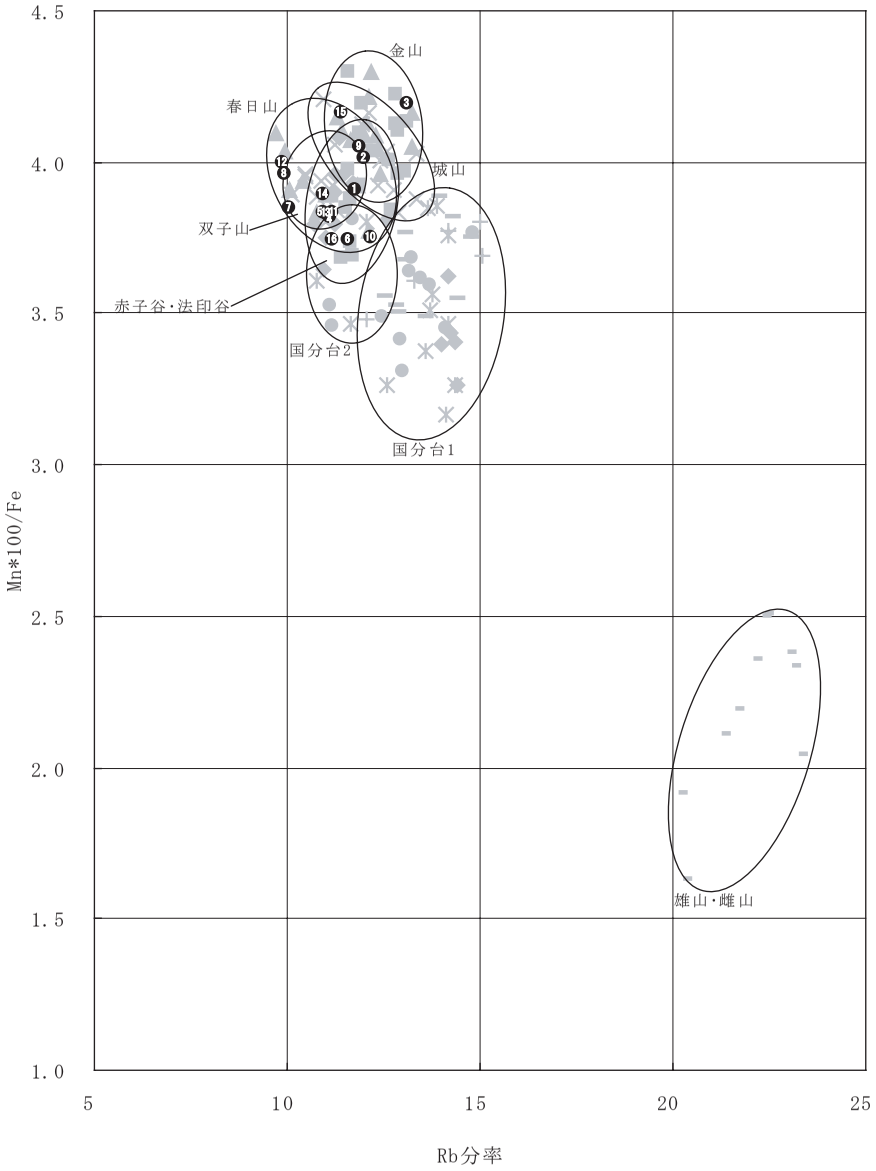


図５　サヌカイト産地推定判別図（1）

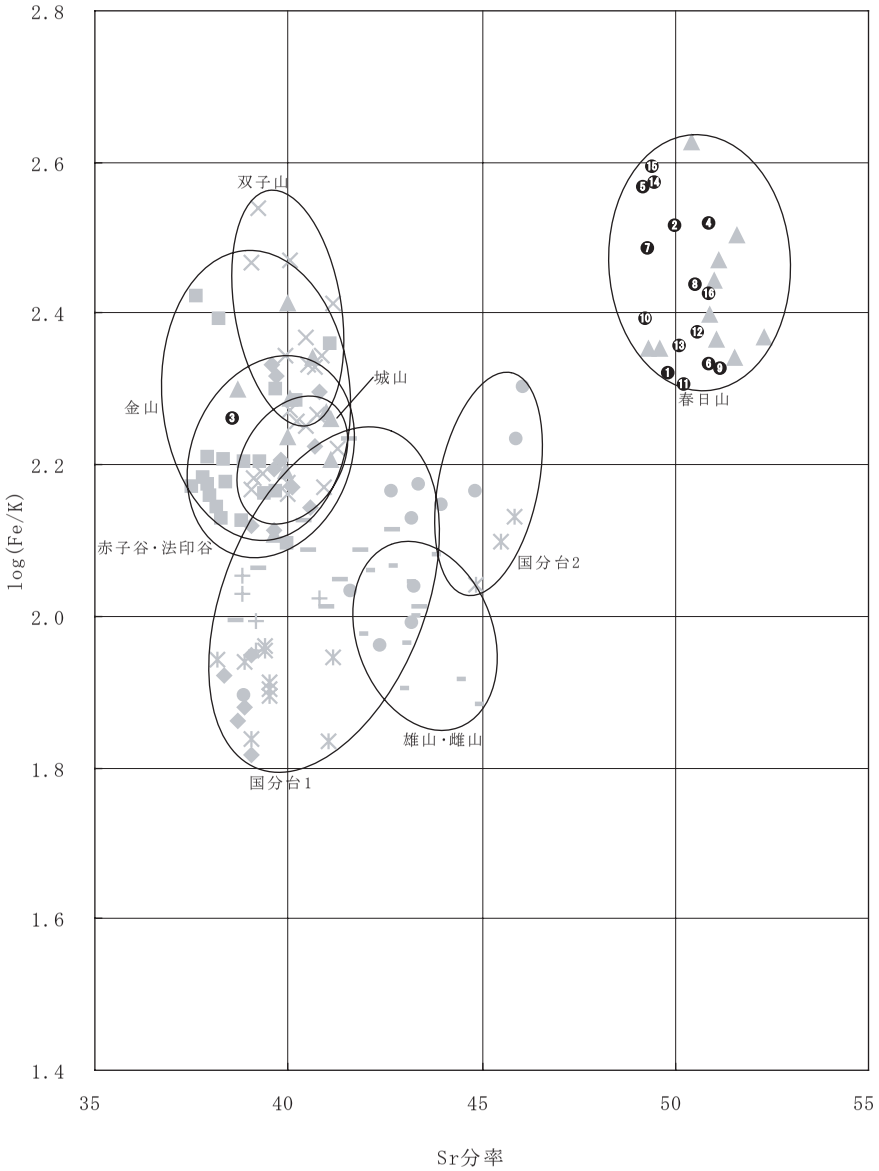


図６　サヌカイト産地推定判別図（2）

第６章　まとめ

第１節　三田市域の弥生時代後期末～古墳時代前期の土器について

伊勢貝遺跡の今回の調査において、Ｐ70やSE１から弥生時代後期末～古墳時代前期の土器が出土したが、三田市域においてはその時期の詳細な編年が未確立の状況にある。かつて、川除遺跡において細分がおこなわれた（高瀬 1992）が、川除遺跡の一部分に限られていたことから、ここでは三田市域の弥生後期末～古墳時代前期の土器変遷について概観し、伊勢貝遺跡出土土器の編年的位置づけをおこなう。

後期後半第２段階　貴志遺跡（岸本2010a）や下深田遺跡Ⅰ区土壙（坑）（岸本・久保2010b）出土の甕や三輪・宮ノ越遺跡竪穴住居１（中井・田中ほか1998）の一括資料を指標とする。

後期後半第３段階　弥生時代後期の最終末で、川除遺跡Ⅰ区SH06・Ⅰ区SK24・Ⅲ区SH52出土一括資料（山田・甲斐・高瀬 1992）を指標とし、さらにこれらの順の変化があるものとみられる。川除遺跡編年案の川除４期から５期にあたるが、Ⅲ区SH52の土器群は川除３期とされていたものである。なお、十倉遺跡北Ａ住居跡床面出土資料は川除Ⅰ区SK24と併行時期にあると判断できる。

庄内期（古）段階　やや時期幅があるものの、桑原遺跡竪穴住居跡１出土土器群（吉田・深井ほか1986）を指標とする。川除遺跡では甕の底部や体部下半の形態において５期と６期では変化が激しいことから、それらの間に位置づけられる。高次・北ノ垣内遺跡SD201古相土器群（岸本2010b）や上井沢・小屋垣内遺跡SB１床面土器（岸本・久保2010a）もこの段階に含まれる。

庄内期（新）段階　川除６期にあたり、川除遺跡Ⅰ区SH28・Ⅰ区SK26出土土器群を指標とし、三輪・宮ノ越遺跡竪穴住居２出土土器（中井・田中ほか1998）もこの時期である。

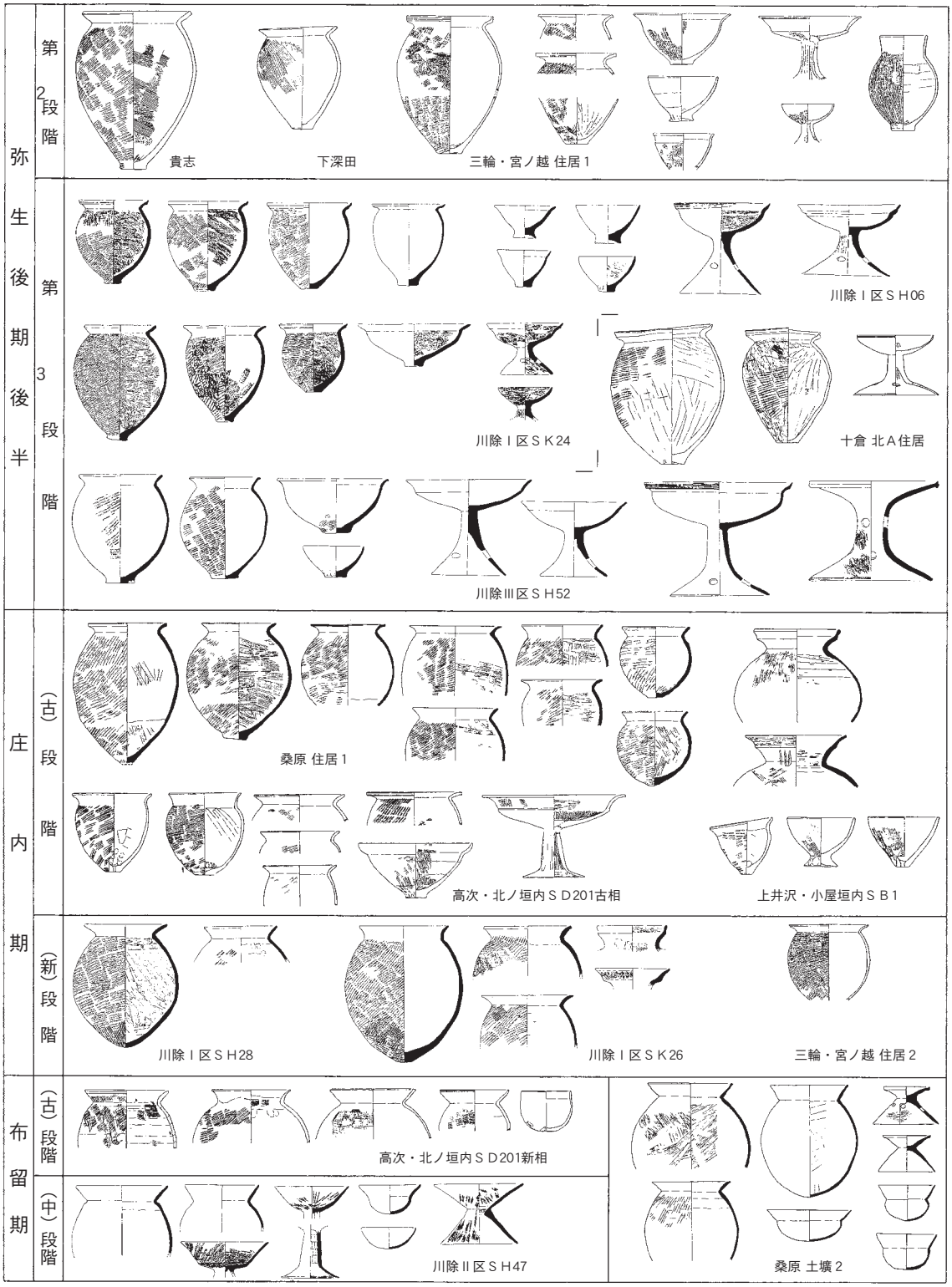
布留期（古）段階　良好な資料に恵まれないが、高次・北ノ垣内遺跡SD201新相土器群（岸本2010b）を指標とする。また、次の布留期（中）段階も含めた資料として、桑原遺跡土壙（坑）２出土土器群をあげることができるであろう。

布留期（中）段階　この段階の資料としては、川除７期とされた川除遺跡Ⅱ区SH47出土土器群をあげておきたい。小型器台の形態により、西村氏（西村2011）の布留式古段階の新相から中段階の古相に位置づけておきたい。

なお、これらの変遷の指標については紙数のため割愛するが、端的には甕の球胴化と尖底化につきる。

伊勢貝遺跡のＰ70およびSE１出土甕のうち27を除くと、外面がタタキ成形で頸部があまり屈曲せず口縁端部を丸くおさめるタイプであり、これらは弥生時代後期後半より出現し、しだいに多数を占めるようになって布留式段階で消失していく。Ｐ70出土の28・29は時期幅を有するが、27の甕は高次・北ノ垣内遺跡SD201古相資料の中に頸部が鋭く外反する形態的類似例があり、体部のタタキとハケの違いがあることから、庄内期（新）段階から布留期（古）段階に位置づけておきたい。

SE１出土土器は口縁部のみの資料であり時期の限定は難しいが、庄内期と判断しておく。可能性としては（古）段階に位置づけできるようである。



第７図　三田市域の弥生時代後期末～古墳時代前期の土器変遷（１：12）

［参考文献］

岸本一宏 2010a「貴志遺跡、貴志・樋戸遺跡」『三田市史』第 8 巻考古編　三田市

岸本一宏 2010b「高次・北ノ垣内遺跡」『三田市史』第 8 巻考古編　三田市

岸本一宏 2010c「十倉遺跡」『三田市史』第 8 巻考古編　三田市

岸本一宏・久保弘幸 2010a「上井沢・小屋垣内遺跡」『三田市史』第 8 巻考古編　三田市

岸本一宏・久保弘幸 2010b「下深田遺跡」『三田市史』第 8 巻考古編　三田市

高瀬一嘉 1992「弥生時代～古墳時代の土器」『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告　第104冊　兵庫県教育委員会

中井秀樹・田中賢人ほか 1998『三輪・宮ノ越遺跡』三田市文化財調査報告書 第14冊　三田市教育委員会

西村　歩 2011「土師器の編年③近畿」『古墳時代の考古学』 1 古墳時代史の枠組み　同成社

山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉 1992『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告　第104冊　兵庫県教育委員会

吉田　昇・深井明比古ほか 1986『桑原遺跡』兵庫県文化財調査報告 第37冊　兵庫県教育委員会

第２節　オンドル状遺構について

伊勢貝遺跡の竪穴住居跡SH２で検出した竈と煙道部はＬ字形竈の形態を示し、オンドル状遺構と称されるものである。オンドル状遺構（Ｌ字形竈）は、大多数の竈の煙道部が竈の燃焼部からまっすぐのびて住居の壁の外に出るのに対して、竈からＬ字形に曲がって住居の壁の外側あるいは内側に沿って右や左にのびて、住居の隅部分の壁から外に出ていく形態のものである。

オンドル状遺構（Ｌ字形竈）は朝鮮半島北部のカン（?）と呼ばれる炊事の余熱を利用した壁暖房施設に類似しており、床暖房のオンドル（温突）とは区別する意見も多くある。また、検出遺構の形状を重視してＬ字形カマドと称されることも多い。ここでは屋内の暖房機能を有する施設と広義に解釈して、広く使用されているオンドル状遺構（Ｌ字形竈）という名称を使用しておく。

このオンドル状遺構（Ｌ字形竈）を造り付けた住居が検出された場合は、渡来人との関りが考えられ（亀田 2003)、朝鮮半島からの渡来人の存在が推定できる根拠とすることができるであろう。

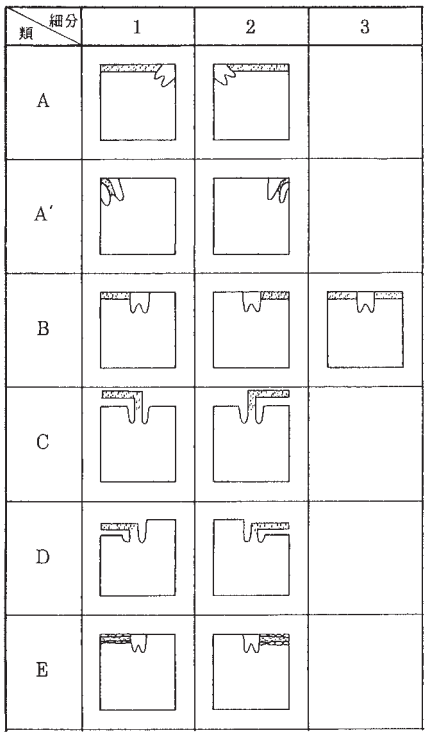
オンドル状遺構は、４世紀の初頭までには日本で認められるようになり、８世紀まで存在するのであるが、通常の竈に比べて極めて限られており、全国でも40遺跡程度（松室 1996）にとどまる。それによれば、オンドル状遺構の分布は北部九州と近畿地方に多く、北部九州では福岡県、近畿地方では京都府・滋賀県が特に多い。近畿地方では滋賀県西ノ辻遺跡で４世紀後半に出現し、滋賀県大塚遺跡、京都府今林遺跡、大阪府小阪遺跡、滋賀県岩畑遺跡、和歌山県田屋遺跡などで５世紀代のものが確認されている。また、京都府綾部市の青野・綾中遺跡群では６世紀末～８世紀前半にかけて30棟以上が確認されており、青野型住居（中村 1982）と呼称されている。

兵庫県内では管見によれば、神戸市郡家遺跡や平成20年に兵庫県立考古博物館が調査をおこなった姫路市市之郷遺跡SH－Ｅ20で確認されているにすぎない。郡家遺跡では城の前地区で検出された４棟の住居跡について、Ｌ字形の煙道が住居内を走る「郡家型住居Ａ」（第23・26次調査SB02・03）と住居外の「郡家型住居Ｂ」（第24次調査SB05・06）に分け、Ｂが発展形態とされた（丸山 1990)。後にＡは５世紀後半、Ｂは６世紀前半に時期修正されている。市之郷遺跡では竈本体を確認できなかったものの、竪穴住居の壁内部に沿って長さ約1.2mの煙道部を検出している。時期は６世紀末～７世紀前葉である。

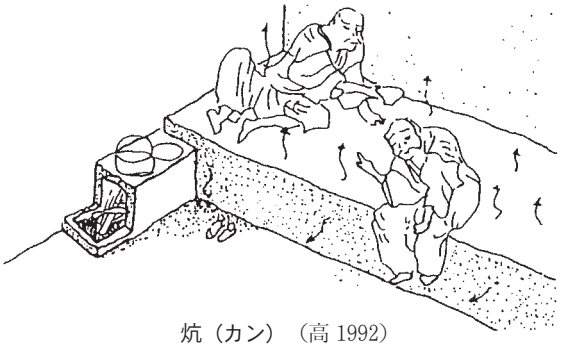
Ｌ字形カマドとしてオンドル状遺構の形態分類をおこなわれた松室氏によれば（松室 1996)、郡家遺跡のSB02・03はＢ２類、SB05・06はＣ２類に分類されており、市之郷遺跡例もＢ類に分類できると判断される。また、伊勢貝遺跡SH２は煙道部がＬ字形ではなくＴ字に近い点がやや特異であるが、松室氏のＤ類に分類でき、右側に煙道が存在することからＤ２類になると思われる。なお、伊勢貝遺跡の煙道部で、西（左）側に張り出す部分の機能については不明である。

松室氏の分類のうち、住居コーナーに竈を有し、壁沿いに煙道がのびるＡ類と、竈が辺の中央部にあって壁際にのびるＢ類および住居の一部を掘り残して煙道を通すＤ類は、ともに煙道部が屋内に存在することから、屋内において煙道を覆うかたちで壇を構築してカンのような暖房施設とすることができる点で、その機能面においてＡ・Ｂ・Ｄの３類は変わりがないと推定される。一方、煙道が住居外で折れて壁に沿ってのびるＣ類は、壁の外側の屋外に存在することから、壁自体を温めるという熱効率の点と屋内施設の構造の点で前記の３類とは異なる可能性がある。

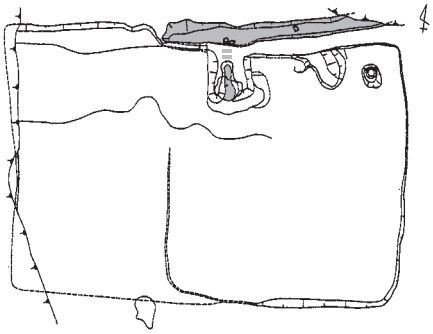
伊勢貝遺跡でオンドル状遺構（Ｌ字形竈）を有する竪穴住居跡が検出されたことは、朝鮮半島から移住し



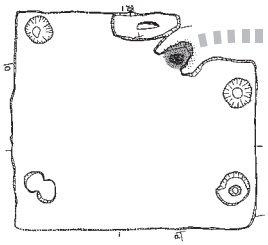
松室氏による分類（松室1996、一部省略）



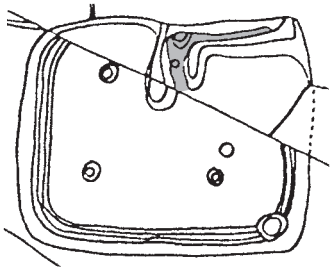
炕（カン）（高 1992）



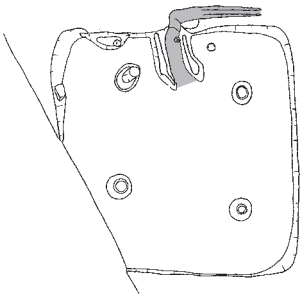
伊勢貝遺跡ＳＨ２（本書）



青野遺跡ＳＢ207（中村1988）



郡家遺跡ＳＢ02（丸山1990）



郡家遺跡ＳＢ06（丸山1990）

第８図　オンドル状遺構（Ｌ字形竈）の分類と諸例（住居跡図の縮尺：1/150）

てきた渡来人が、５世紀末～６世紀初頭の時期には伊勢貝遺跡でも住んでいた可能性が高いことを示しており、５世紀後葉のＴＫ208型式期～ＴＫ23型式期に開始された三田末窯跡群中で最も古い郡塚１号窯（第１図64、菱田 2010）の成立には、渡来人の関与があったことを示唆するものであろう。

[参考文献]

亀田修一 2003「渡来人の考古学」『七隈史学』第４号　七隈史学会

高　正龍 1992「朝鮮半島」『古墳時代の竈を考える』第一分冊　第32回埋蔵文化財研究集会

中村孝行 1982「青野遺跡第５次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第９集　綾部市教育委員会

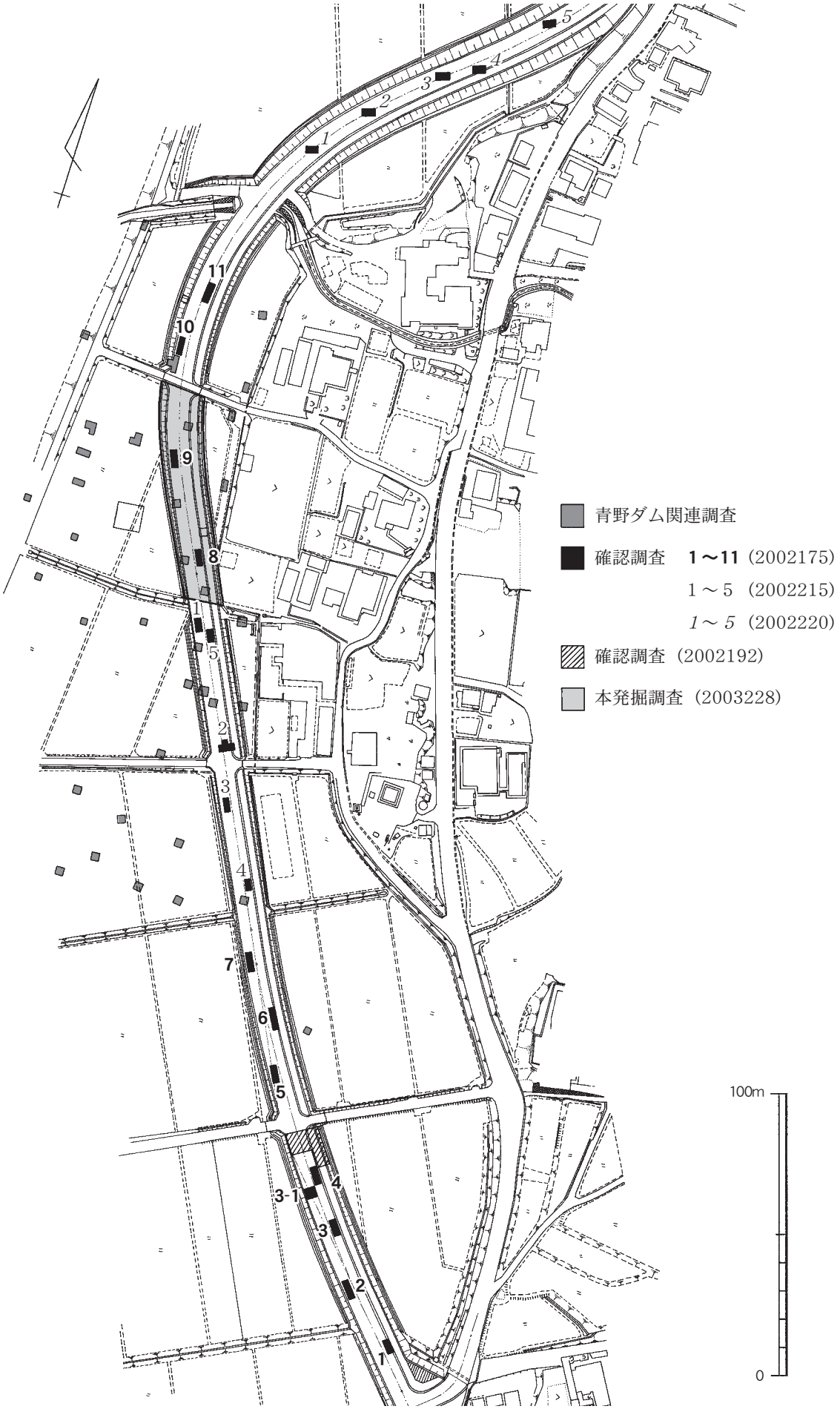
中村孝行 1988「青野遺跡第12次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第15集　綾部市教育委員会

菱田哲郎 2010「郡塚窯跡群第１号窯跡」『三田市史』第８巻考古編　三田市

松室孝樹 1996「竪穴住居に設置されるＬ字形カマドについて」『韓式土器研究』Ⅵ　韓式土器研究会
丸山　潔 1990「郡家遺跡　城の前地区第24次調査、城の前地区第26次調査」『昭和62年度　神戸市埋蔵文化財年報』
神戸市教育委員会

図　　版

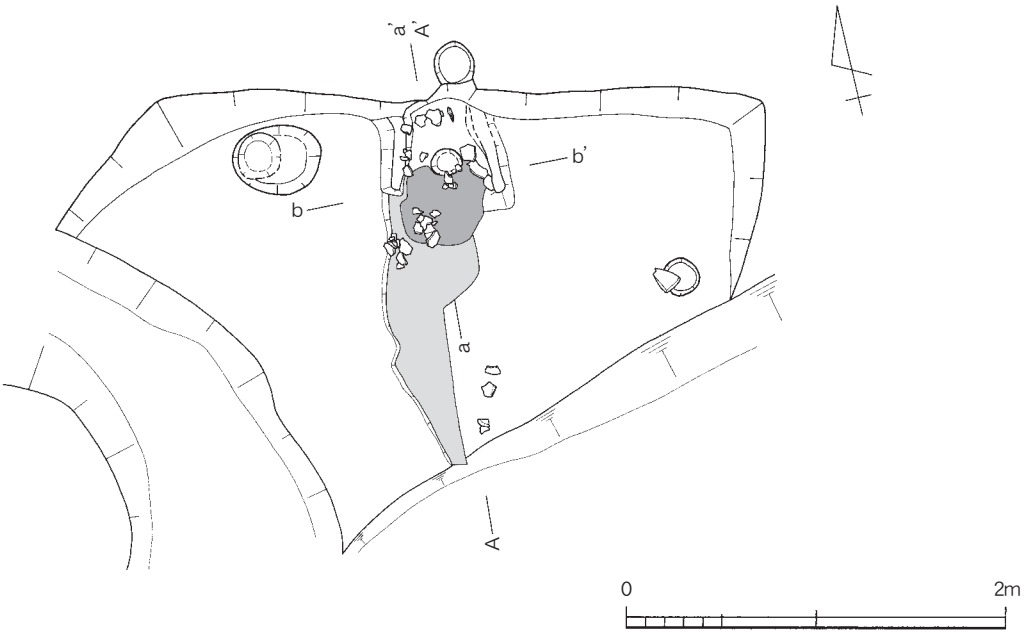
図版1　調査位置図

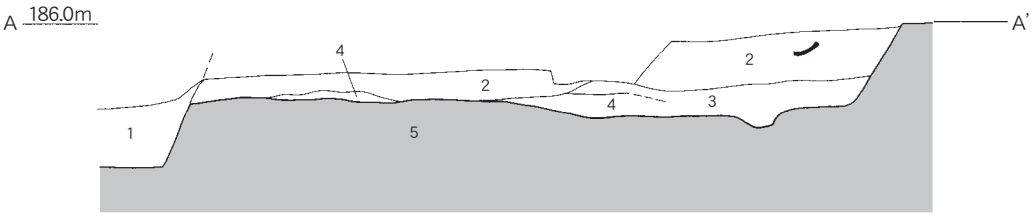

青野ダム関連調査
確認調査　1～11（2002175）
1～5（2002215）
1～5（2002220）
確認調査（2002192）
本発掘調査（2003228）
100m
0

図版2　遺構配置図

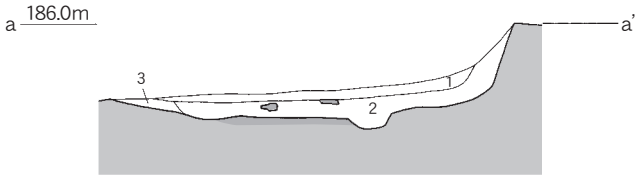
Y=82,230
Y=82,250
X=-116,150
X=-116,170
X=-116,190
Y=82,270
SE9
SE10
SE11
SE8
SK12
SK14
SK10
SK18
SK19
SX4
P70
P75
SK11
SH2
P74
P60
SK15
SK20
SK13
SE5
P79
SE4
SE5
P53
P54
SK8
焼土2
SE6
SE1
SK16
SK17
P43
P50
P42
SK9
SE2
P61
P41
P40
SX3
P77
P11
SB1
SK7
SB2
P10
P39
SK6
P33
P8
SB3
P19
SK3
P36
SK5
P3
SK1
SB4
P4
SD1
P78
SX1
SX2
SH1
0
20m

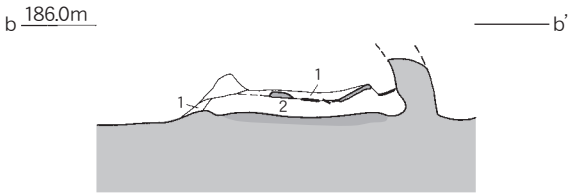
図版3　竪穴住居跡SH1



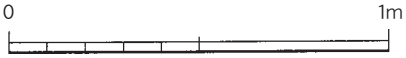


1. 2.5Y4.2/1 黄灰色　粗粒シルト～極細粒砂で中粒砂～粗粒砂含む
2. 10YR4/2 黒褐色（暗灰褐色）極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫含む　マンガン多く含み土器含む
3. 7.5YR5/4 にぶい褐色（赤褐灰色）細粒砂～極粗粒砂で極細粒砂と細礫～中礫少量含む　マンガン多く含む　竈崩落土
4. 7.5YR2/1 黒色（黒褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む　炭化物含む　焦土層
5. 2.5Y6.7/5.5 明黄褐色（明黄褐色～黄灰色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～中礫多く含む　地山

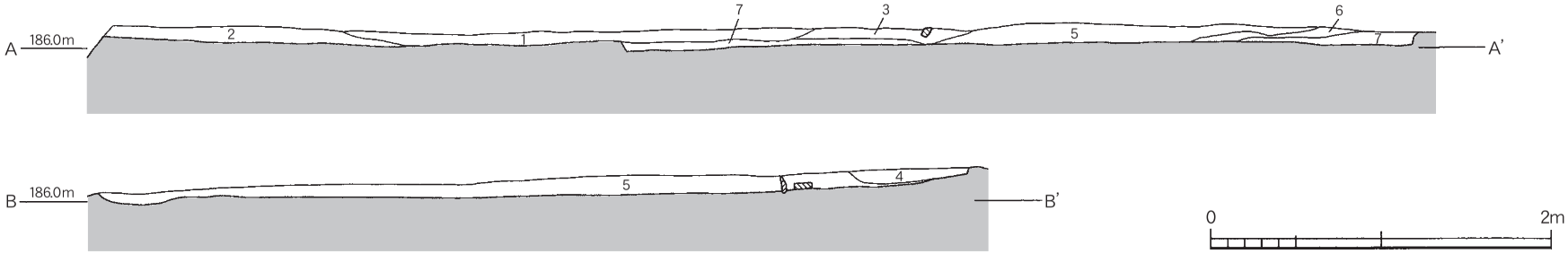




1. 10YR4/2 灰黄褐色（濁褐灰色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂多く含む
2. 5YR2.5/1 黒褐色（暗茶褐色）極細粒砂で細粒砂～粗粒砂少量混じる　焦土層　主として上面に土器片含む　焼土・炭化物含む
3. 5YR2/1 黒褐色（黒褐色）粗粒シルト～極細粒砂　炭化物・灰・土器片含む

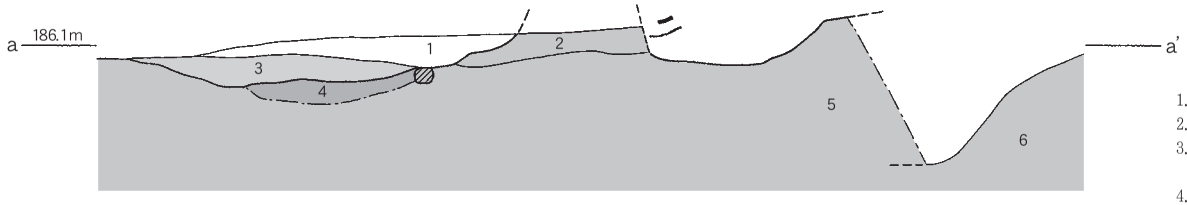


図版4　竪穴住居跡SH2

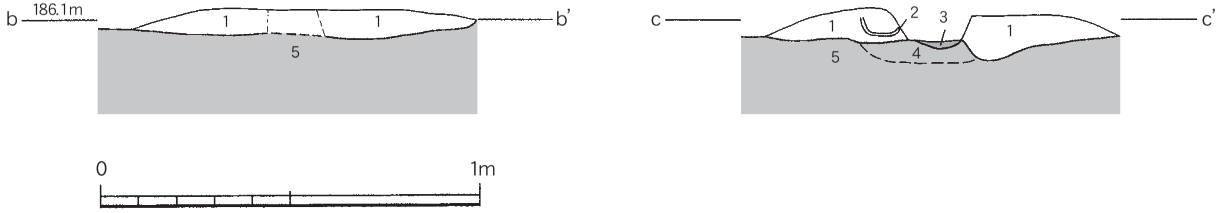


1. 10YR4/2.4 灰黄褐色（濁茶褐色）極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫と中礫含む　土器片含む
2. 10YR3.8/2 灰黄褐色（濁茶褐色）極細粒砂～細礫で中礫多く含む
3. 10YR4/2 灰黄褐色（明茶褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂多く含む　粗粒砂～中礫少量含む
4. 10YR4.5/3.5 にぶい黄褐色（暗黄褐色）極細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細礫多く含む　土器片含む
5. 10Y4.5/2 灰黄褐色（茶褐色）極細粒砂まじり細粒砂～粗粒砂で極粗粒砂～細礫多く含む　中礫と土器片含む
6. 7.5YR3/1 黒褐色（暗褐色）極細粒砂で細粒砂含む　炭化物・焼土塊・土器片含む　焼土層
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色（茶褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫含む　土器片含む

竈 a



1. 10YR4/2 灰黄褐色（暗茶灰色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂多く含む　やや粘質
2. 7.5YR3/2 黒褐色（暗茶褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む　やや粘質
3. 5YR3/1 黒褐色（暗褐色）粗粒シルトで粗粒砂～細礫少量含む　焼土・土器片少量含む　粘質　焦土層
4. 5YR5/8 明赤褐色（明赤褐色）極細粒砂～細粒砂　焼土層
5. 砂礫層
6. 地山

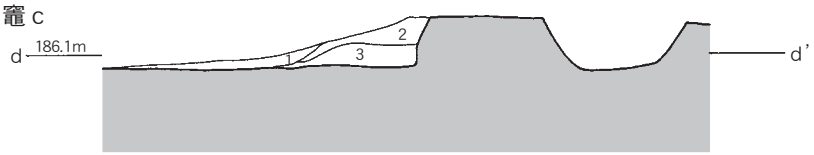


1. 7.5YR4/3 褐色（濁褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～中礫まじる焼土片含む
2. N6/ 灰色（灰色）還元部分
3. 焦土
4. 5YR6/8 橙色（橙色）焼土
5. 2.5Y6/5.1 明黄褐色（明黄灰色）極細粒砂まじり細粒砂～中礫

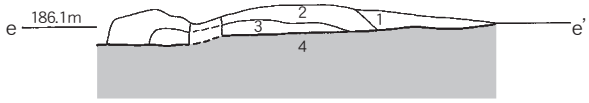
図版 5　S1 2 土層断面図

図版6　SH2土層断面図

竈c

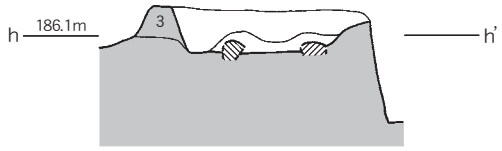


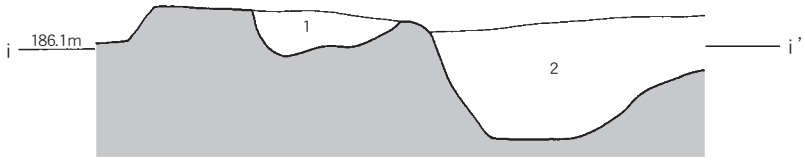
1. 10YR3.6/1.6 灰黄褐色（濁灰褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂多く含む
2. 5YR4/6 赤褐色（暗赤褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～細礫多く含む　やや粘質　焼土
3. 10YR3/2 黒褐色（濁茶褐色）極細粒砂で細粒砂～粗粒砂含む　焦土層　やや粘質　炭化物・焼土・土器片含む

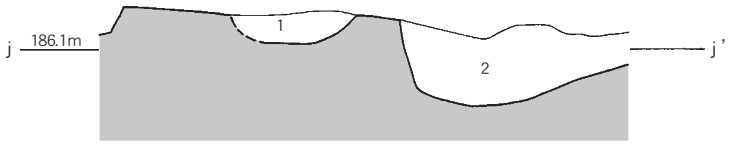


1. 10YR3.4/2 黒褐色（暗茶褐色）極細粒砂まじり細粒砂～中粒砂で中粒砂～５㎜大の中礫含む　焼土・炭化物少量含む
2. 7.5YR4/3 褐色（濁褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～粗粒砂まじる　焼土多く含む　竈壁崩落土か
3. 7.5YR3/2 黒褐色（暗灰褐色）極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫多く含む　炭化物含む　竈内部の堆積土か
4. 2.5Y6/5.1 明黄褐色（明黄灰色）極細粒砂まじり細粒砂～中礫　地山

煙道部

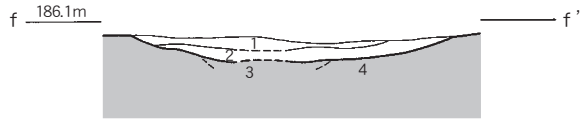


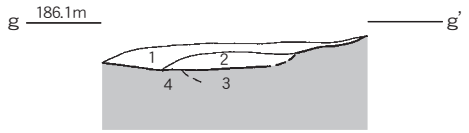




1. 5Y3/1 黒褐色（暗茶褐色）細粒砂～中粒砂で粗粒砂～細礫多く含む　中礫少量含む　焦土層　煙道内埋土　土器片・炭化物含む
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色（暗黄褐色）中粒砂～中礫（亜角～亜円礫）　砂礫層　淘汰悪い
3. 10YR4/4 褐色（茶褐色）極細粒砂～細粒砂で中粒砂～中礫含む　地山

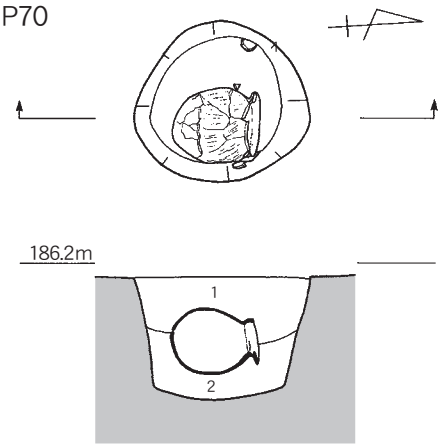
竈b





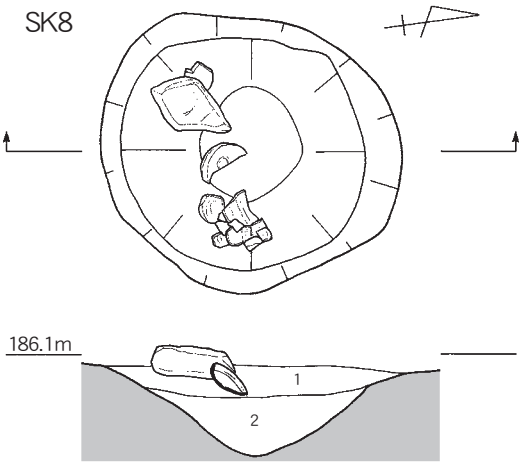
1. 10YR4/2.4 灰黄褐色（濁茶褐色）極細粒砂まじり細粒砂で中粒砂～細礫　貼床
2. 5YR3/1 黒褐色（暗褐色）粗粒シルトで粗粒砂～細礫少量含む　焼土・土器片少量含む　粘質　焦土層
3. 焼土層
4. 2.5Y6/5.1 明黄褐色（明黄灰色）極細粒砂まじり細粒砂～中礫

P70



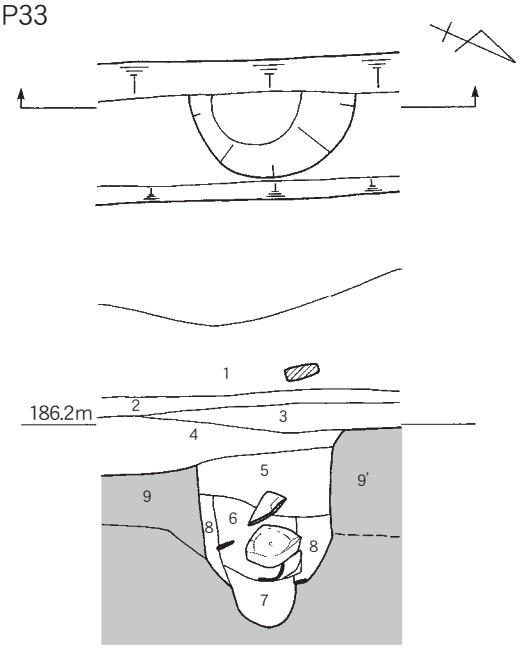
1. 埋土（土器内も同じ、但し　～φ3㎝礫が入る）
   10YR4/4 褐色　中砂混じりシルト質極細砂
2. 底の西　10YR5/3 にぶい黄褐色　細砂

SK8



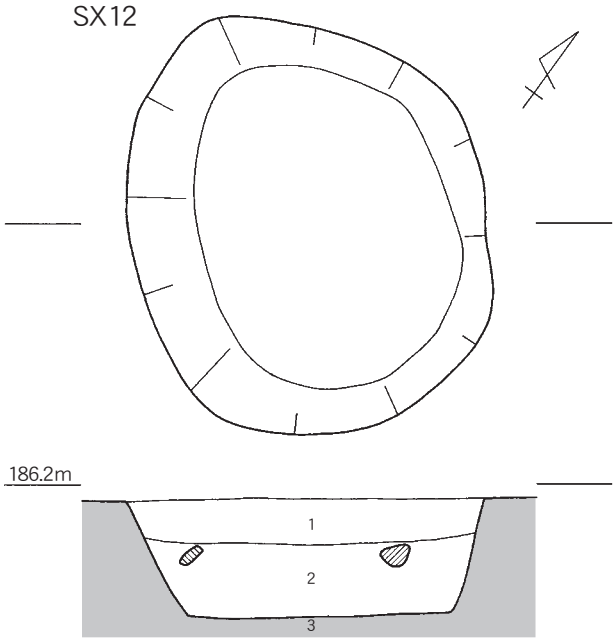
1. 10YR4/4 褐色　中砂混じり極細砂（ベースブロック含む）
2. 10YR3/4 暗褐色　中砂混じり極細砂

P33



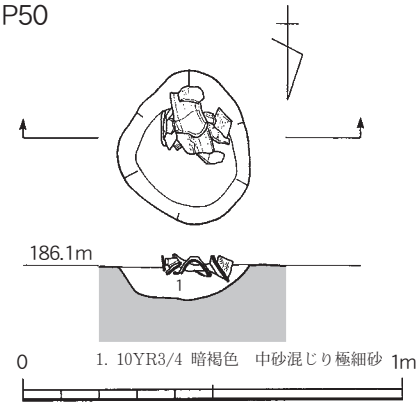
1. 床土
2. 10YR4/1 褐灰色　粗砂混じり極細砂
3. 耕土
4. 10YR2/3 黒褐色　粗砂混じり極細砂
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色　粗砂混じり極細砂
6. 10YR3/2 黒褐色　粗砂混じり極細砂
7. 10YR3/3 暗褐色　粗砂混じり中砂
8. 10YR3/4 暗褐色　粗砂混じり極細砂
9. 10YR4/4 褐色　粗砂混じり極細砂
9.'10YR4/4 褐色　粗砂混じり極細砂（礫φ5㎝多く含む）

SX12



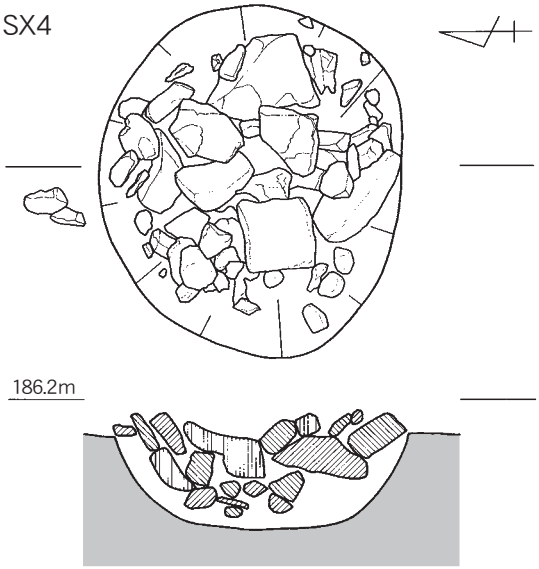
1. 10YR4/4 褐色　中砂混じり極細砂（～φ5㎝礫、白褐色小礫粒含む）
2. 10YR3/2 黒褐色　中砂混じり極細砂（遺物、礫～φ15㎝含む）
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色　細砂（小礫含む）

P50



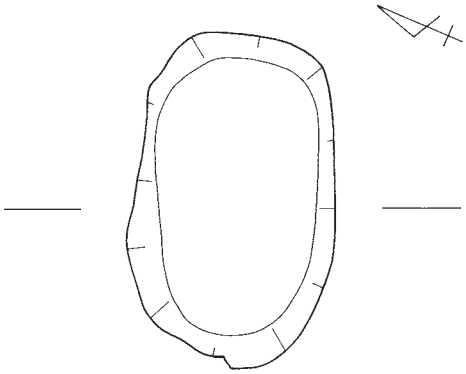
1. 10YR3/4 暗褐色　中砂混じり極細砂

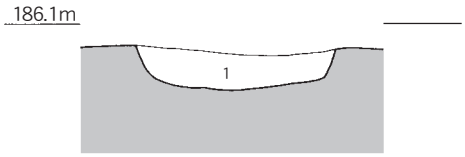
SX4



図版8　土坑

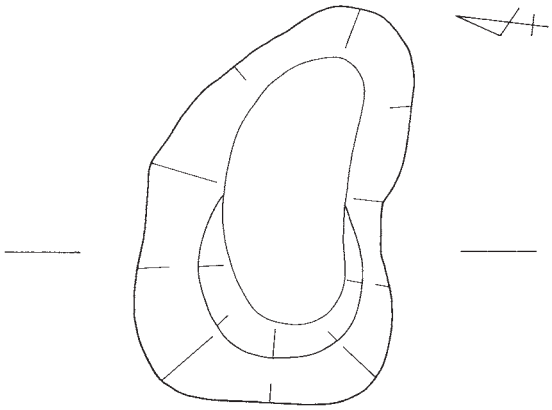
SK15

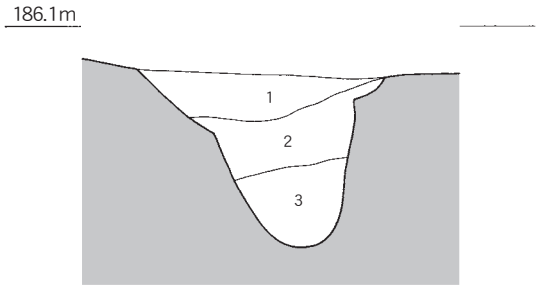




1. 10YR3/4 暗褐色　粗砂混じり極細砂

SK13



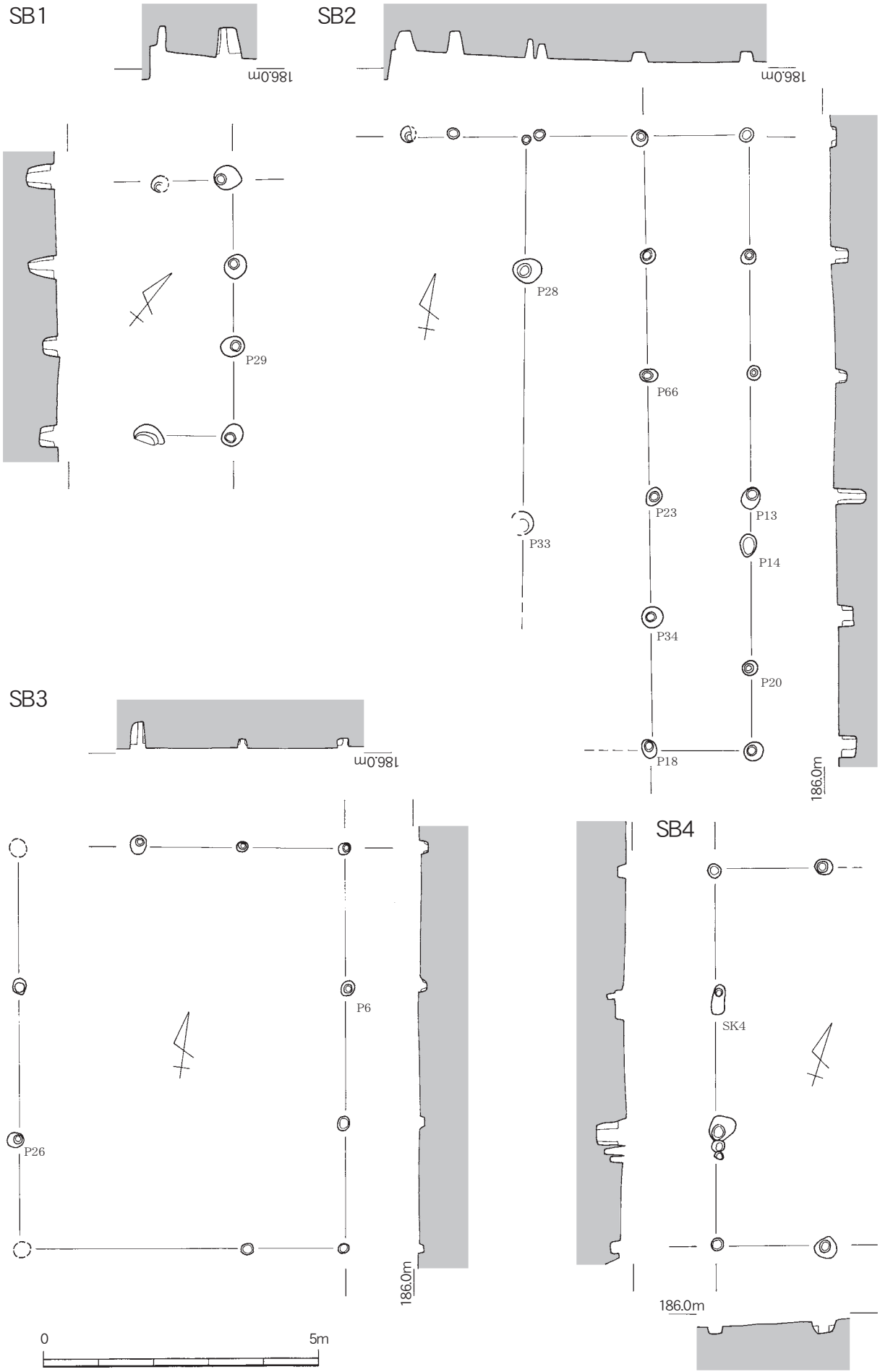


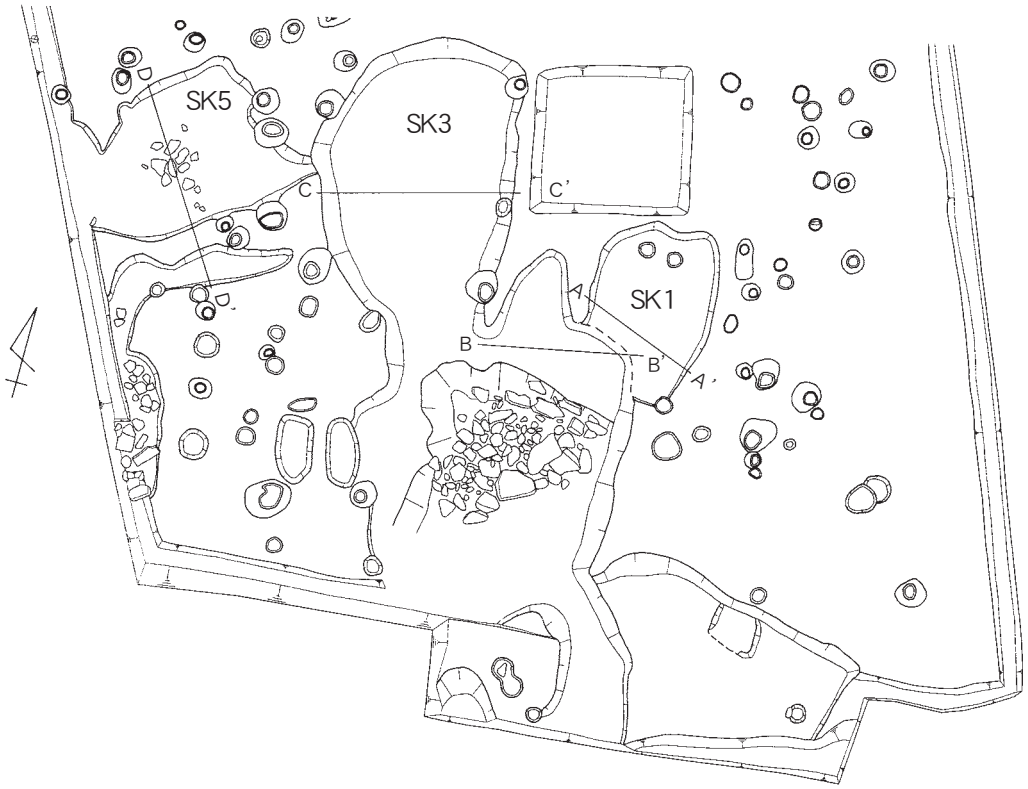
1. 10YR3/4 暗褐色　粗砂混じり極細砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色　極細砂混じり中砂
3. 10YR2/3 黒褐色　粗砂混じり極細砂
（焼土・炭・小片含む）

図版9　縄紋時代調査区

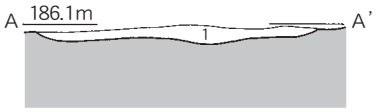
A
A'
186.2m
1m
0
5m
1. 10YR4/4 褐色　中砂混じり極細砂（直径3cmまでの中礫含む）
2. 10YR3/3 暗褐色　中砂混じり極細砂（直径3cmまでの中礫含む）
3. 10YR5/6 褐色　中砂混じり極細砂（直径3cmまでの中礫含む）
1. 耕土
2. 盛土
3. 旧耕土
4. 床土
5. 10YR3/3 暗褐色　細砂混じり粗砂（直径10cmまでの礫多く含む）
6. 10YR3/4 暗褐色　粗砂混じり極細砂（土壌化、包含層）
7. 10YR4/6 褐色　極細砂（シルト小ブロック多く含む、クレイボールか？）
8. 10YR4/4 褐色　中砂混じりシルト質極細砂（上面が上層遺構面、包含層上層）
9. 10YR3/3 暗褐色　中砂混じりシルト質極細砂（柱根？）
9'. 2.5YR5/2 暗灰黄色　粗砂混じり極細砂
10. 10YR3/4 暗褐色　中砂混じりシルト質極細砂（縄文包含層下層）
11. 10YR4/6 褐色　粗砂混じり細砂（直径20cmまでの礫多く含む）
11'. 10YR3/4 褐色　中砂混じりシルト質極細砂
B
B'
186.2m
SE9
SE8
SK101
SK20
P101
P102
P103
P104
P105
186.0m
186.1m
185.7m
185.8m
185.9m
0
10m

図版10　掘立柱建物跡

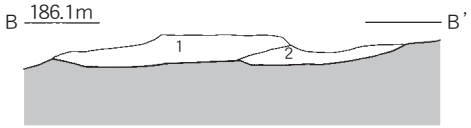

SB1
186.0m
P29
SB2
186.0m
P28
P66
P23
P13
P33
P14
P34
P20
P18
186.0m
SB3
186.0m
P6
P26
186.0m
SB4
SK4
186.0m
0
5m



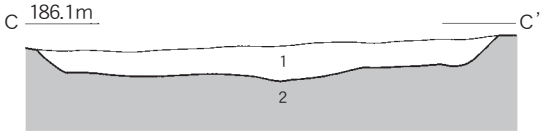
SK1



1. 2.5Y5/1 黄灰色　細砂混じり極細砂（炭含む、マンガン粒含む）
2. 2.5Y5/3 黄褐色　極細砂～細礫（マンガン粒含む、地山）

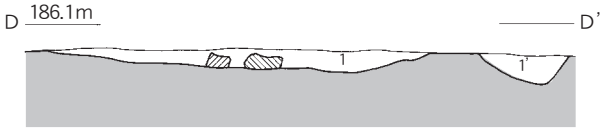


SK3

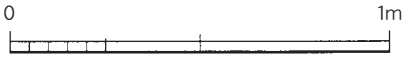


1. 2.5Y4/1 黄灰色　極細砂～中砂（細礫～直径4cm中礫含む、マンガン粒含む）
2. 2.5Y6/4 にぶい黄色　細砂～細礫（極細砂混じり、中～大礫の角礫含む）
（西方では2.5Y6/2灰黄色となる）

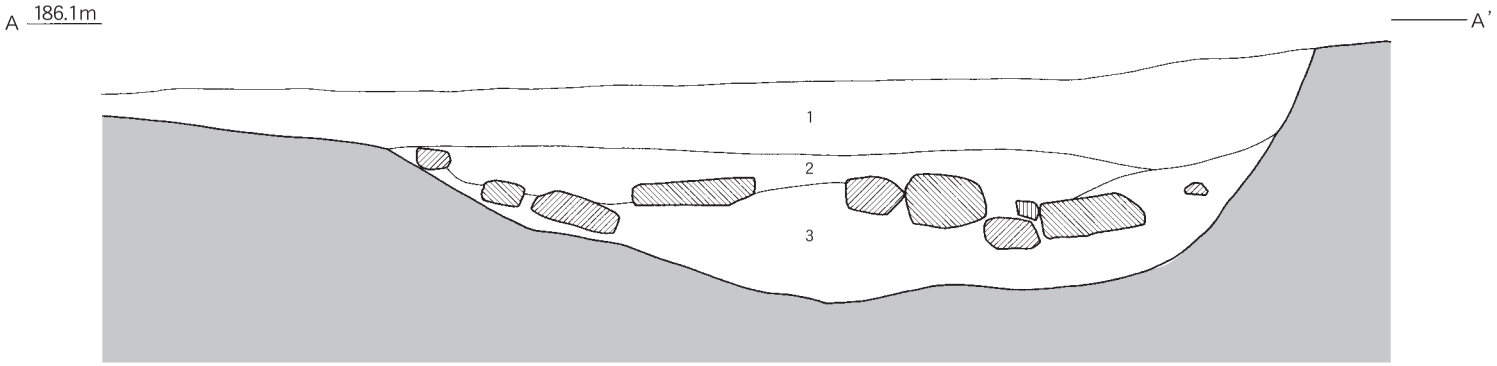
SK5



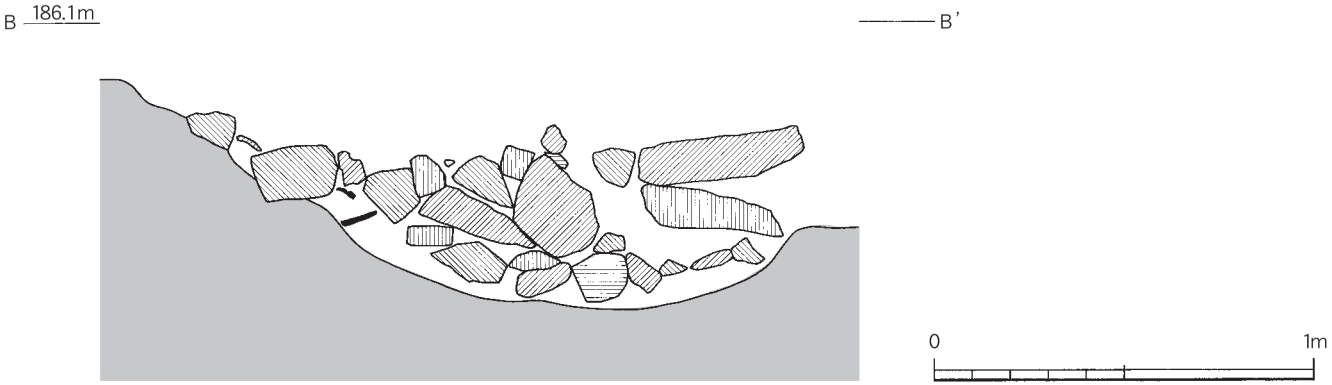
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色　極細砂～細砂（中砂～大礫含む）
1'. 中砂の量が多い



図版12　集石土坑SX2



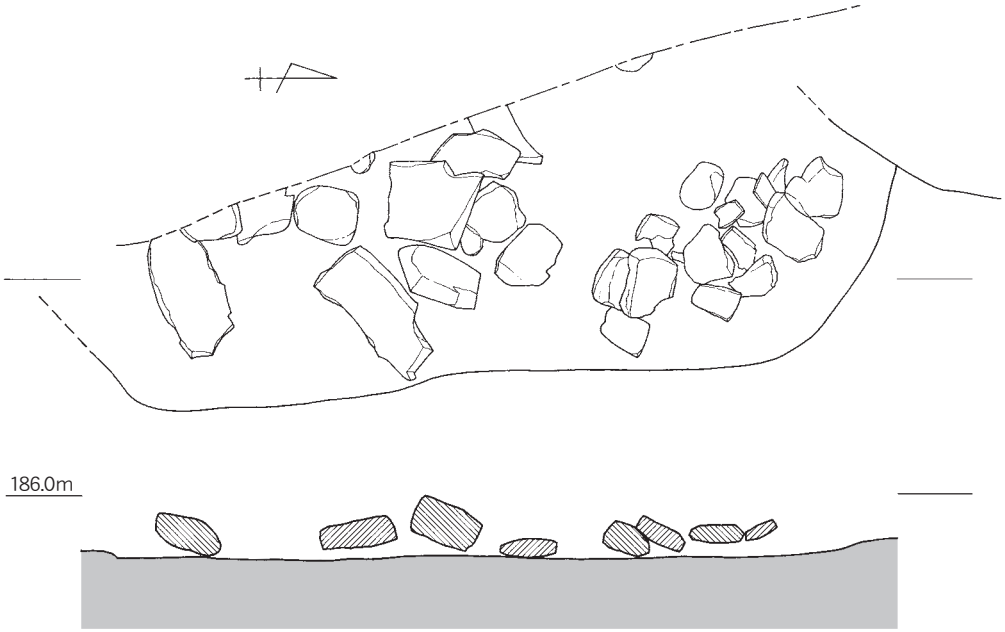
1. 10YR4/2 灰黄褐色（灰褐）　極細砂混じり～中砂（小粒～φ2cm礫含む。マンガン粒多く含む）14C頃の土器含む
2. 10YR4/2.2 灰黄褐色（灰褐）　極細砂混じり細砂～中砂（小粒～φ2cm礫多く含む。マンガン粒多く含む）
3. 10YR4/1.8 灰黄褐色（灰褐）　極細砂混じり細砂～中砂（小粒～φ2cm礫含む。マンガン粒多く含む）13C頃の土器含む



図版13　集石土坑SX2

図版14　集石土坑SX1・3

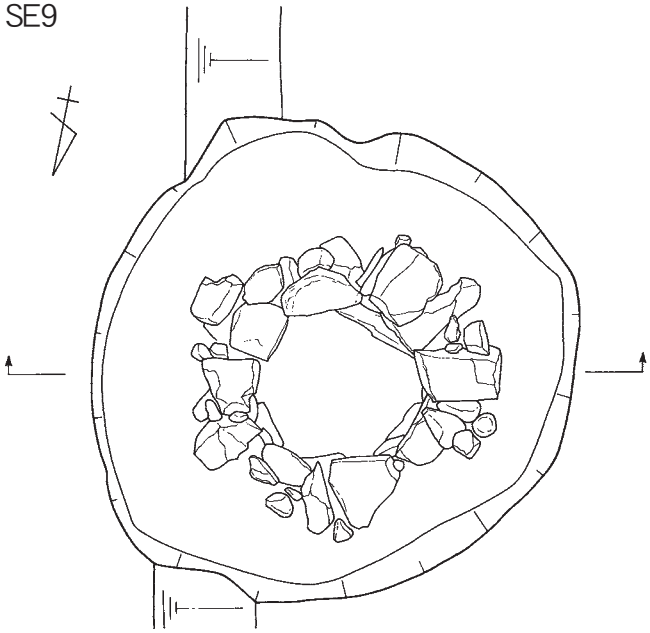
SX1

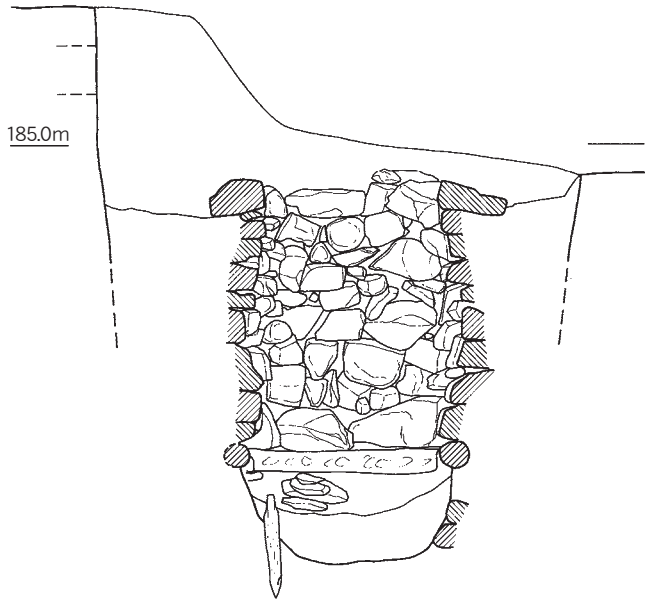


SX3

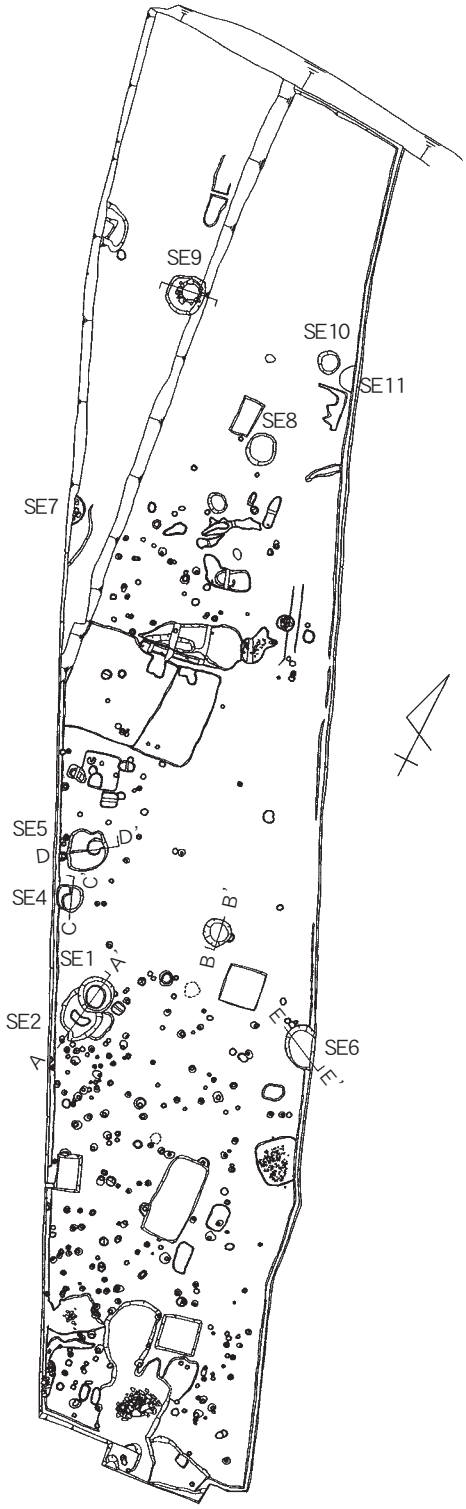
1. 10YR3/3 暗褐色　中砂混じり極細砂

SE9

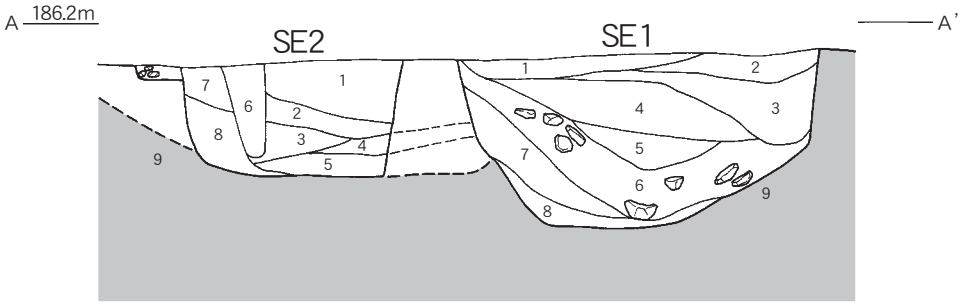




0 1m



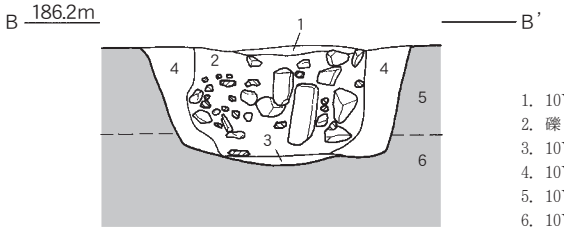
0 20m



SE 2
1. 10YR3/4 暗褐色　中砂混じり極細砂
2. 10YR3/2 黒褐色　中砂混じりシルト質極細砂
3. 10YR4/2 灰黄褐色　中砂混じりシルト
4. 10YR7/4 にぶい黄橙色　中砂混じりシルト（シルトブロック多く含む）
5. 10YR4/1 褐灰色　中砂混じりシルト
6. 10YR7/4 にぶい黄橙色　中砂混じりシルト（シルトブロック多く含む）
7. 10YR3/2 黒褐色　粗砂混じり極細砂
8. 10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂
9. 10YR4/4 褐色　中砂～直径10㎝までの礫（ベース）

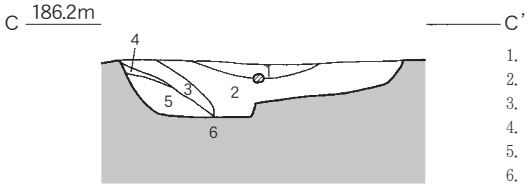
SE 1
1. 10YR4/4 褐色　中砂混じり極細砂
2. 10YR3/3 暗褐色　中砂混じり極細砂
3. 10YR2/3 黒褐色　中砂混じり極細砂
4. 10YR3/4 暗褐色　中砂混じりシルト質極細砂（炭含む）
5. 10YR4/2 灰黄褐色　中砂混じりシルト質極細砂
6. 10YR3/2 黒褐色　シルト混じり中砂（直径20㎝までの礫多く含む）
7. 10YR4/4 褐色　中砂
8. 10YR4/1 褐灰色　中砂混じりシルト
9. 10YR4/4 褐色　粗砂混じり極細砂

SE3



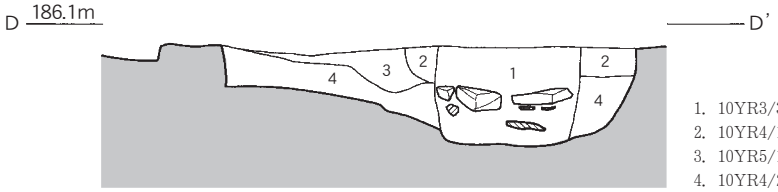
1. 10YR4/4 褐色　粗砂混じりシルト質極細砂
2. 礫
3. 10YR5/6 黄褐色　中砂混じりシルト
4. 10YR6/4 にぶい黄褐色　シルト
5. 10YR4/4 褐色　粗砂混じりシルト質極細砂
6. 10YR4/4 褐色　中砂

SE4



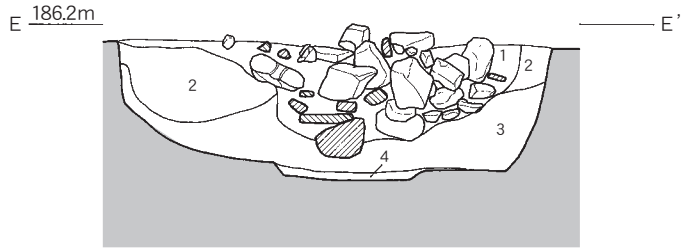
1. 10YR4/1 褐灰色　中砂混じり極細砂
2. 10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト（鉄分多し）
3. 10YR4/1 褐灰色　粗砂混じり極細砂
4. 10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト
5. 10YR3/2 黒褐色　粗砂混じりシルト質極細砂
6. 10YR4/4 褐色　粗砂混じりシルト質極細砂（ベース）

SE5



1. 10YR3/3 暗褐色　粗砂混じり極細砂
2. 10YR4/1 褐灰色　中砂
3. 10YR5/1 褐灰色　細砂混じり極細砂（ﾍﾞｰｽ小ﾌﾞﾛｯｸ含む）
4. 10YR4/2 灰黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂（ﾍﾞｰｽ小ﾌﾞﾛｯｸ含む）

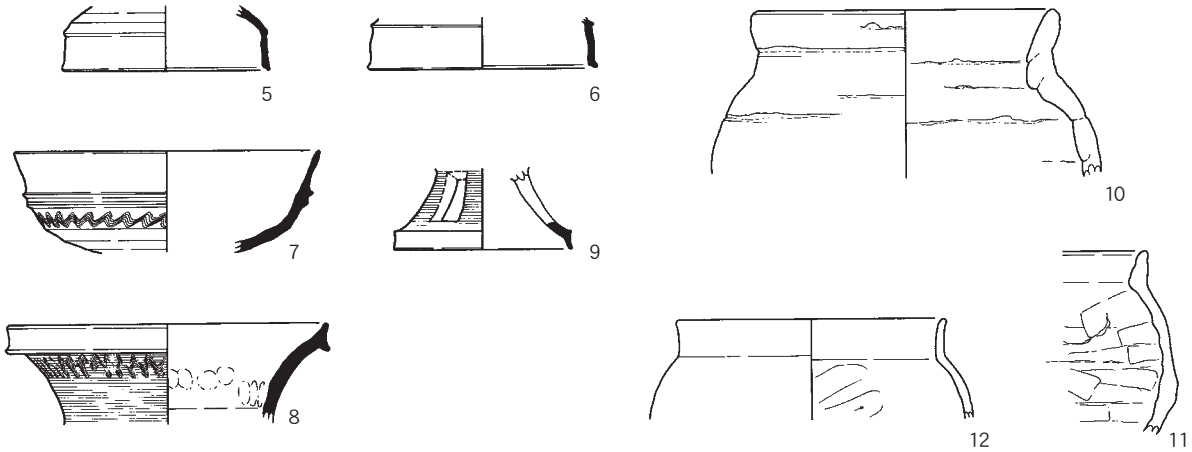
SE6

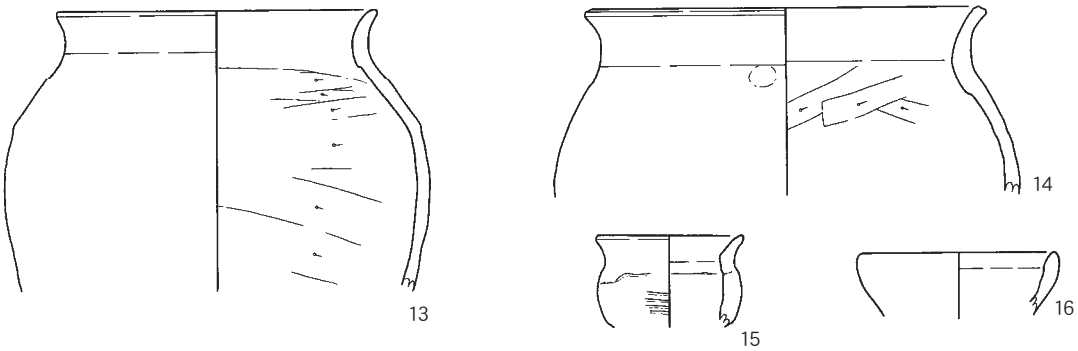


1. 10YR3/4 暗褐色　粗砂混じり極細砂（③ブロック含む）
2. 10YR2/3 黒褐色　粗砂混じり極細砂
3. 10YR5/6 黄褐色　中砂混じりシルト
4. 10YR6/8 明黄褐色　中砂混じり粘土（鉄分含む）

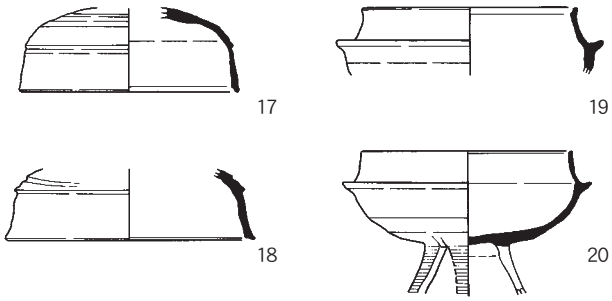
SH1

SH2

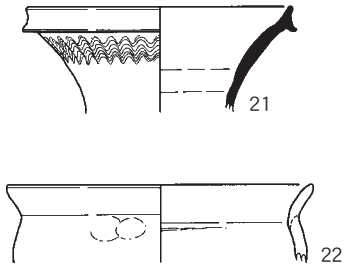




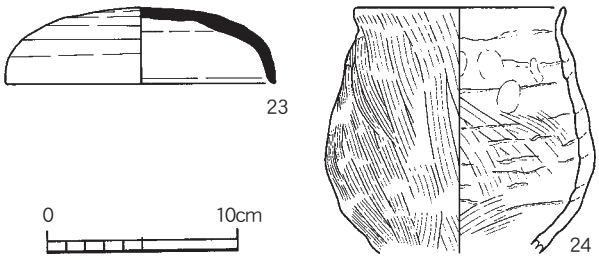
SK13



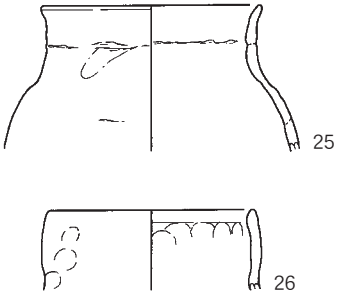
SK15



SK8

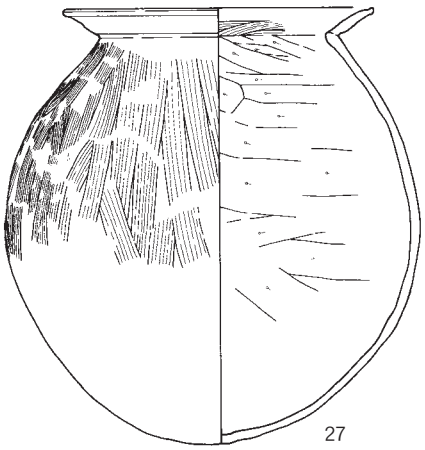


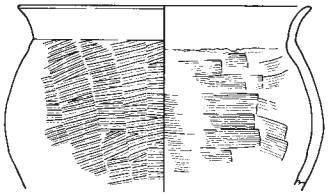
SK20

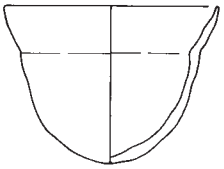


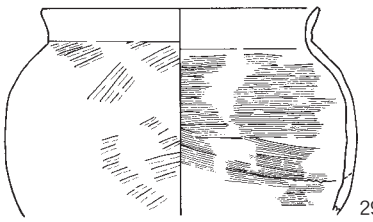
図版18　出土土器2　柱穴・土坑・井戸

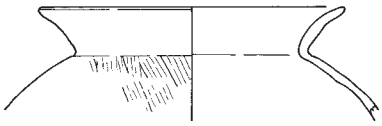
Pit

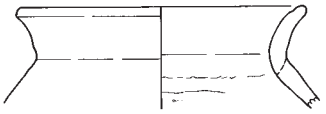

27

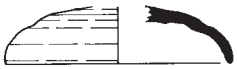

28


30


29

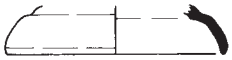

31

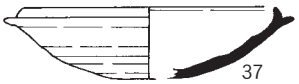

32


33

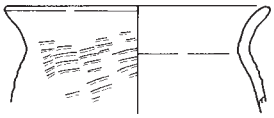
34

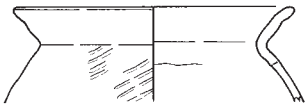
35

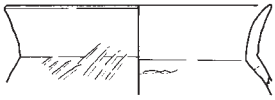

36


37

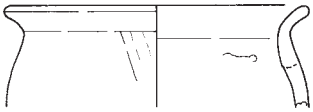
SE1

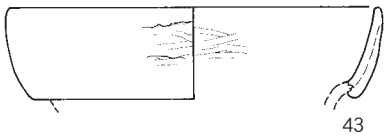

38

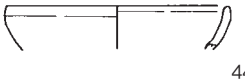

39


40

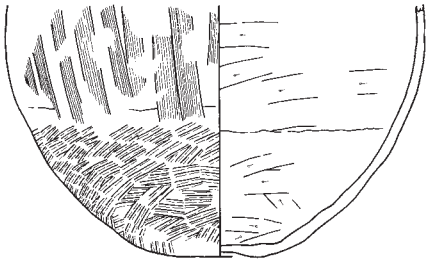
41


42

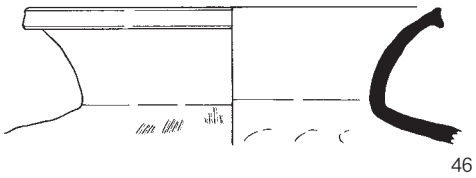

43

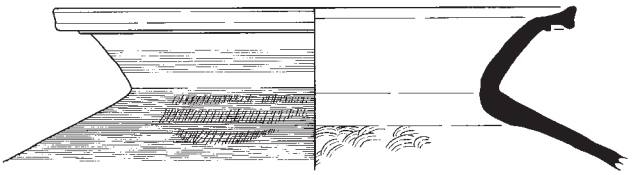

44

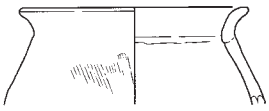
SK10

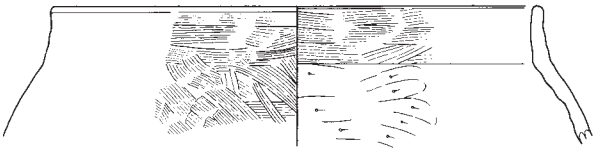

45

P50


46

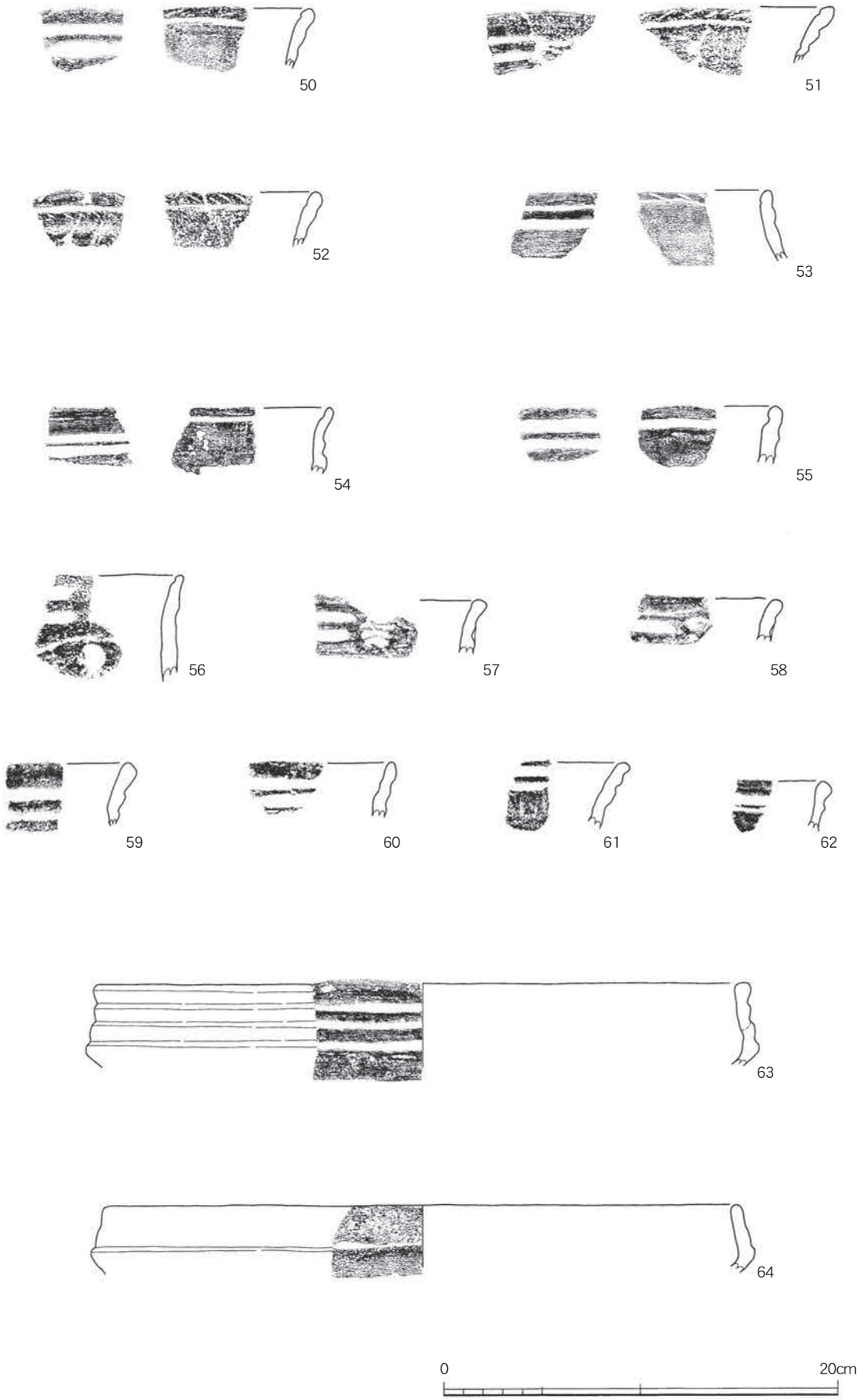

47


48

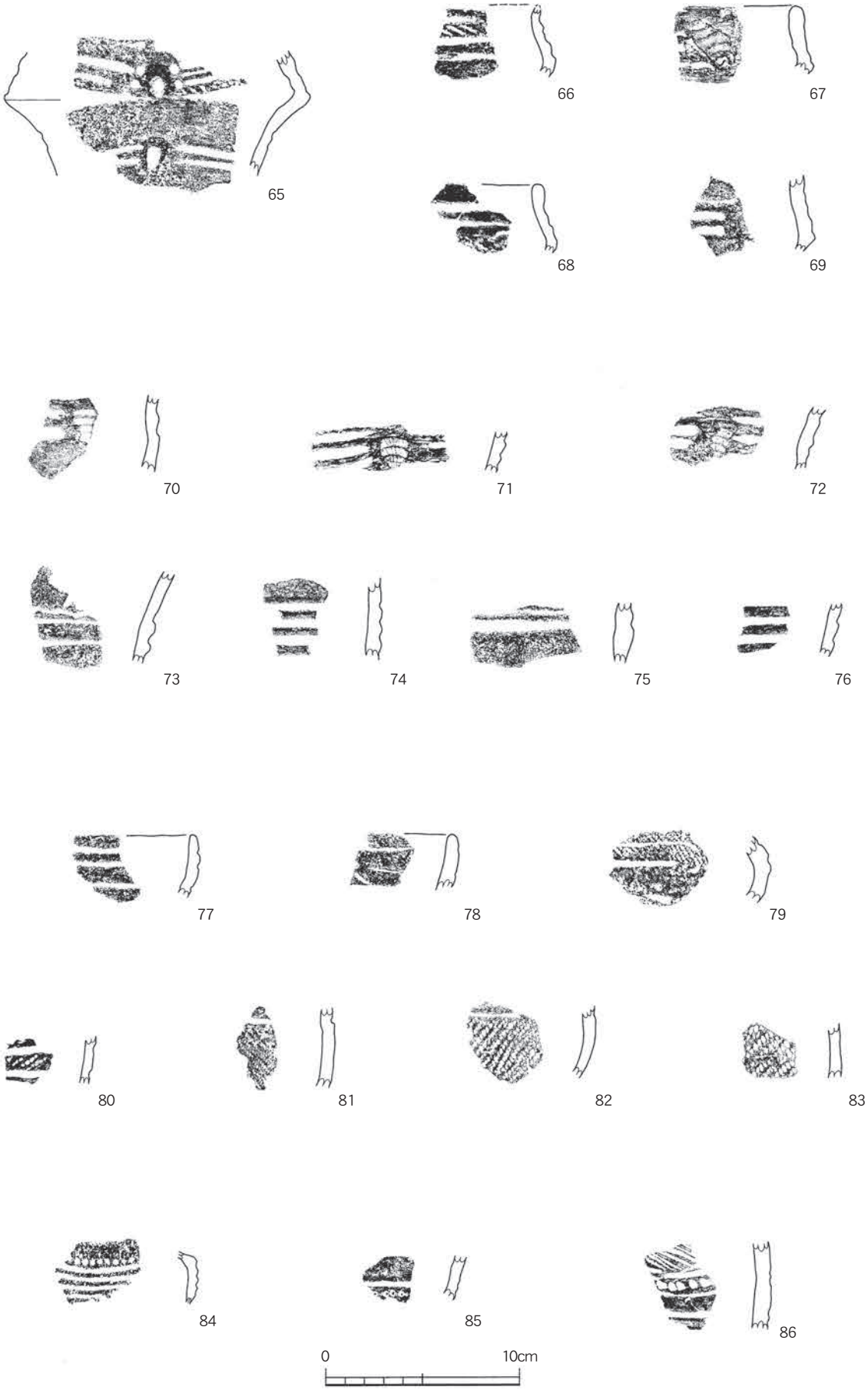

49

0　20cm

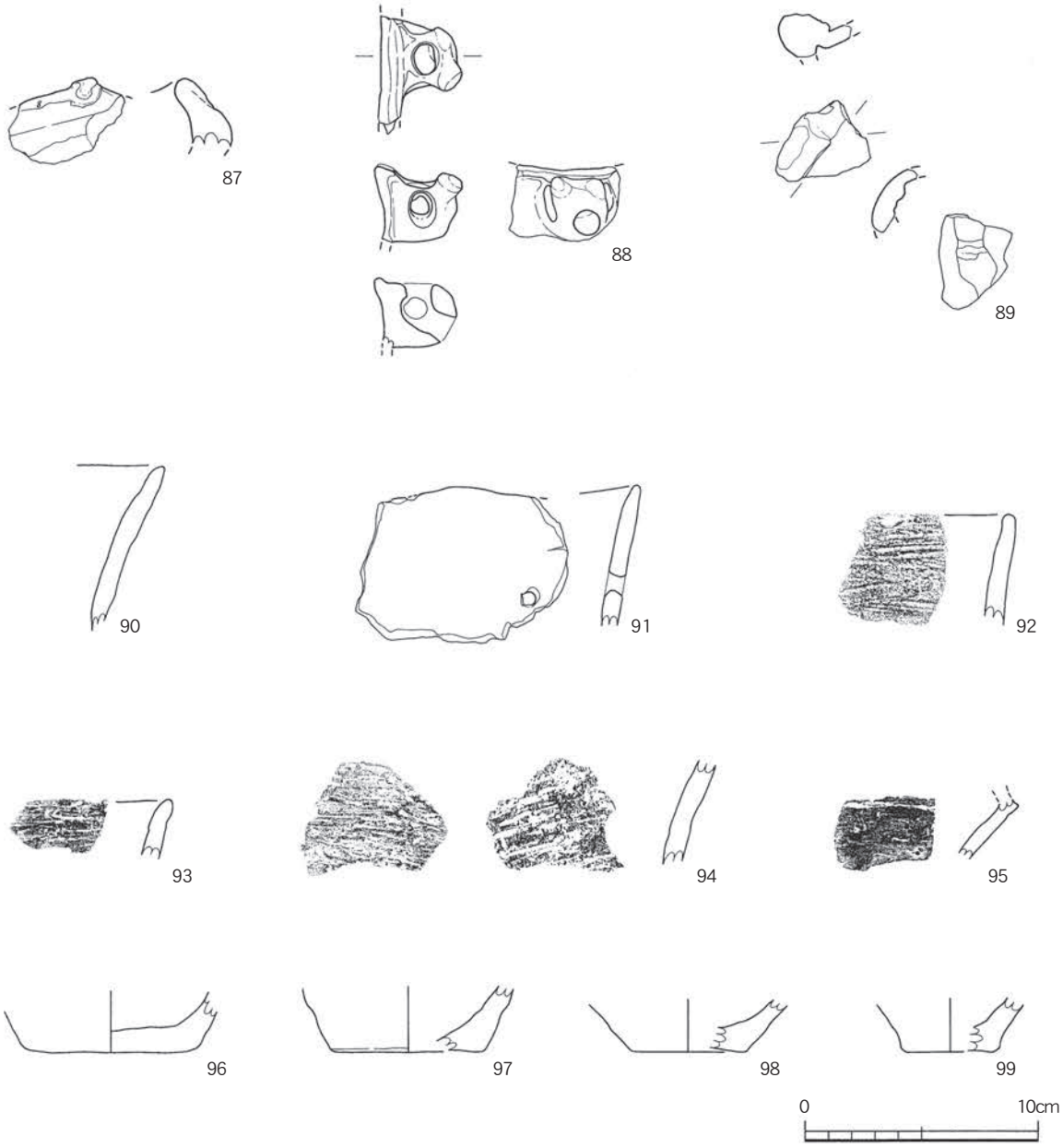
図版19　出土土器3　包含層出土縄紋土器



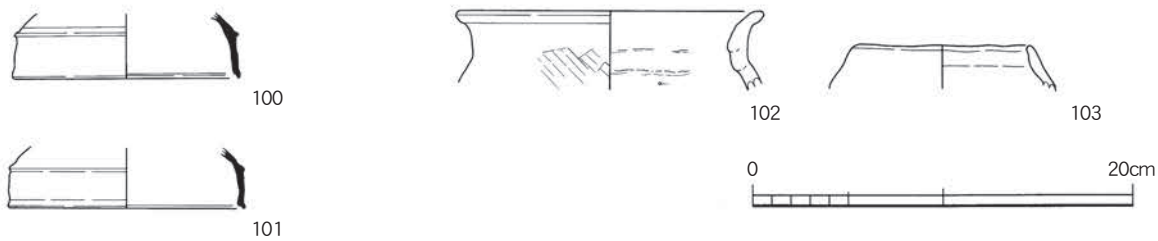
図版20　出土土器4　包含層出土縄紋土器



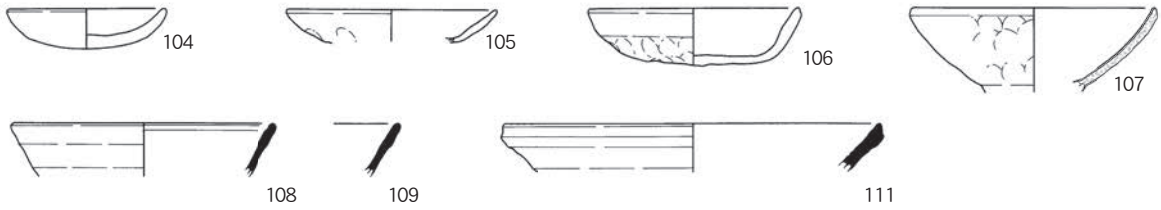
図版21　出土土器5　包含層出土縄紋土器他



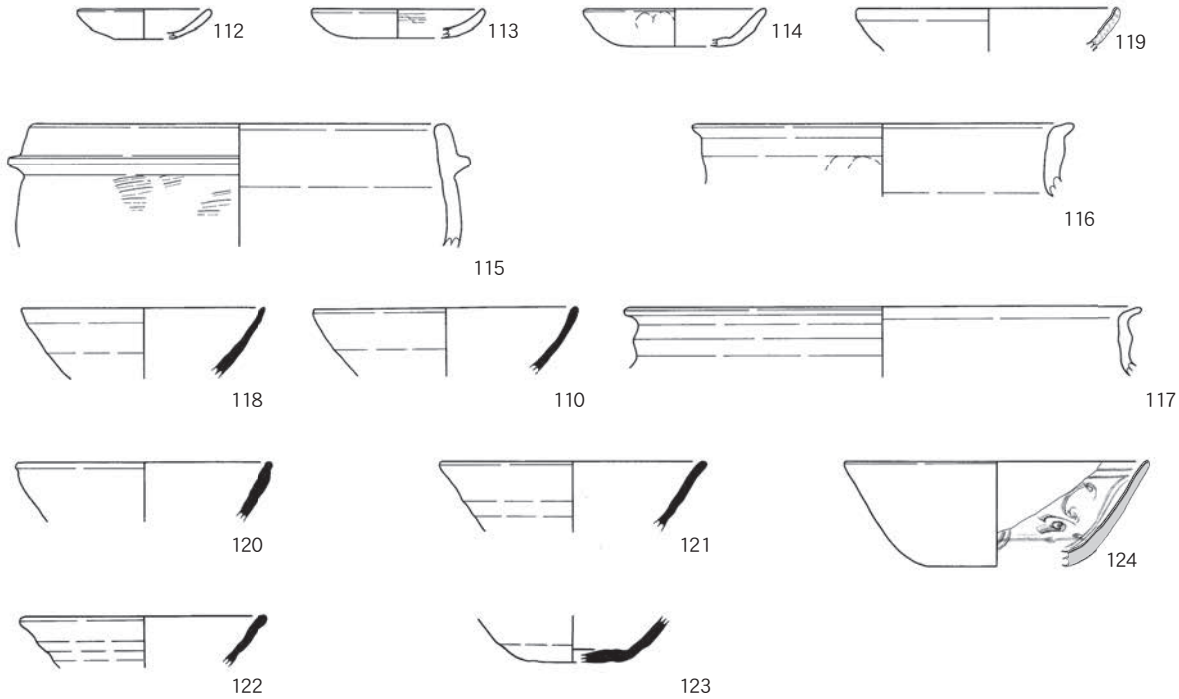
包含層



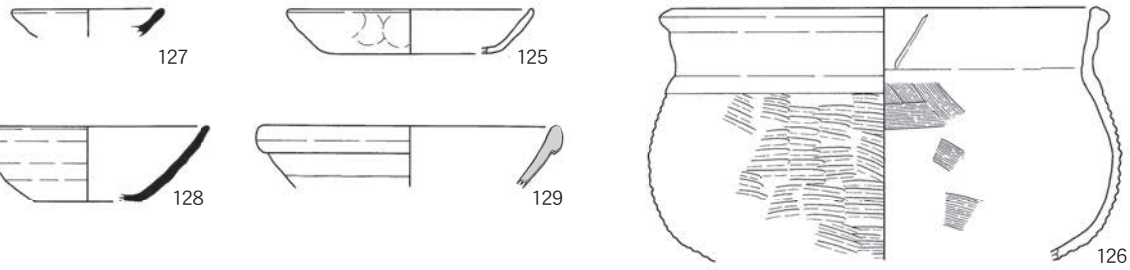
SB2・3



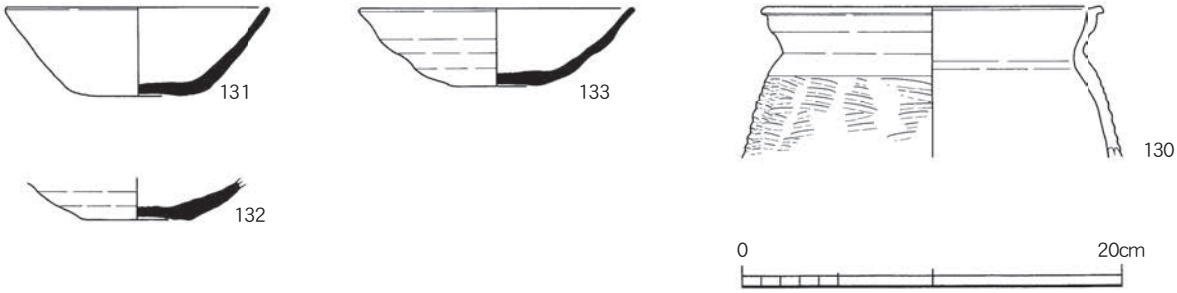
Pit



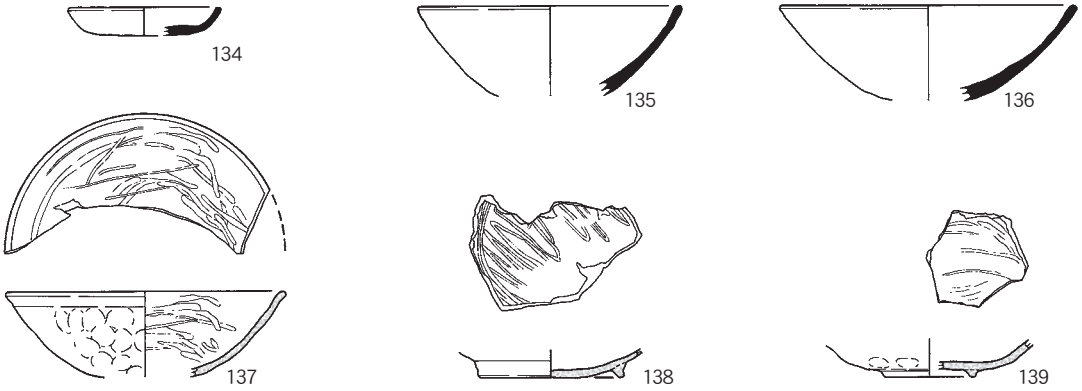
SK3



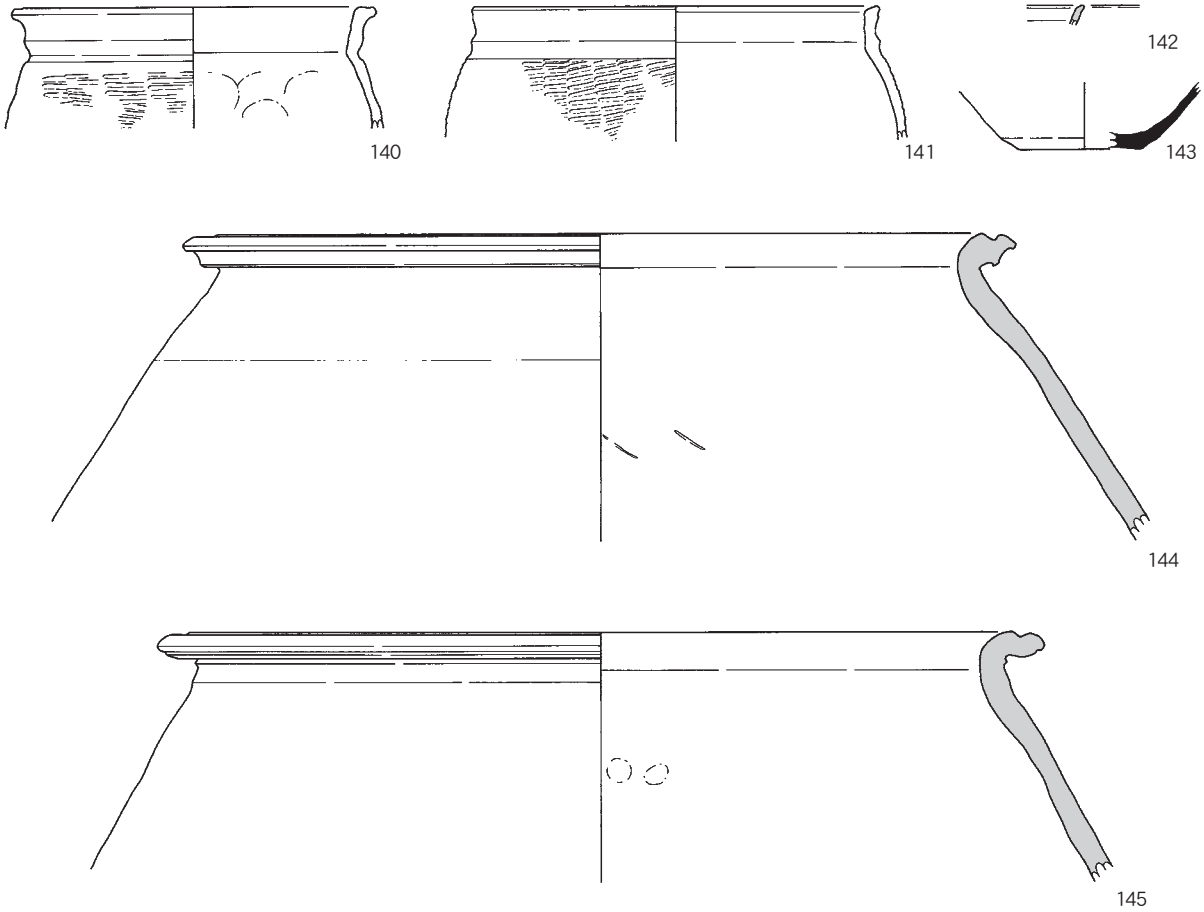
SK5



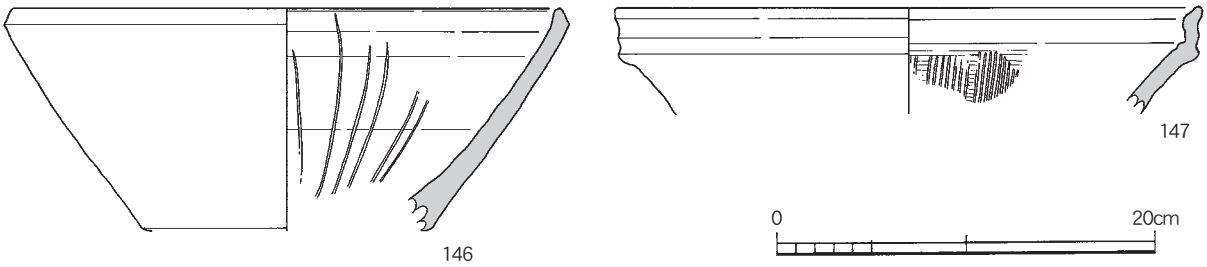
SX1



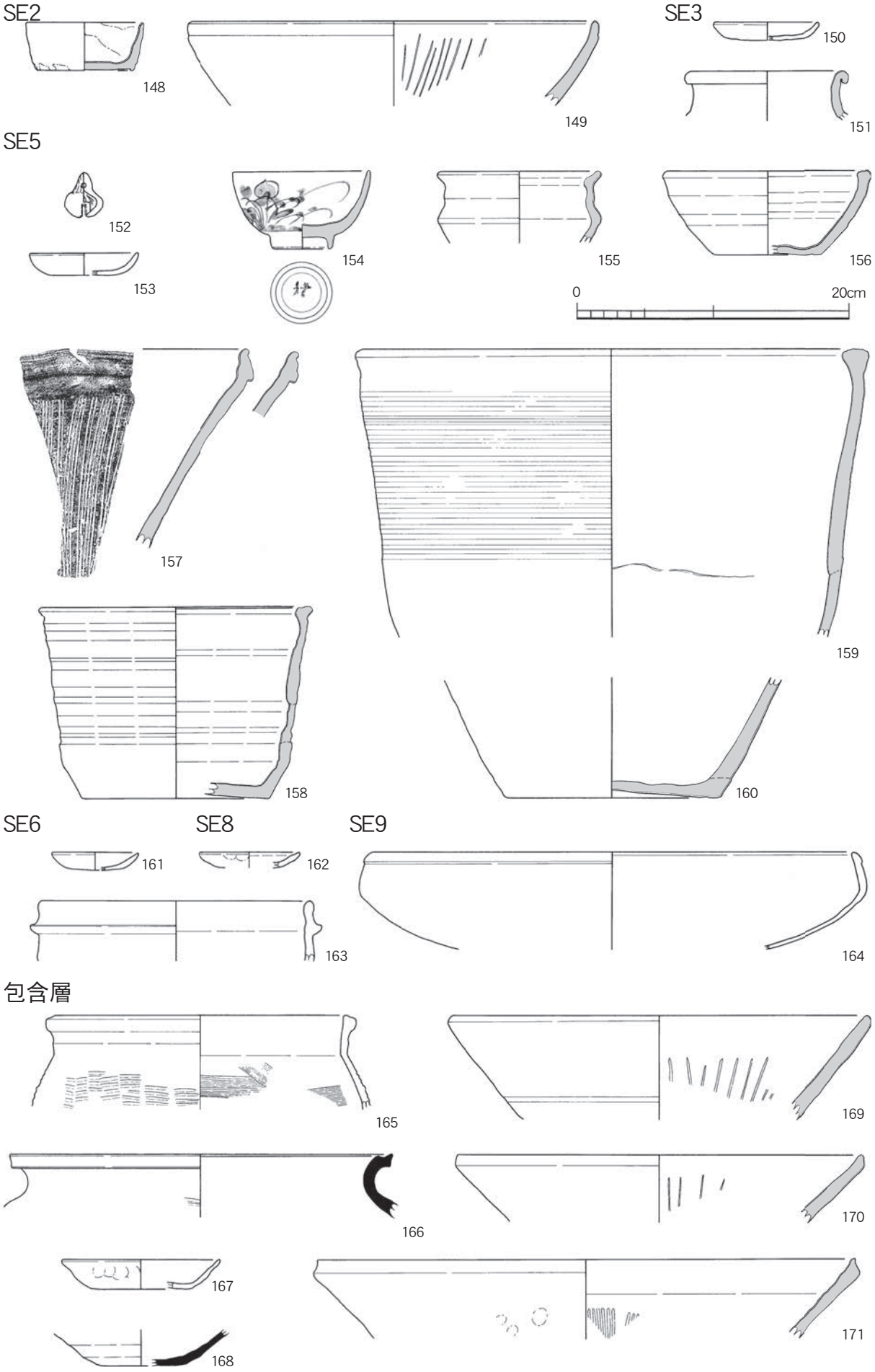
SX2

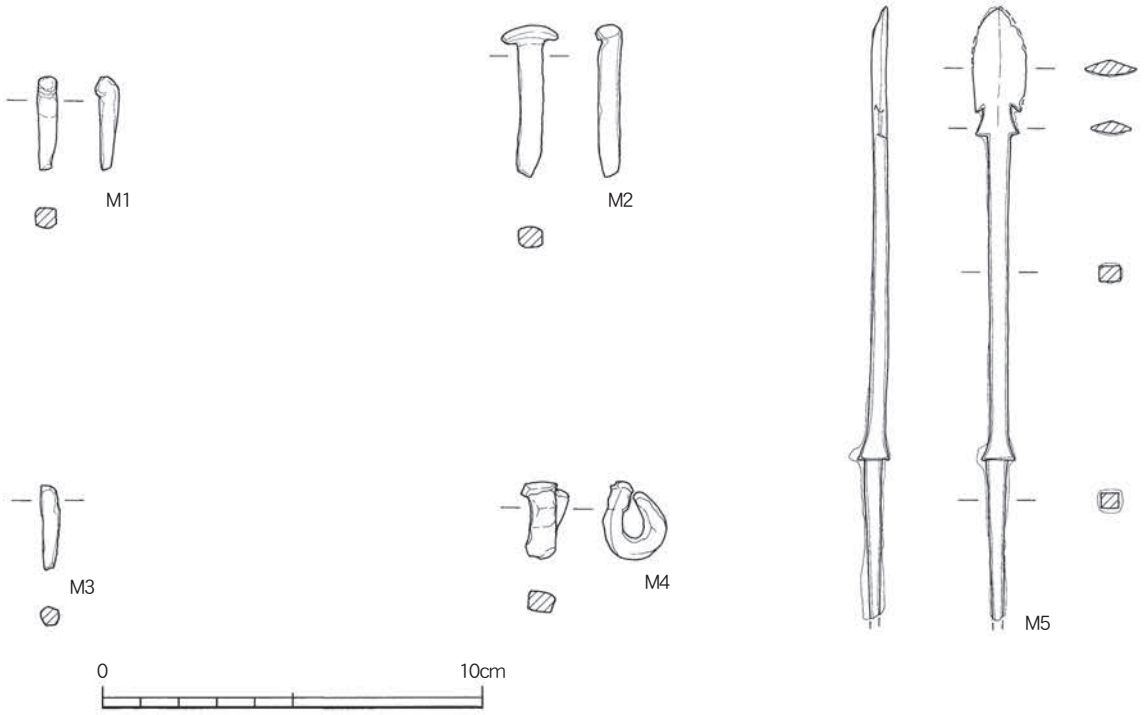


SX3

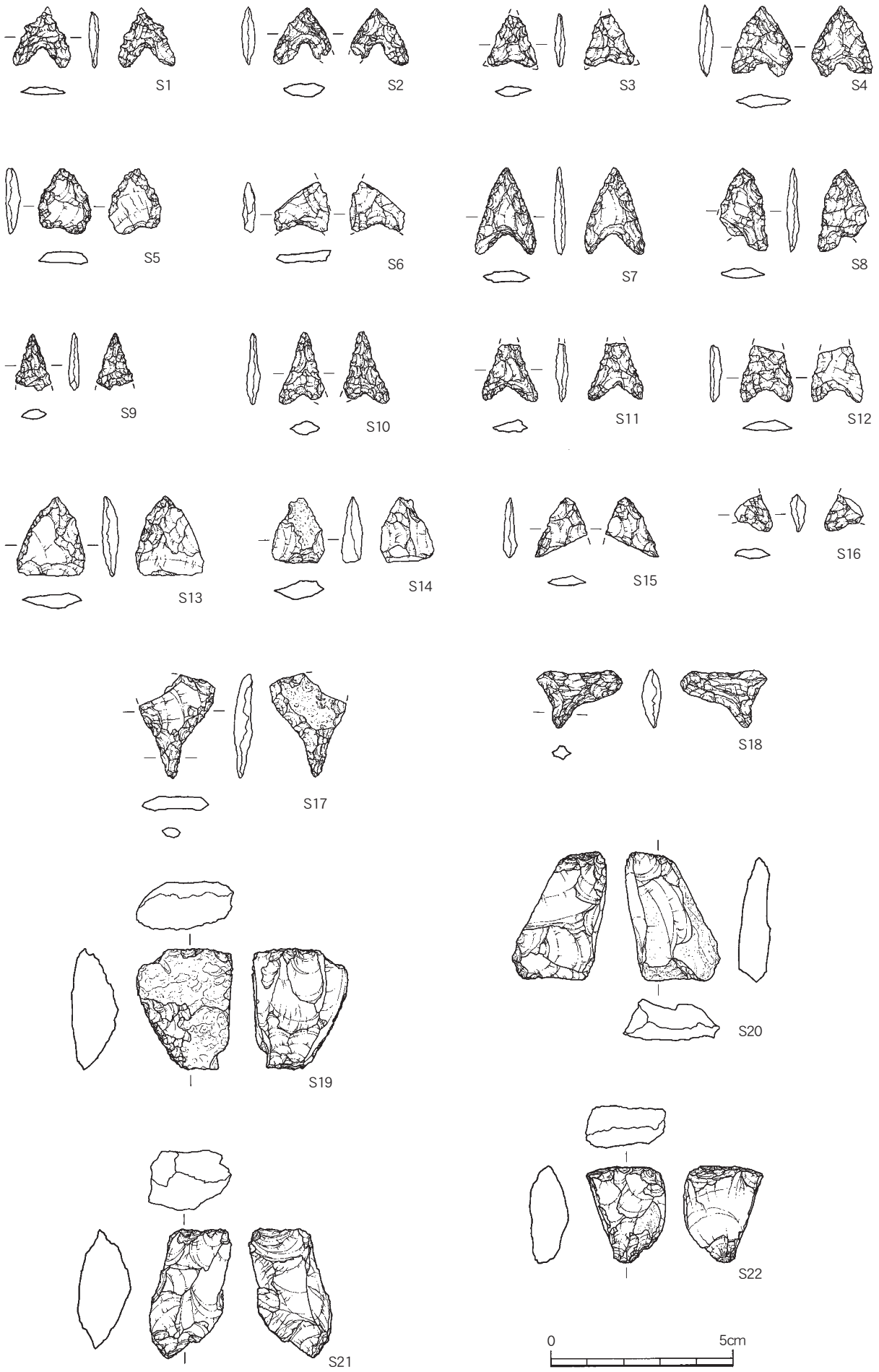


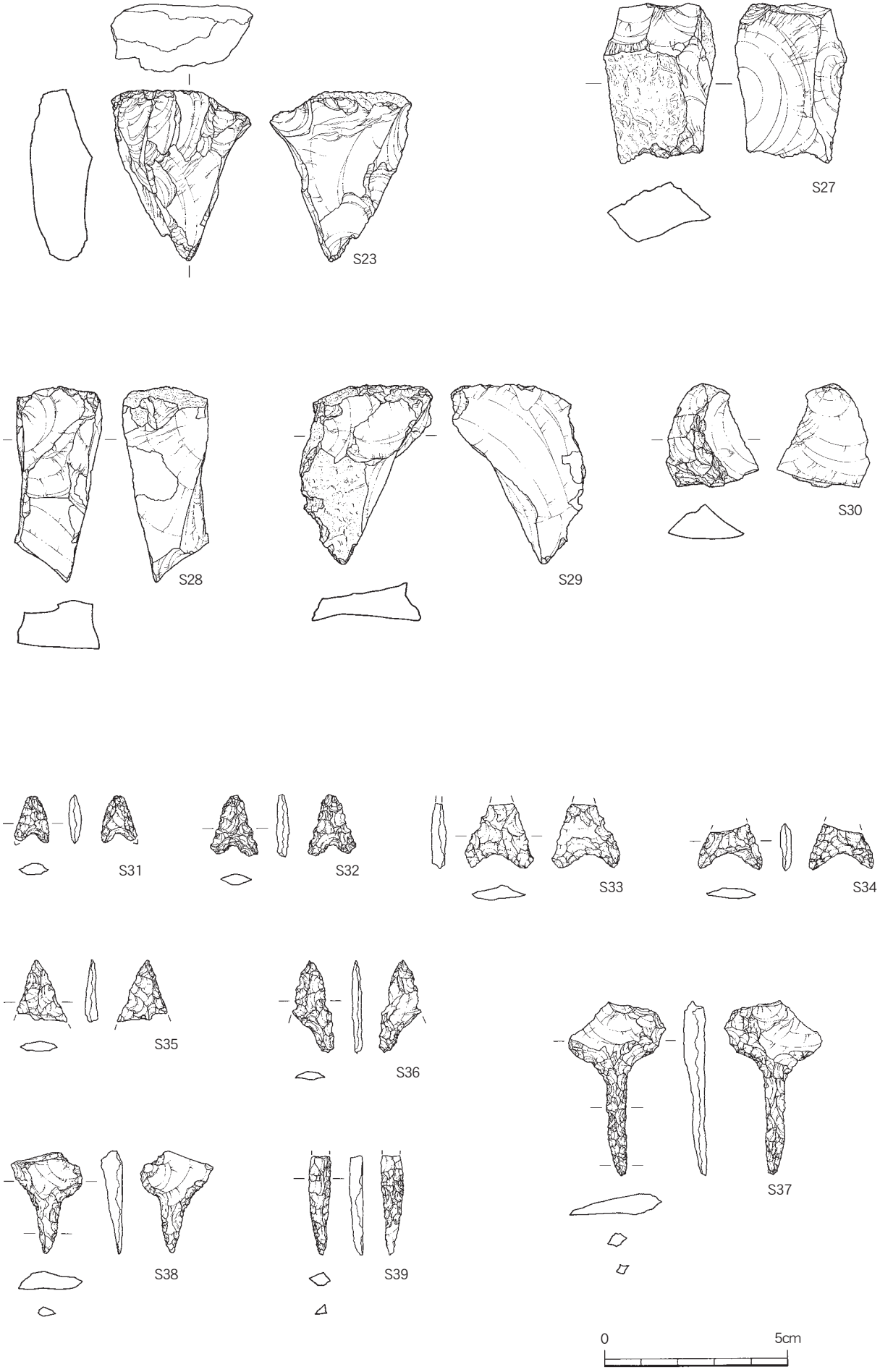
図版24　出土土器8　井戸・包含層



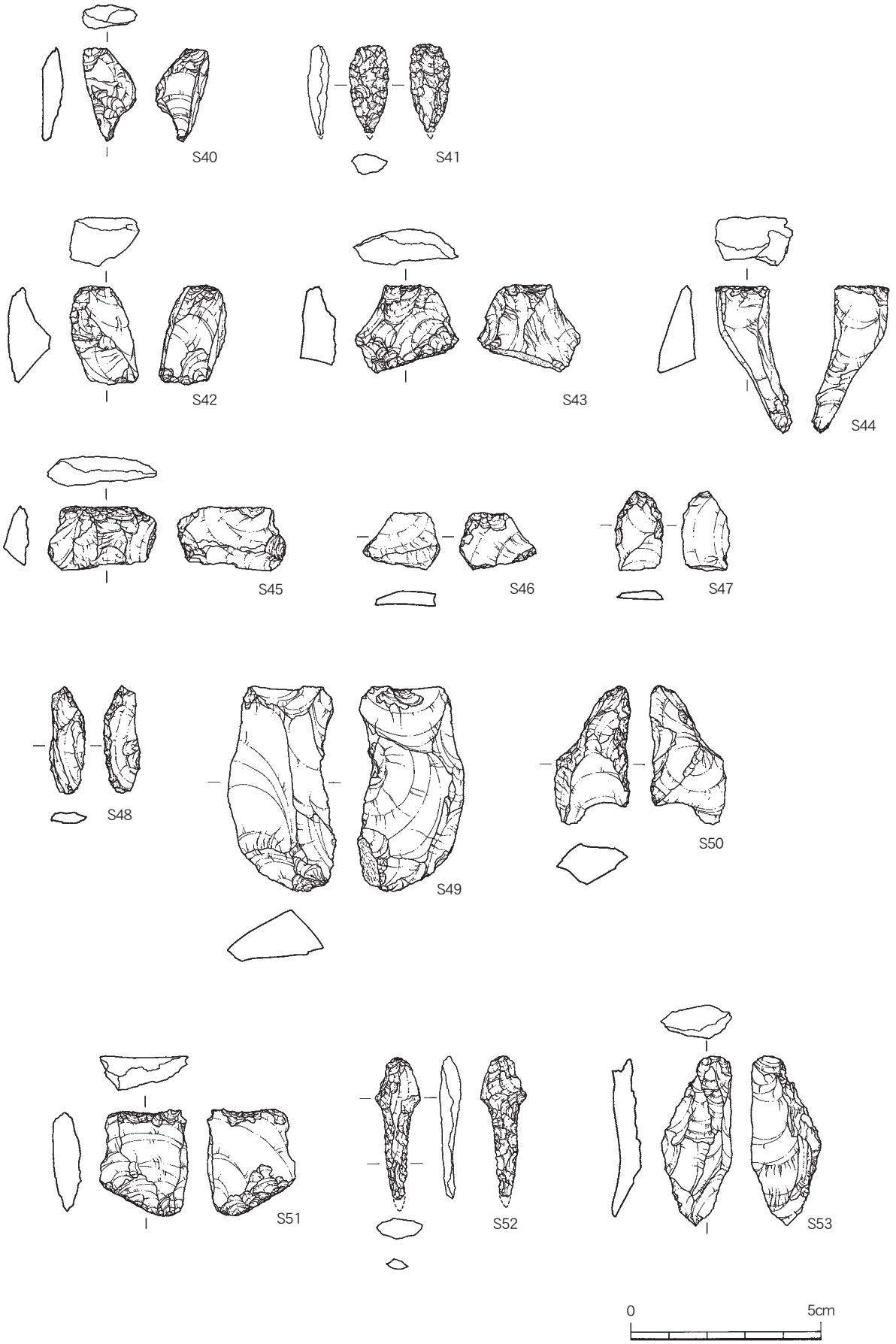

M1
M2
M3
M4
M5
0
10cm

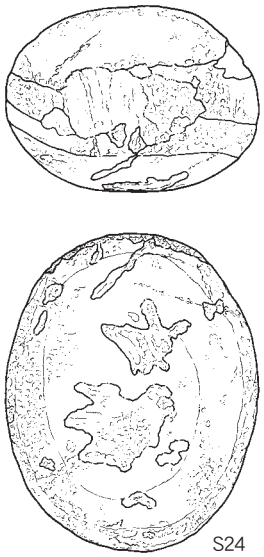
図版26　出土石器1

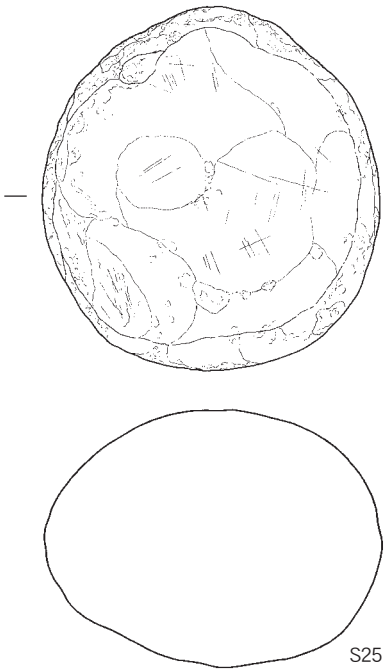

S1
S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
S21
S22
0
5cm

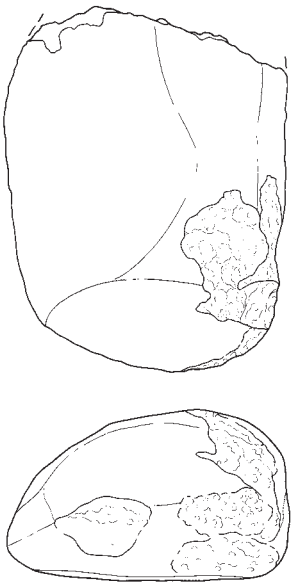

S23
S27
S28
S29
S30
S31
S32
S33
S34
S35
S36
S37
S38
S39
0
5cm

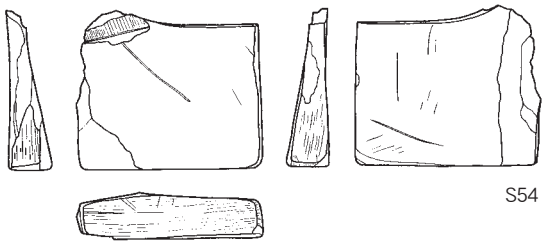
図版28　出土石器3

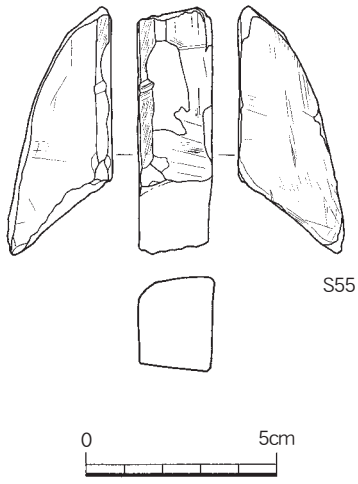


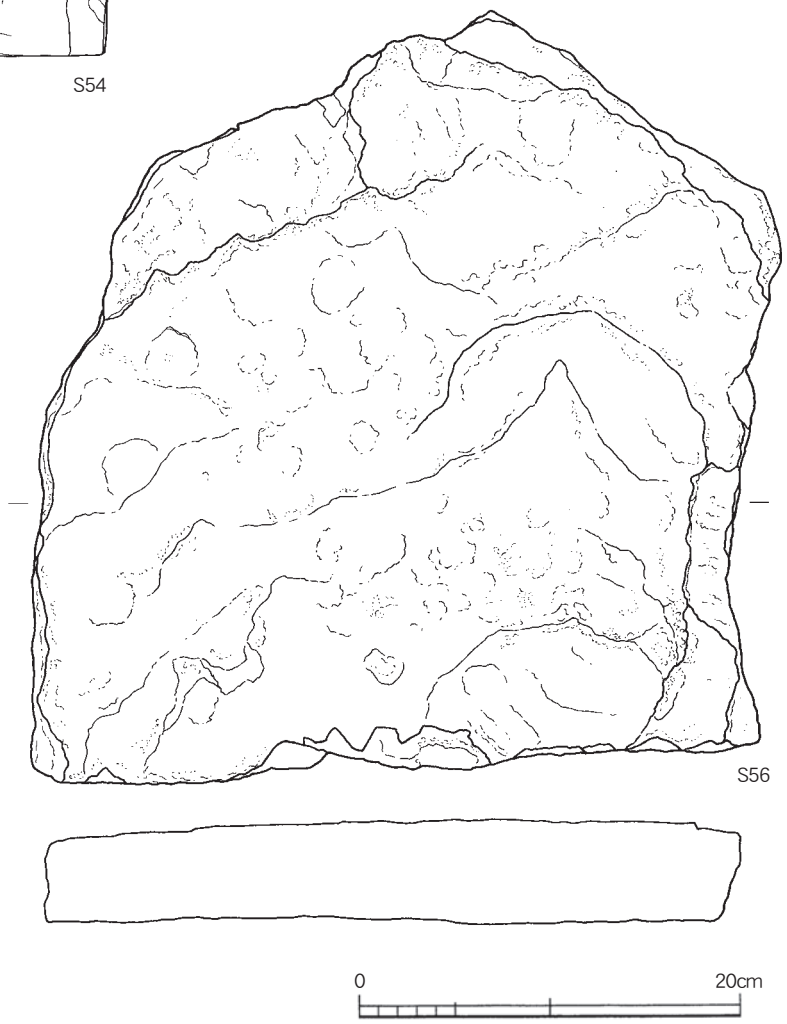

S24


S25


S26


S54


S55
0
5cm


S56
0
20cm

写 真 図 版

遠景（北西から）

遠景（西から）

全景（南から）

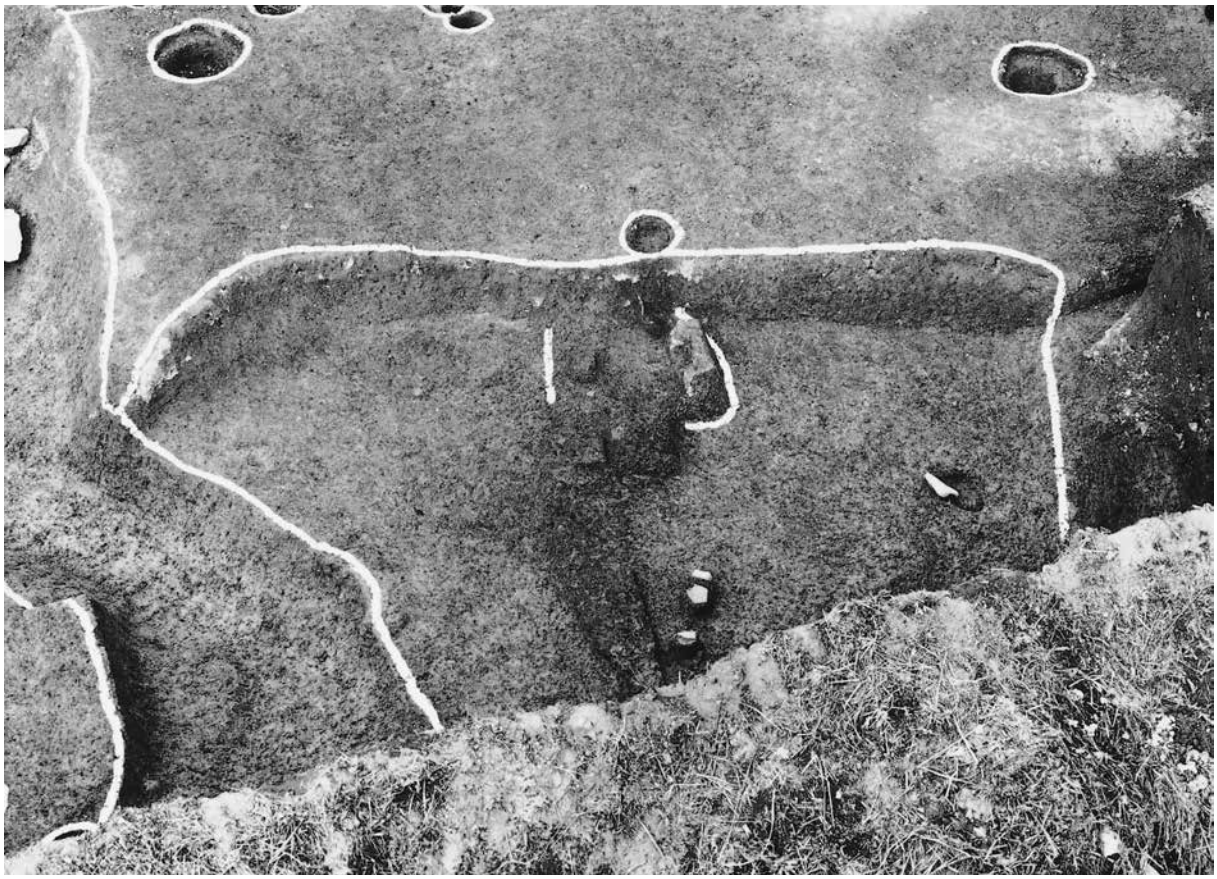
全景（東から）

調査地区から南を望む

調査地区から北を望む

全景（北から）

全景（南から）



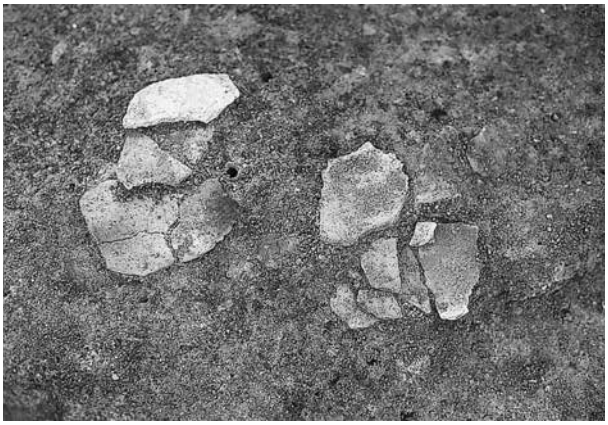
ＳＨ１全景（南から）

ＳＨ１竈内土器出土状況（南から）

①ＳＨ１竈内土器出土状況（南横から）

②ＳＨ１竈内北半部土器出土状況（南から）

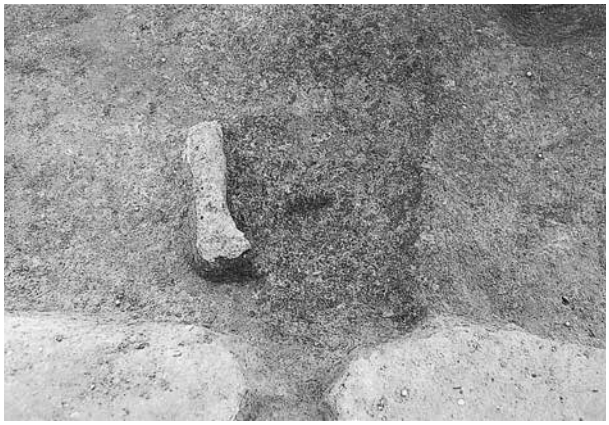
③ＳＨ１竈内土器出土状況（南西から）



④ＳＨ１竈内土器出土状況（西から）

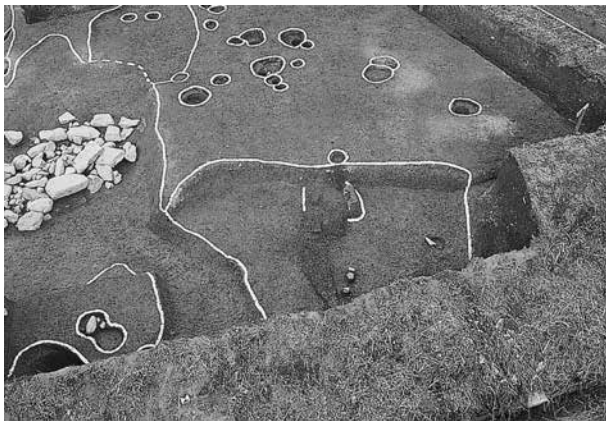
⑤ＳＨ１竈全景（南から）

⑥ＳＨ１竈全景（南西から）

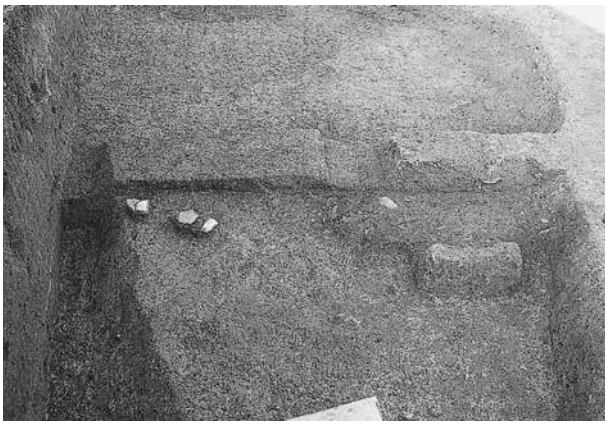


⑦ＳＨ１竈壁残存状況（北上から）

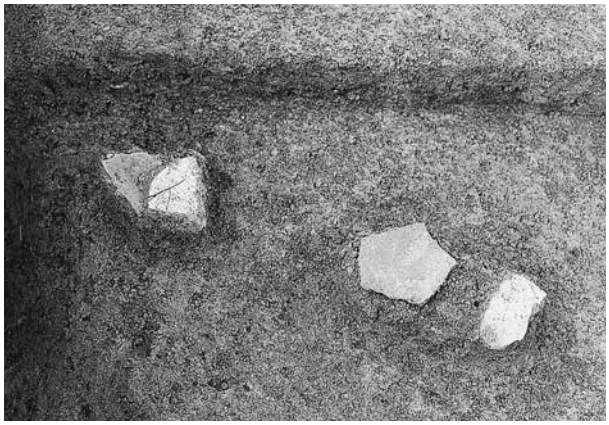
⑧ＳＨ１竈壁残存状況（西横から）



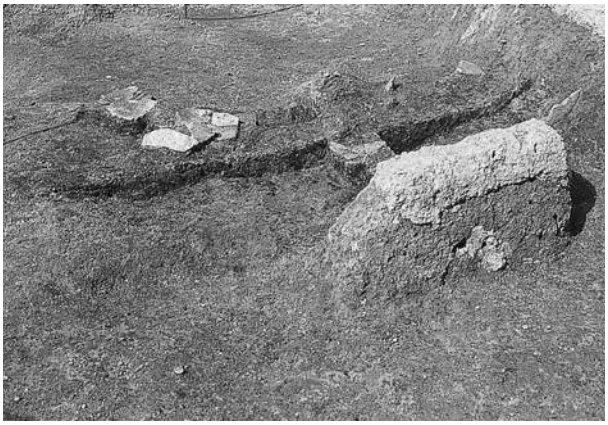
①ＳＨ１全景（南から）



②ＳＨ１埋土土層断面（東から）



③ＳＨ１床面上土器出土状況（東から）

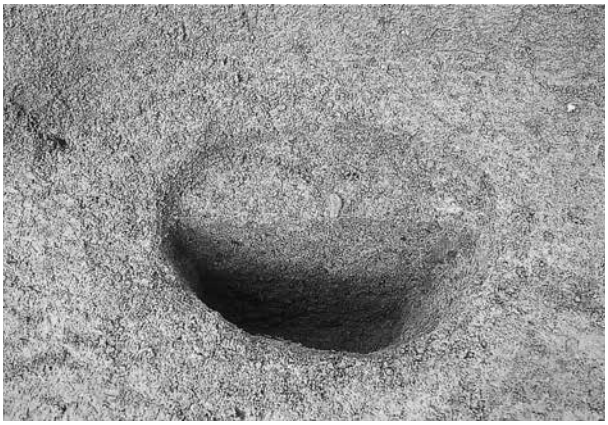


④ＳＨ１竈埋土土層断面（南東から）

⑤ＳＨ１竈埋土土層断面（南南西から）

⑥ＳＨ１竈断割り断面（東から）

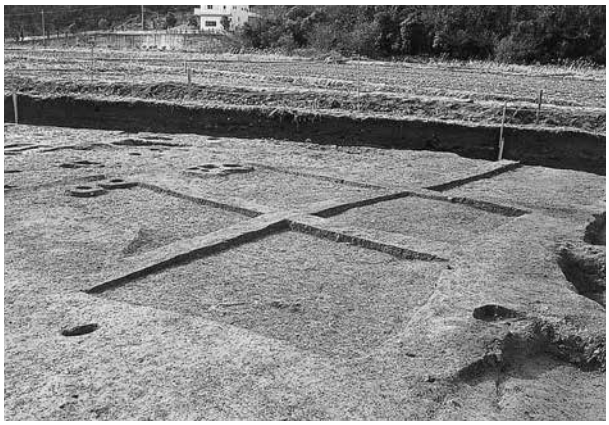
⑦ＳＨ１竈断割り断面（南から）



⑧ＳＨ１竈西側の柱穴埋土土層断面（南から）

ＳＨ２全景（南から）

ＳＨ２竈ａ全景（南から）



①ＳＨ２埋土土層断面（北東から）

②ＳＨ２掘削作業状況（東から）

③ＳＨ２全景（南から）

④ＳＨ２床面土器出土状況（東から）

⑤ＳＨ２煙道部上面検出状況（西から）

⑥ＳＨ２煙道部埋土土層断面（西から）

⑦ＳＨ２煙道部内土器出土状況（西から）

⑧ＳＨ２煙道部東端土器出土状況（東から）

①ＳＨ２竈ａ上面（南から）

②ＳＨ２竈ａ埋土土層断面（南東から）

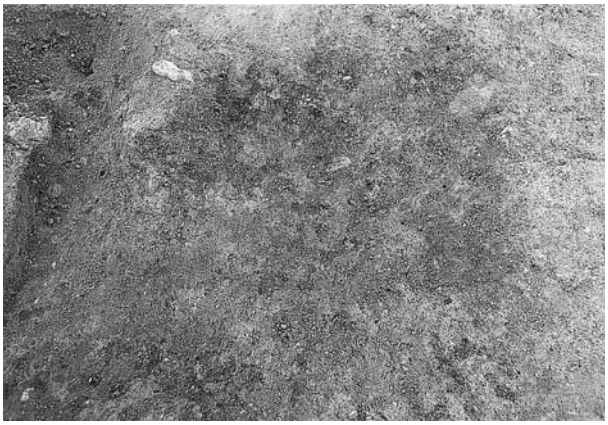
③ＳＨ２竈ａ埋土土層断面（南から）

④ＳＨ２竈ａ埋土土層断面（東から）

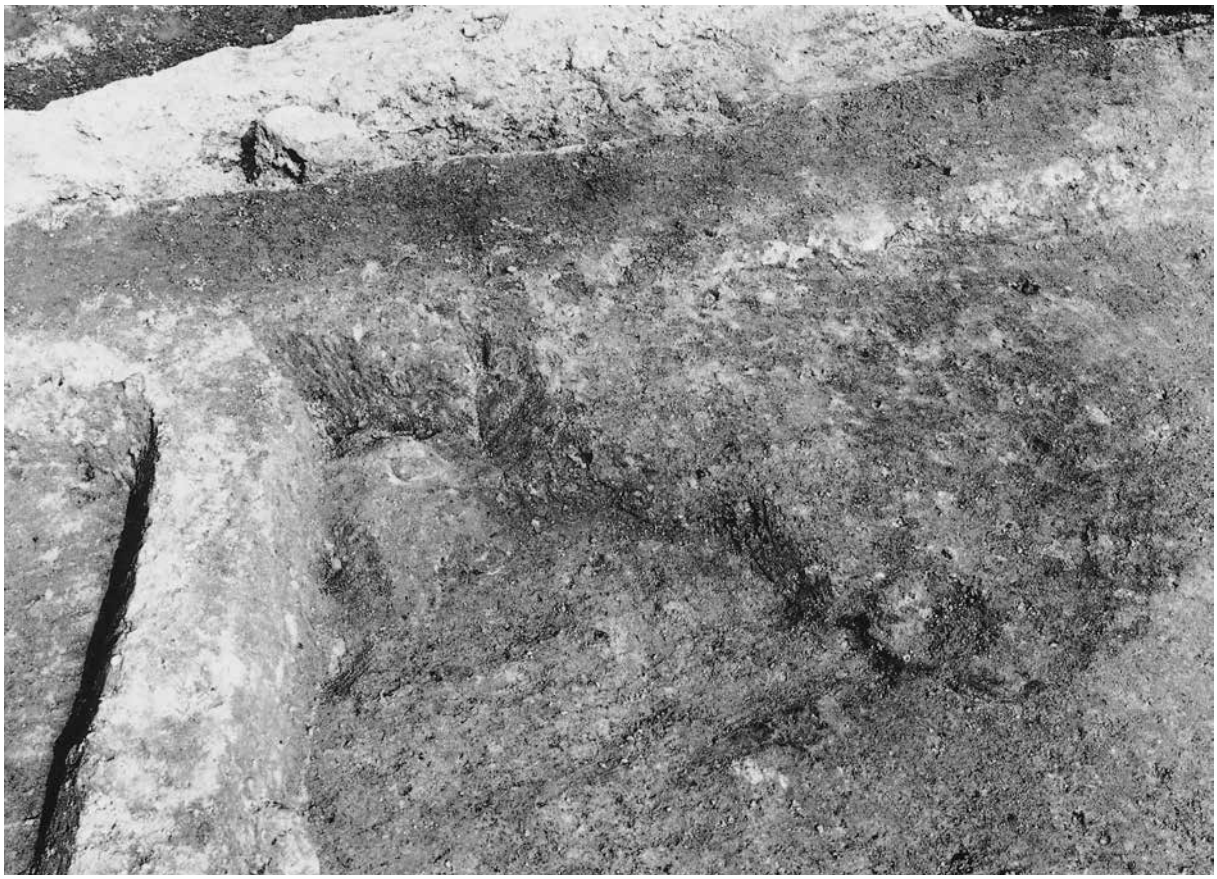
⑤ＳＨ２竈ａ燃焼部全景（南から）

⑥ＳＨ２竈ａ断割り断面（南西から）

⑦ＳＨ２竈ａ・ｂの位置関係（南から）



⑧ＳＨ２竈ｂ燃焼部（南から）



ＳＨ２竈ｃ残存状況（南から）

①ＳＨ２竈ｃ残存状況（東から）

②ＳＨ２竈ｃ埋土土層断面（東から）

③ＳＨ２竈ｃ埋土土層断面（南から）

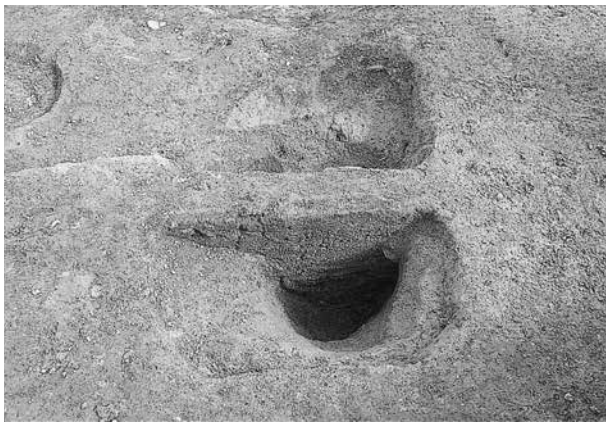
④ＳＨ２竈ｃ炭化物出土状況（南から）

①ＳＫ８埋土土層断面（北東から）

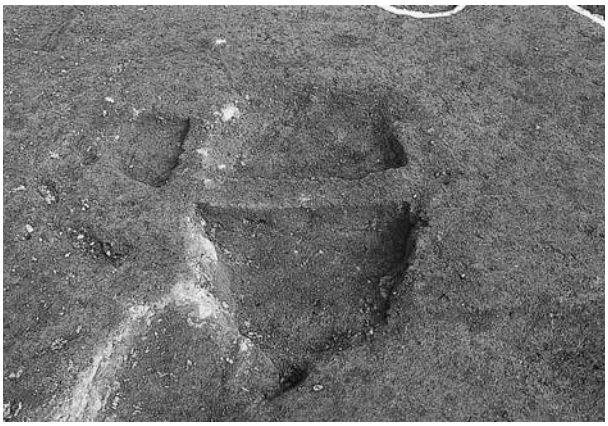
②ＳＫ８土器出土状況（北東から）

③ＳＫ10埋土土層断面（北西から）

④ＳＫ10土器出土状況（北西から）

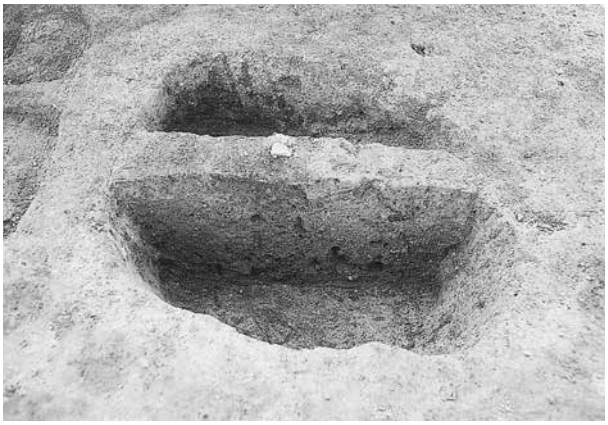


⑤ＳＫ13埋土土層断面（西から）

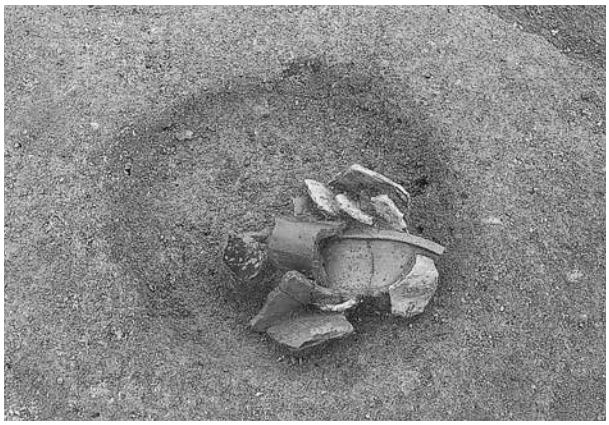


⑥ＳＫ15埋土土層断面（西から）

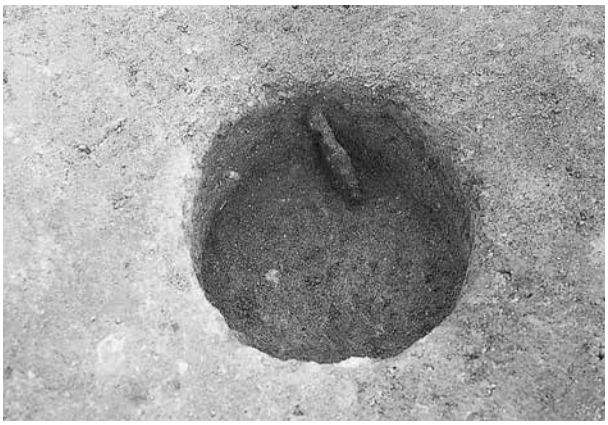
⑦ＳＫ20土器出土状況（東から）



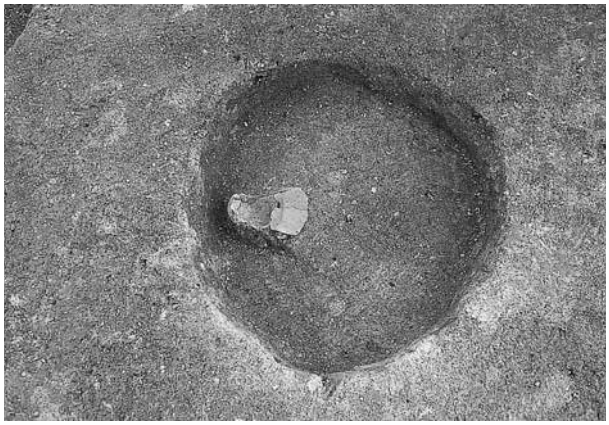
⑧ＳＫ20埋土土層断面（北から）



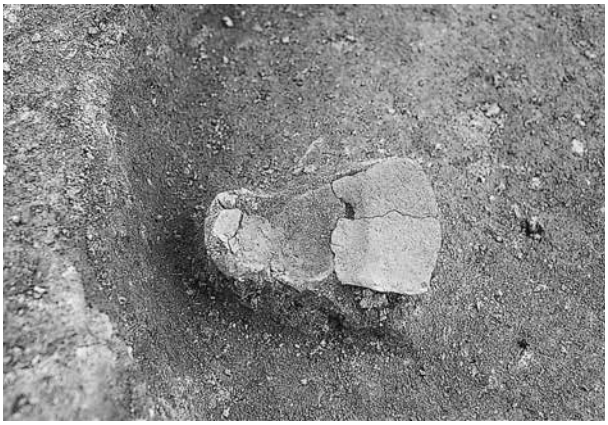
①Ｐ50全景（北西から）



②Ｐ60内鉄鏃出土状況（北西から）

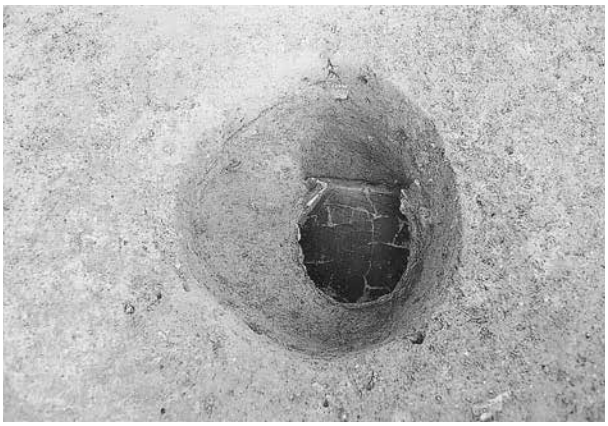


③Ｐ70上半部全景（北から）

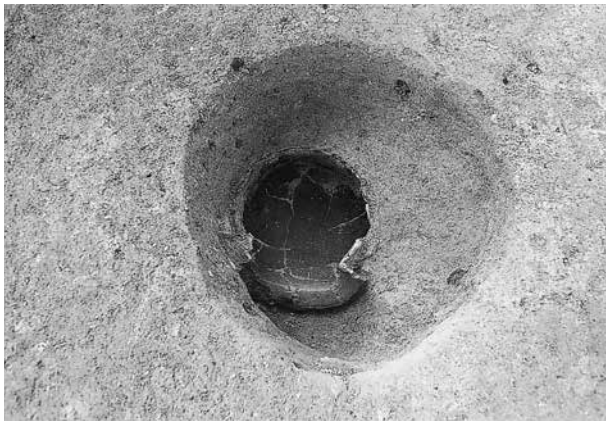


④Ｐ70上半部土器出土状況（北から）

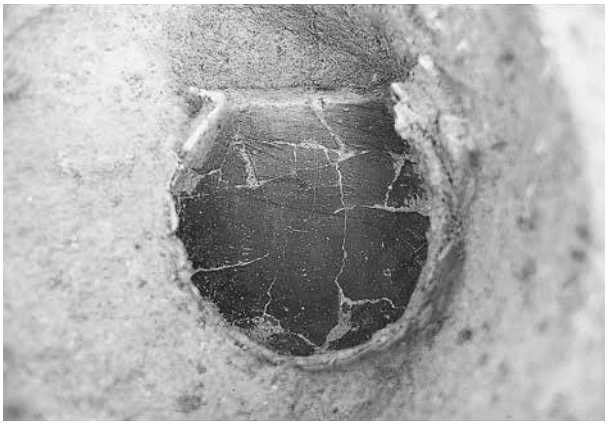
⑤Ｐ70下半部土器出土状況（北から）



⑥Ｐ70下半部土器下半部出土状況（北から）



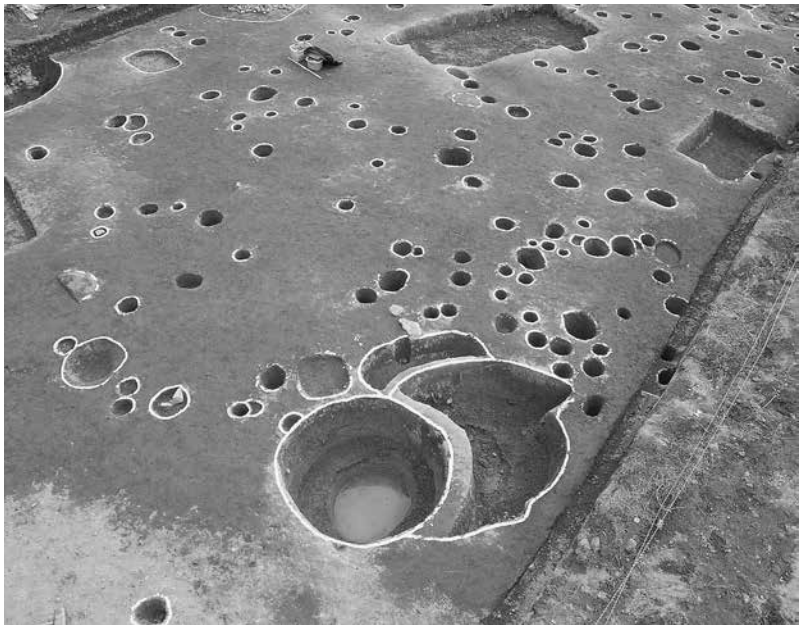
⑦Ｐ70下半部土器下半部出土状況（南から）



⑧Ｐ70下半部土器下半部出土状況（北から）

ＳＢ１・２・３（南から）

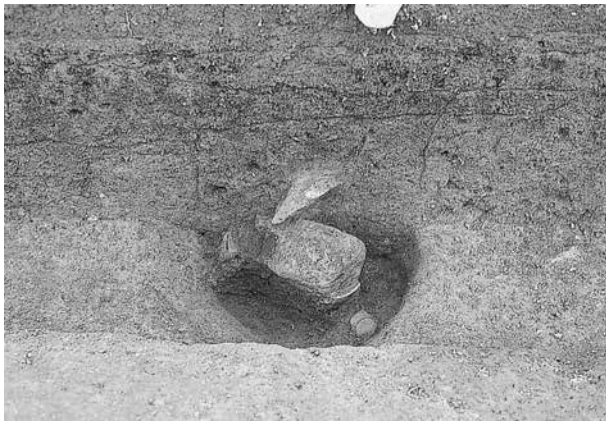
ＳＢ１・２・３・４（北から）



ＳＢ１・２（北から）

①P 8

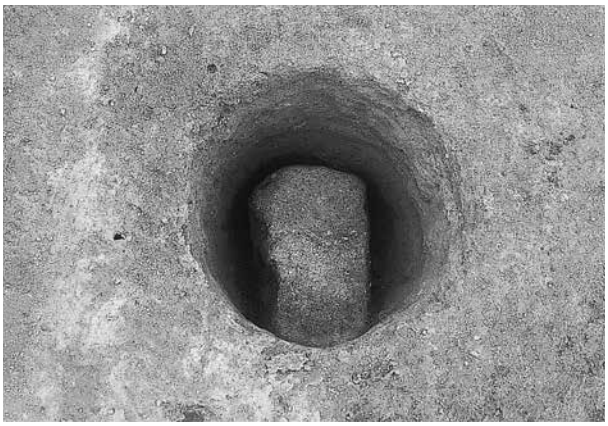
②P 75



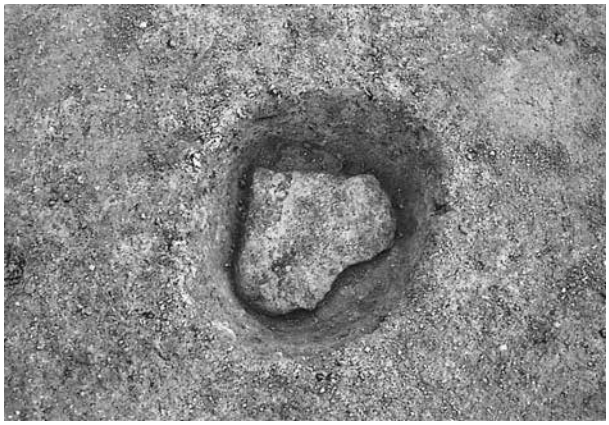
③P 33

④P 33

⑤P 53



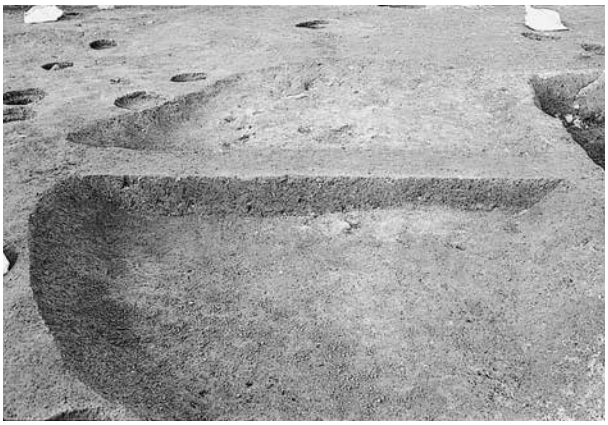
⑥P 77



⑦P 78

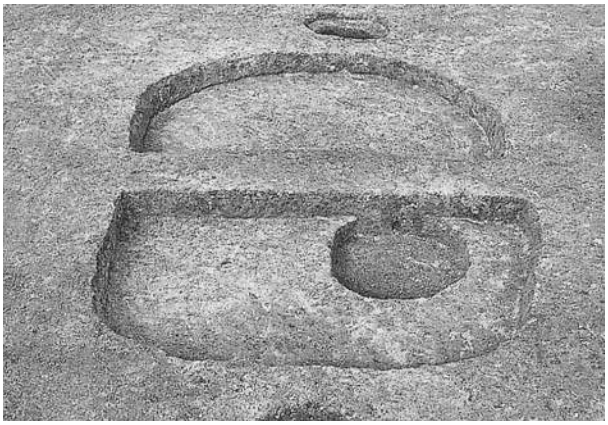
⑧P 79

①ＳＫ１

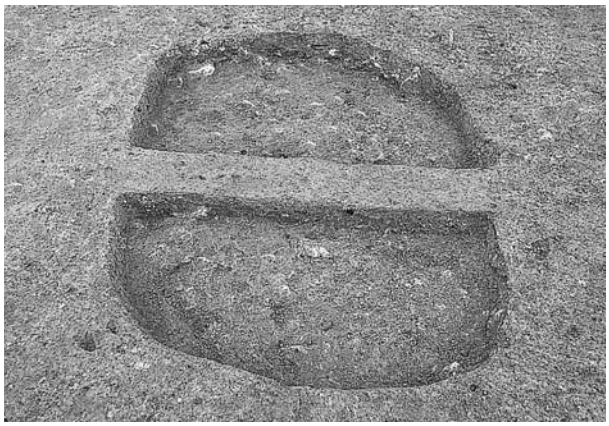


②ＳＫ３

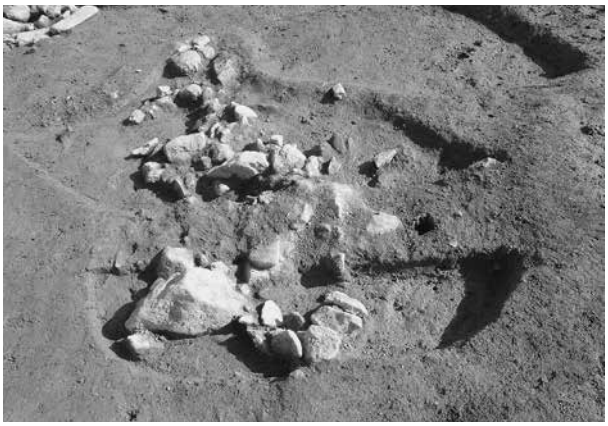
③ＳＤ１・ＳＫ５



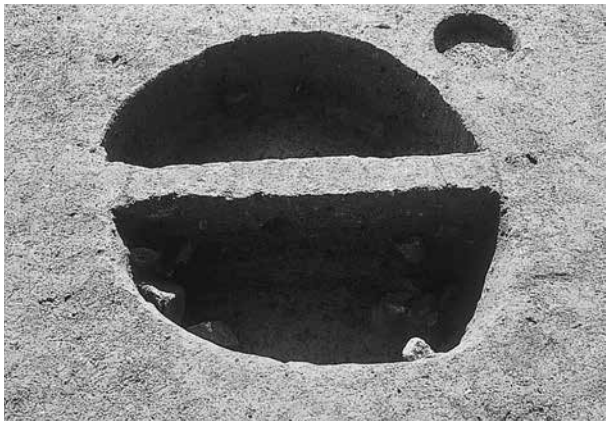
④ＳＫ７



⑤ＳＫ９



⑥ＳＫ11

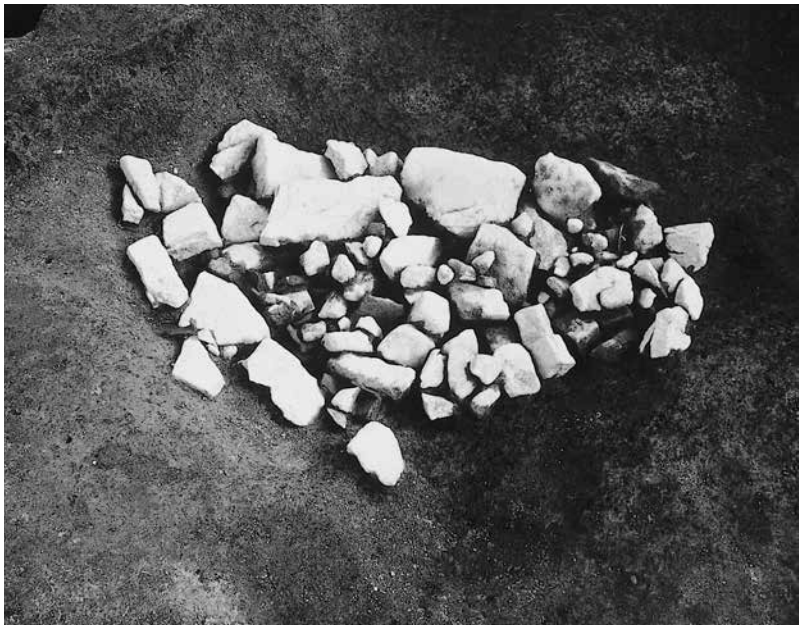


⑦ＳＫ12

⑧ＳＫ19

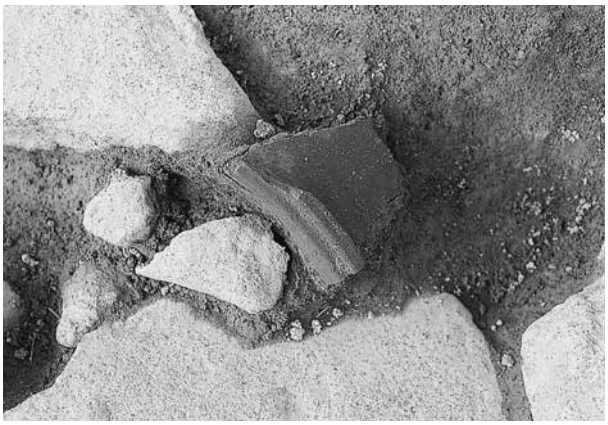
ＳＸ２土層断面（南から）

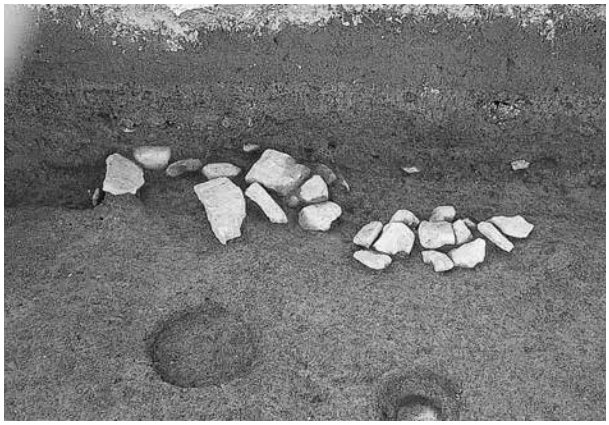
ＳＸ２（南東から）

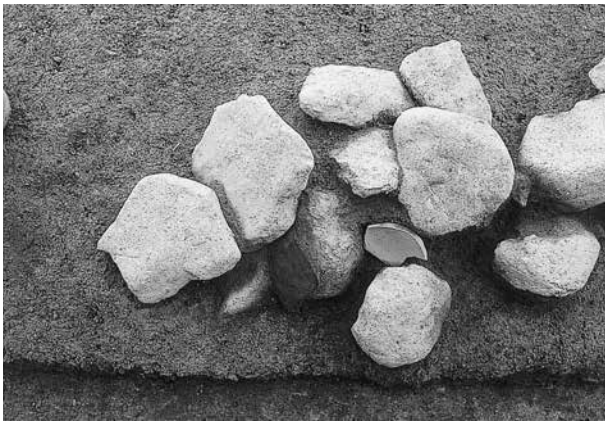


ＳＸ２集石状況（西から）

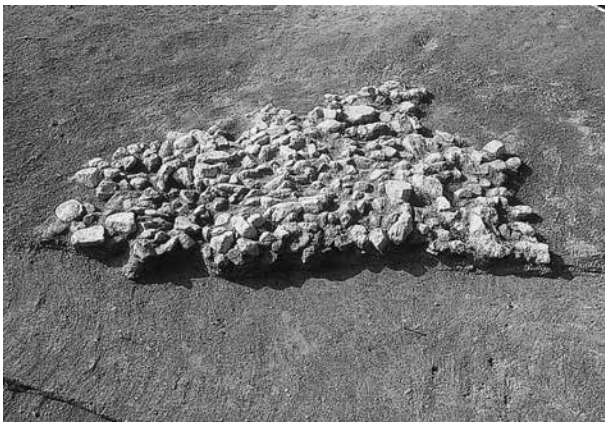
①ＳＸ２土器出土状況


②ＳＸ２土器出土状況

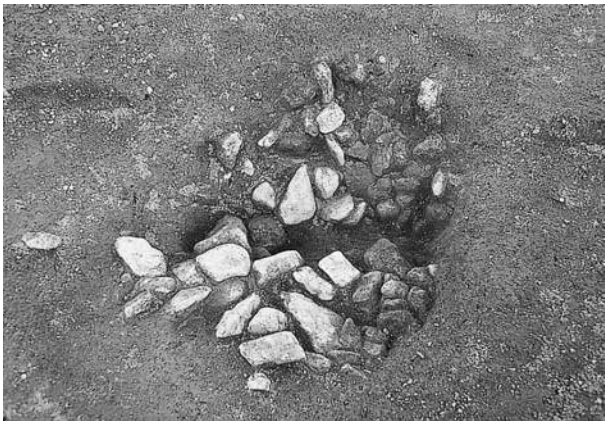

③ＳＸ１（東から）

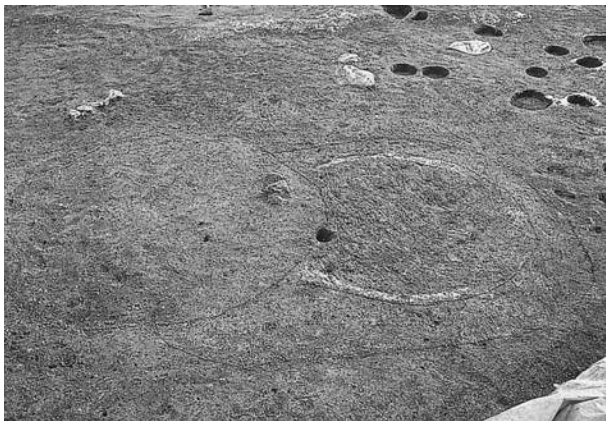

④ＳＸ１土器出土状況

⑤ＳＸ３検出状況（西から）

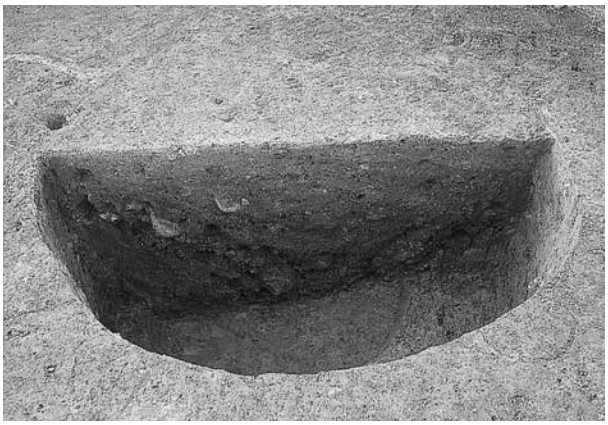

⑥ＳＸ３半截状況（東から）

⑦ＳＸ４検出状況（西から）

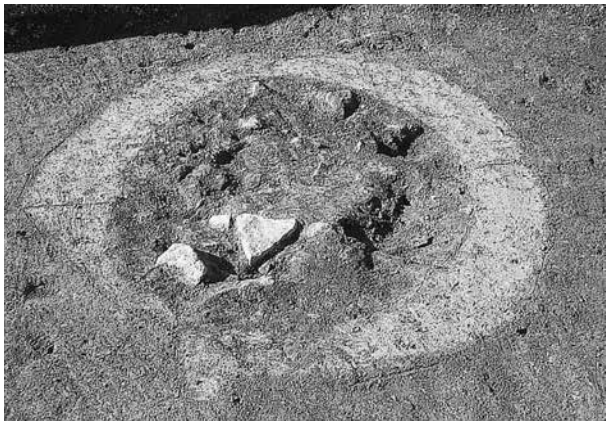

⑧ＳＸ４一段掘削状況



①ＳＥ１・２検出状況（北西から）

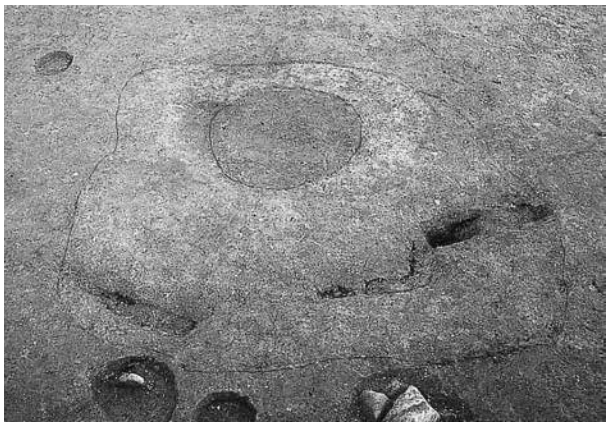


②ＳＥ１半截状況（南東から）

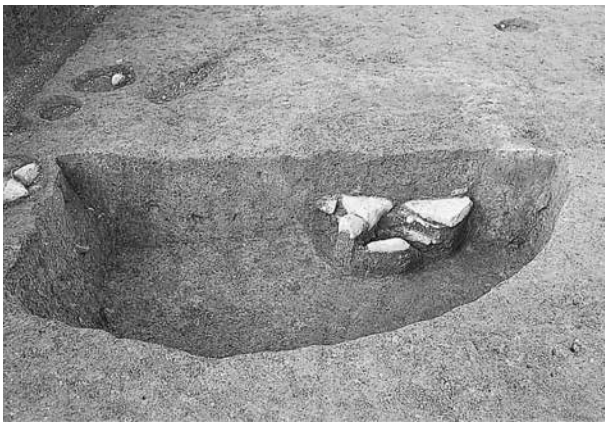


③ＳＥ３検出状況（東から）

④ＳＥ３半截状況（東から）

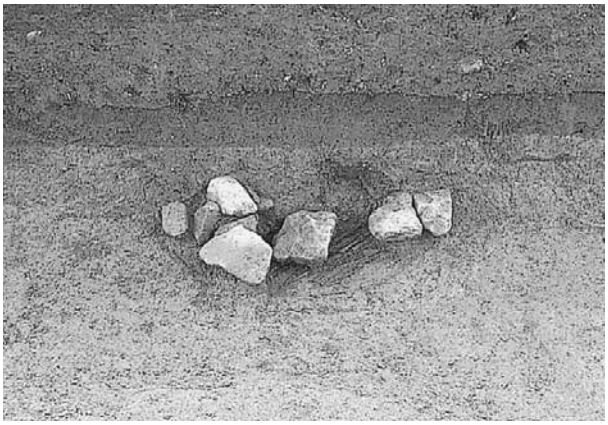


⑤ＳＥ５検出状況（西から）



⑥ＳＥ５半截状況（北から）

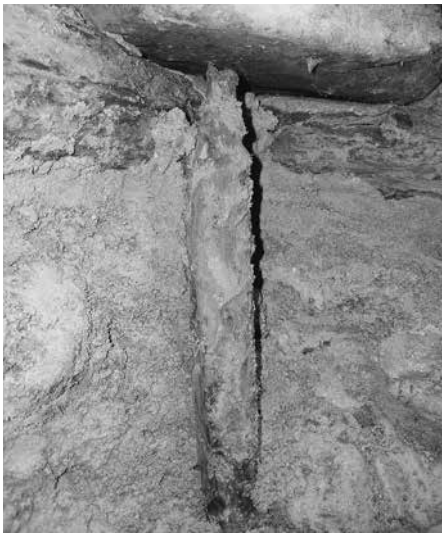
⑦ＳＥ６半截状況（南西から）



⑧ＳＥ７（東から）

①ＳＥ９（西から）

②ＳＥ９石組み



③井戸内隅の杭と根太

④ＳＥ９縄及び木製品出土状況

⑤井戸内隅の杭と根太

縄紋時代調査区全景（北から）

縄紋時代調査区全景（南から）

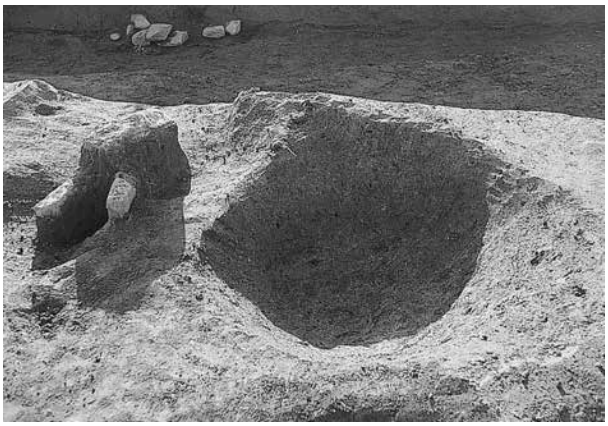
①縄紋調査区北半部（北から）

②縄紋調査区南半部（北から）

③縄紋調査区礫集中部（北東から）

④縄紋調査区礫集中部（東横から）

⑤縄紋調査区礫集中部下面土層断面（東から）


⑥縄紋調査区礫集中部下面の状況（東から）

⑦縄紋調査区ＳＫ102埋土土層断面（北から）

⑧縄紋調査区北端部土層断面（南西から）

花山院

花山院

花山院から見た遺跡周辺

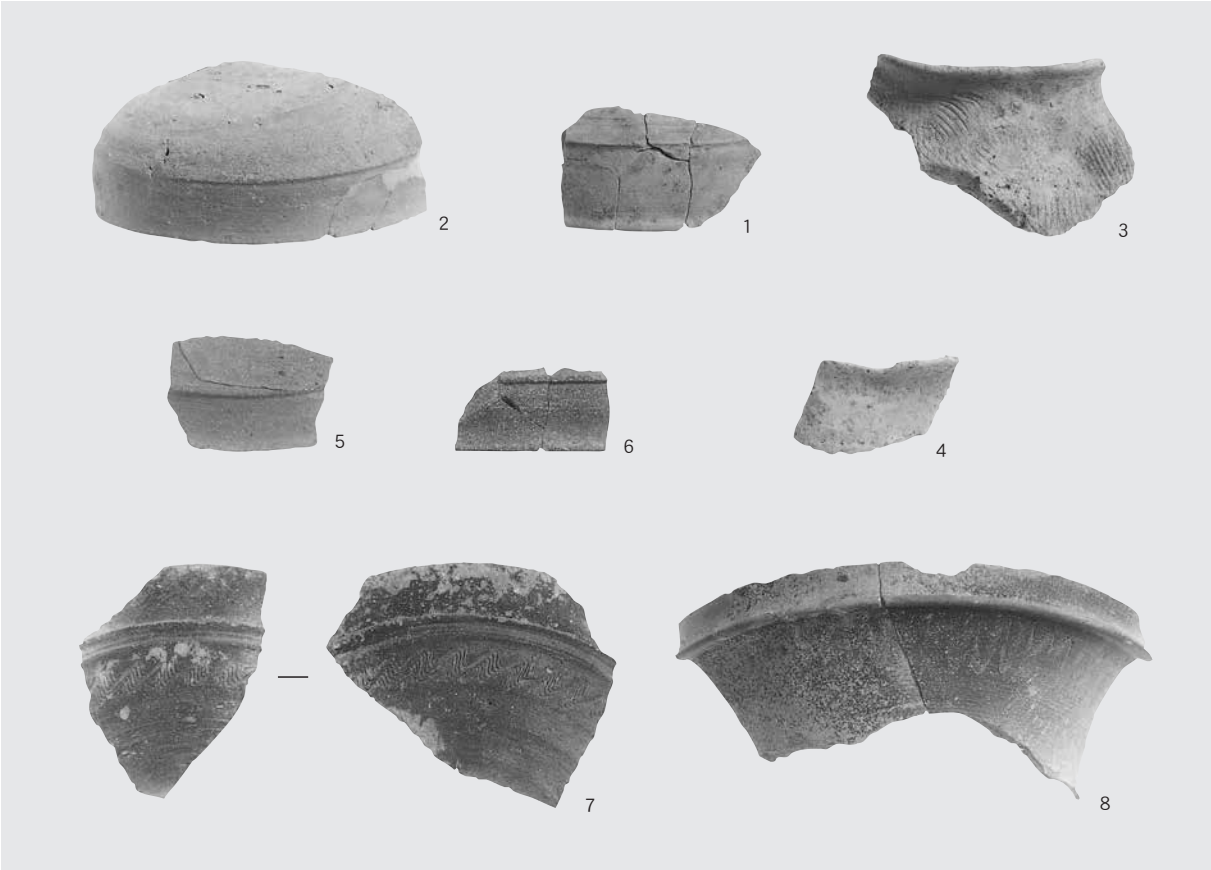
十二妃の墓

大日堂

経塚

風呂ヶ谷古墳

風呂ヶ谷古墳石室



竪穴住居跡ＳＨ１・２出土土器

竪穴住居跡ＳＨ２・３出土土器

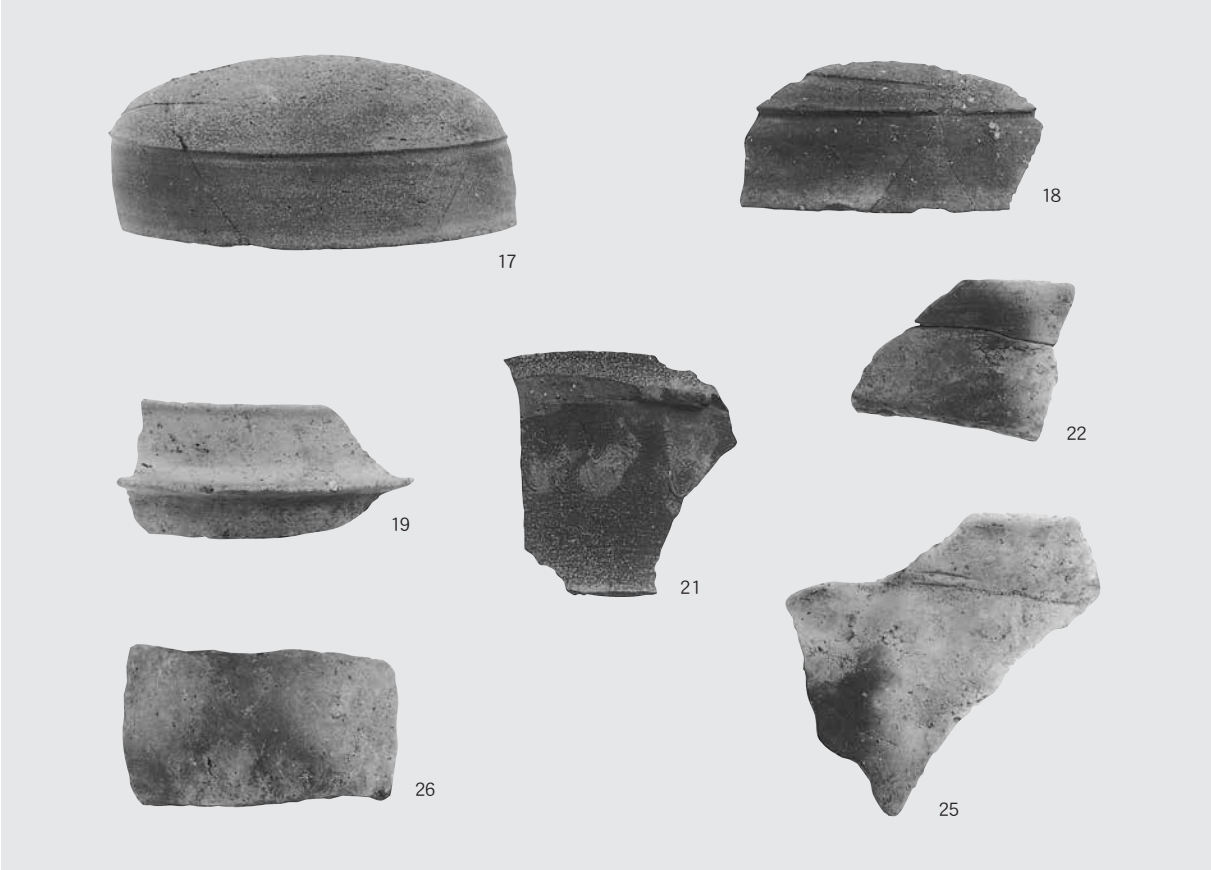
9

23

20

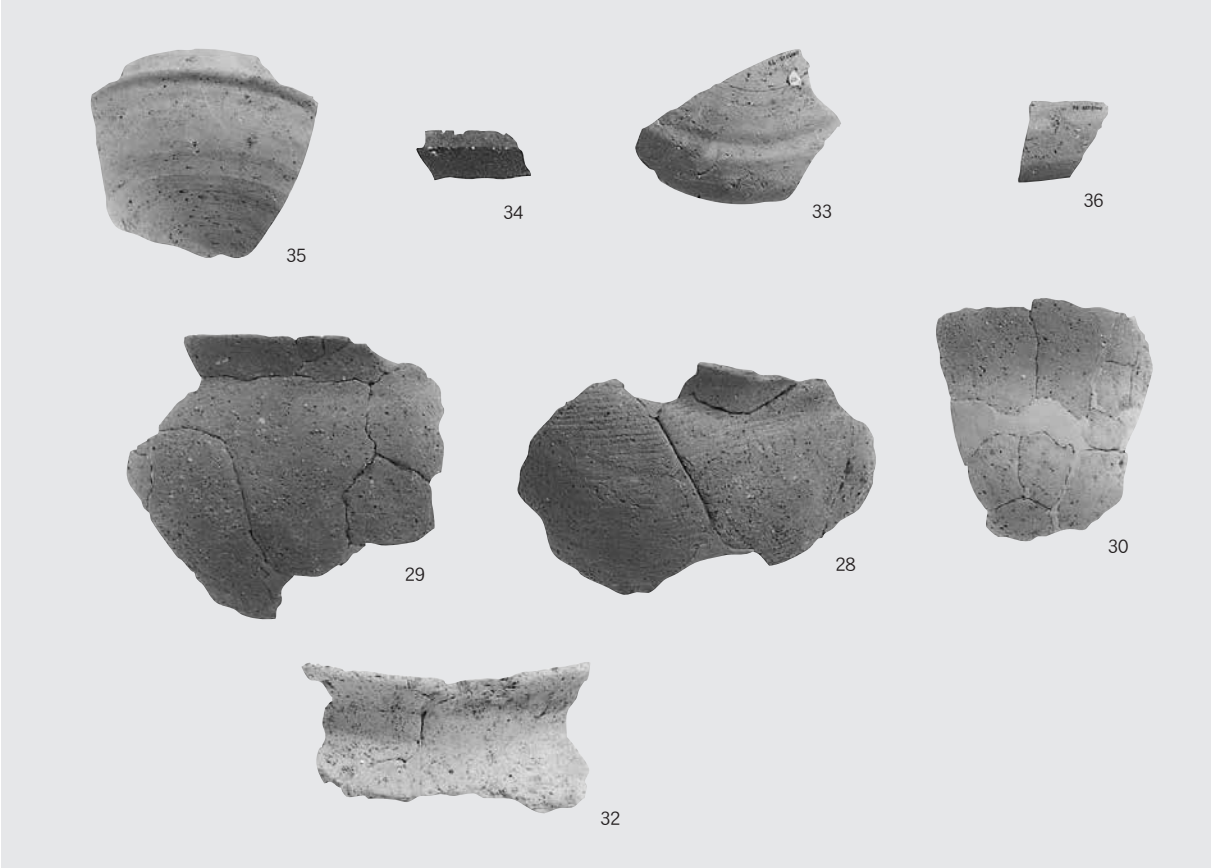
24

竪穴住居跡・土坑出土土器



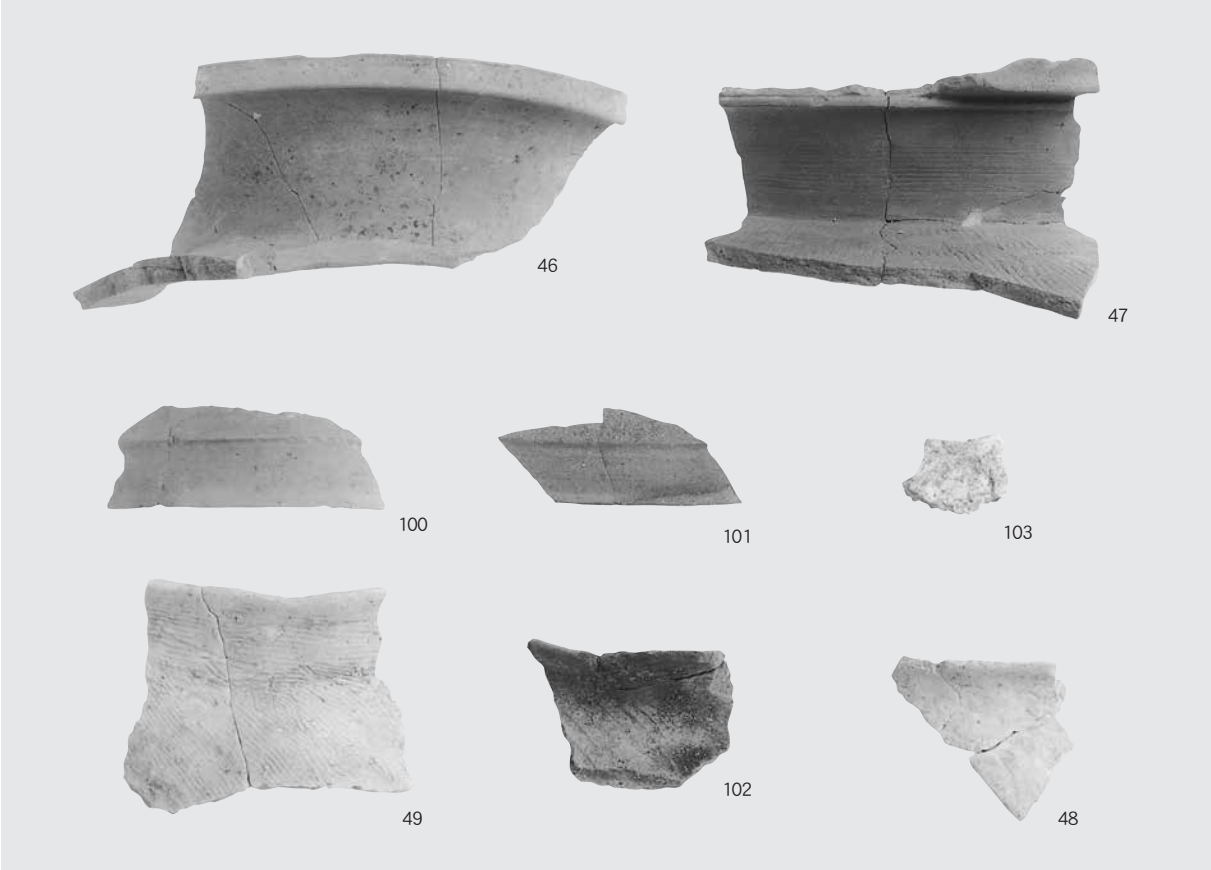
土坑出土土器

柱穴・土坑出土土器

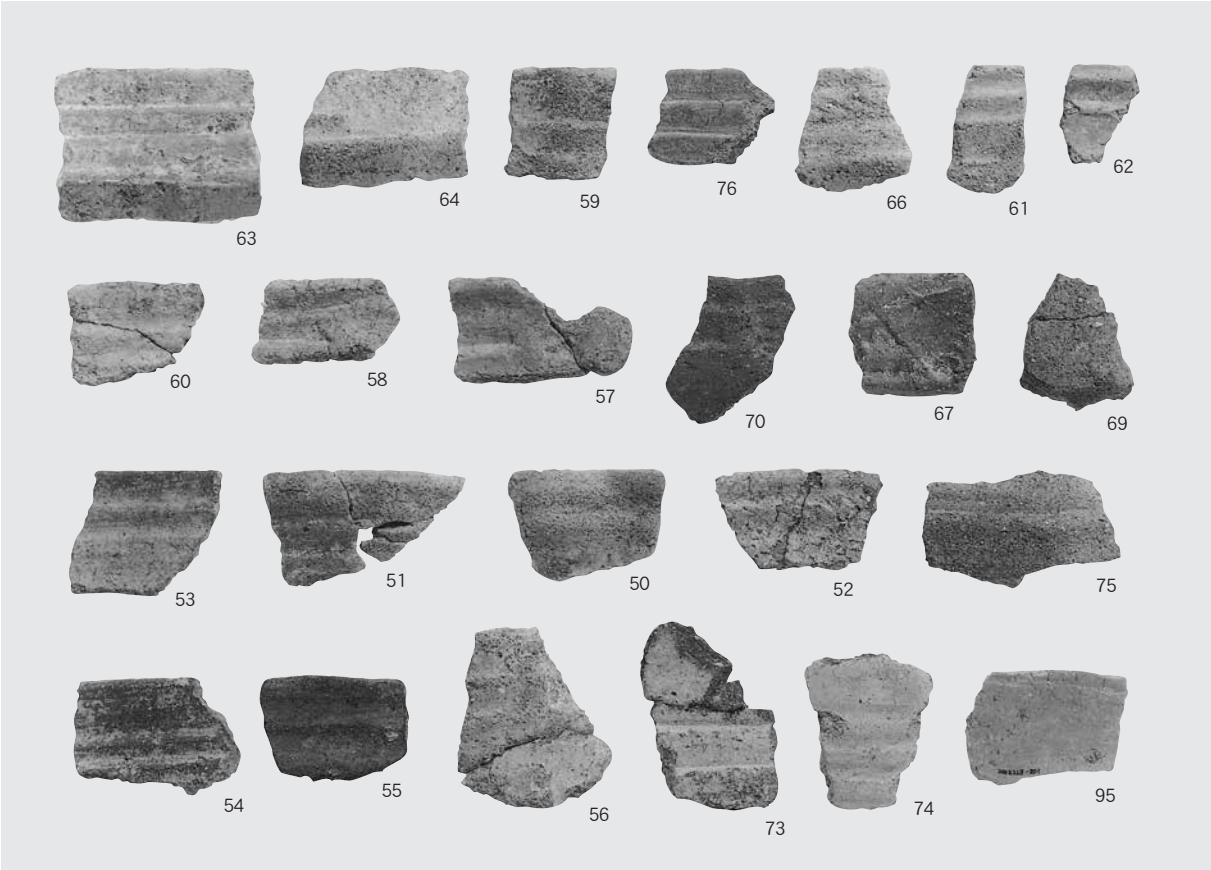


柱穴出土土器

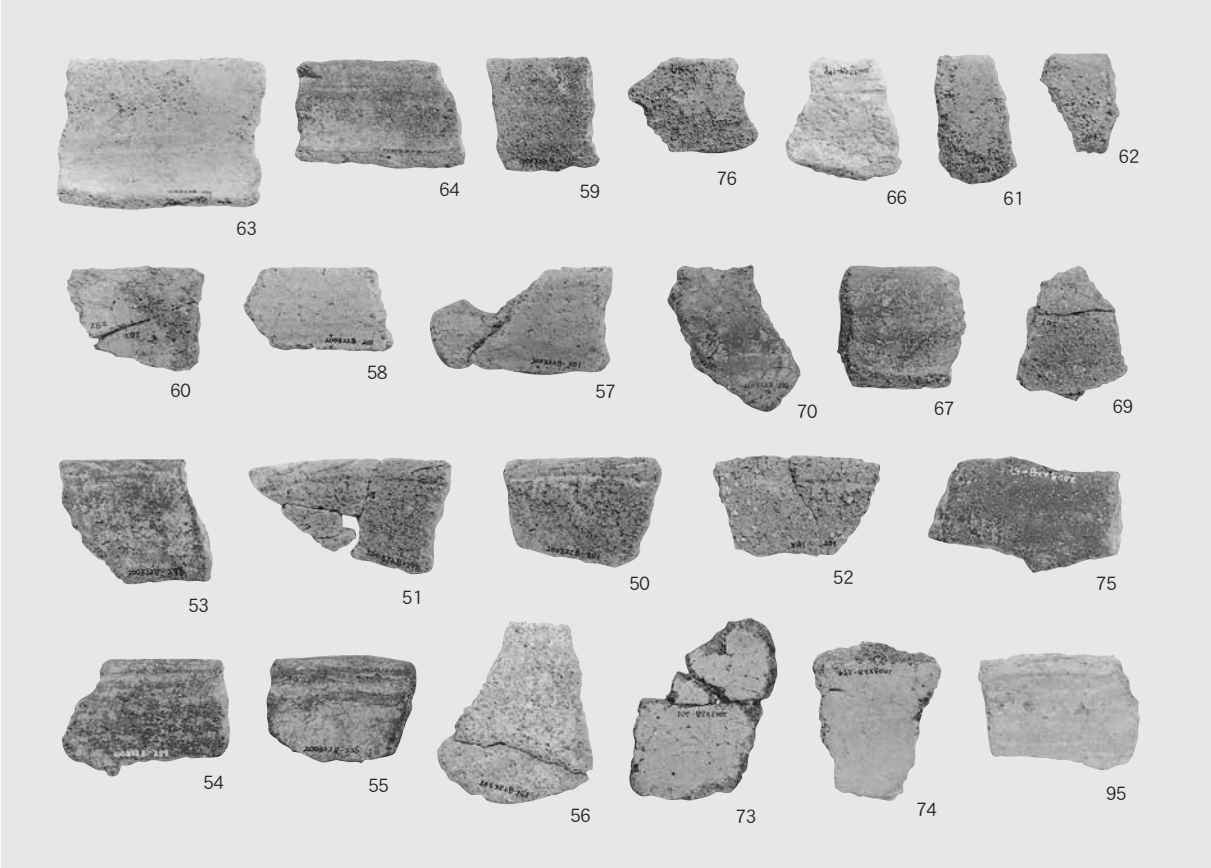
井戸ＳＥ１出土土器



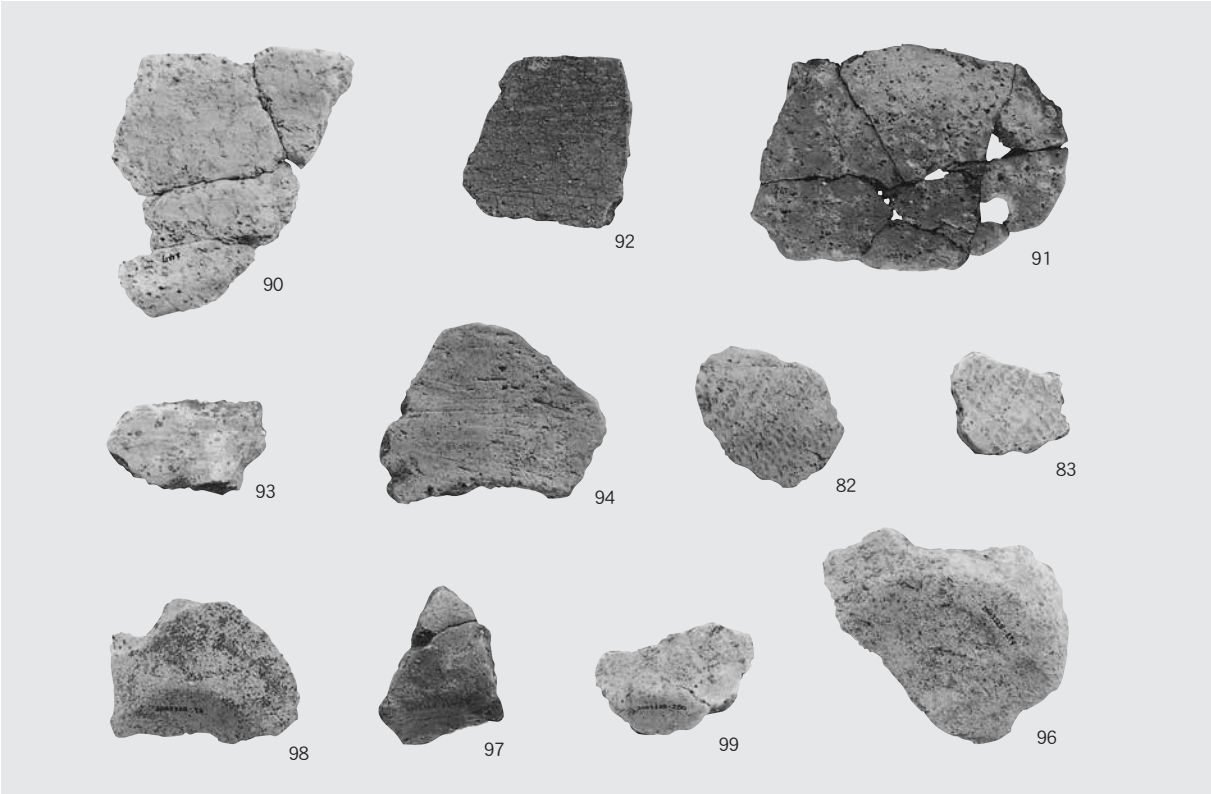
Ｐ50・包含層出土土器



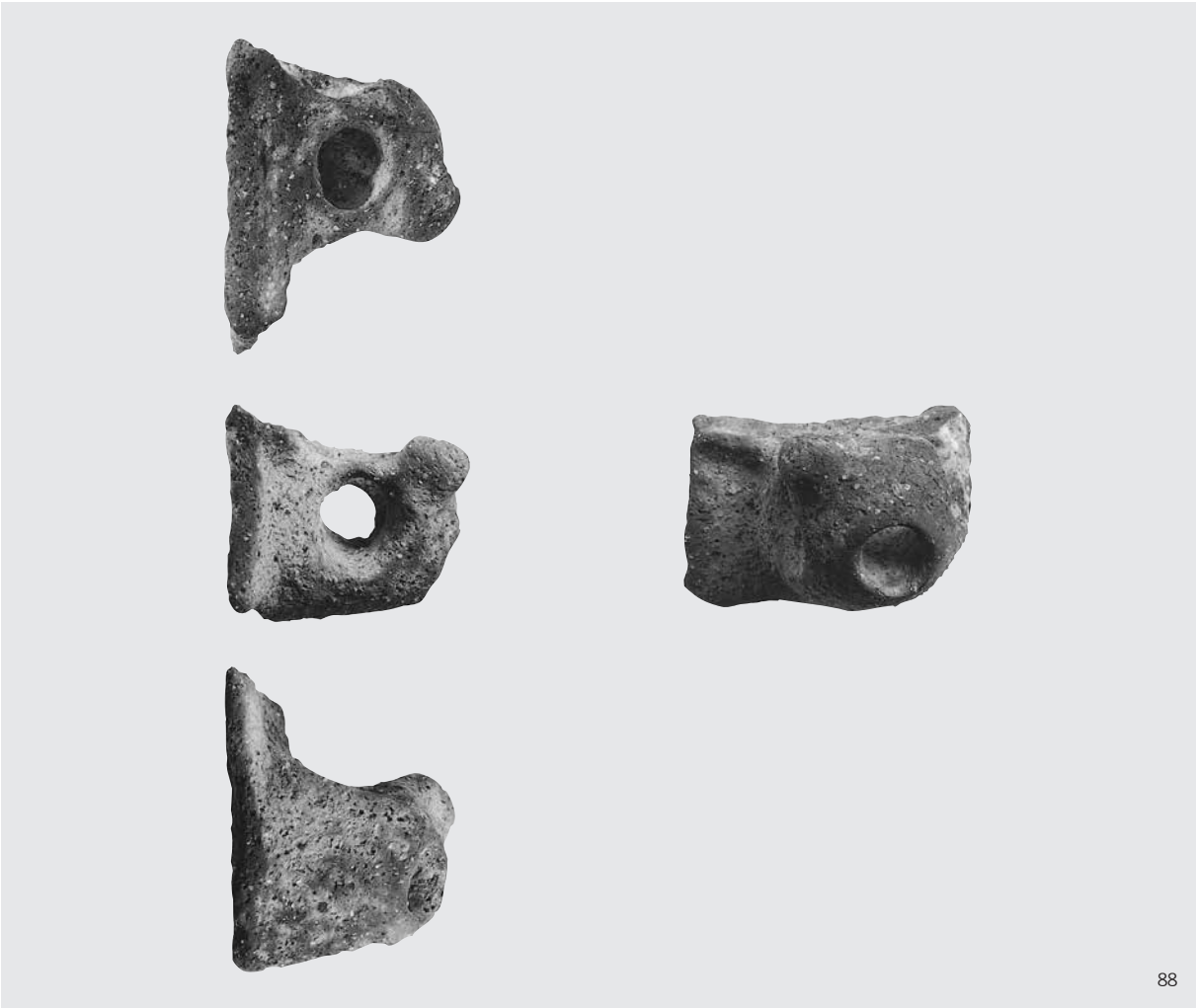
包含層出土縄紋土器（外面）



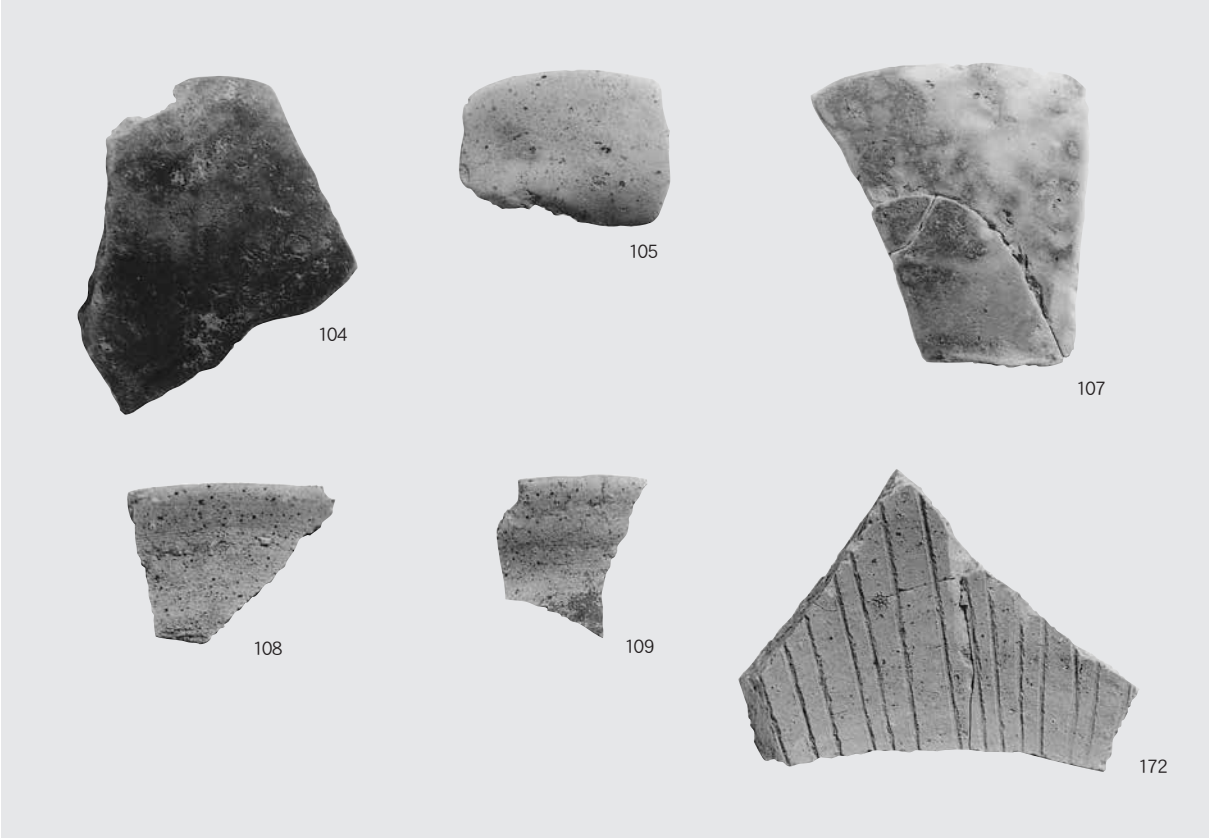
包含層出土縄紋土器（内面）

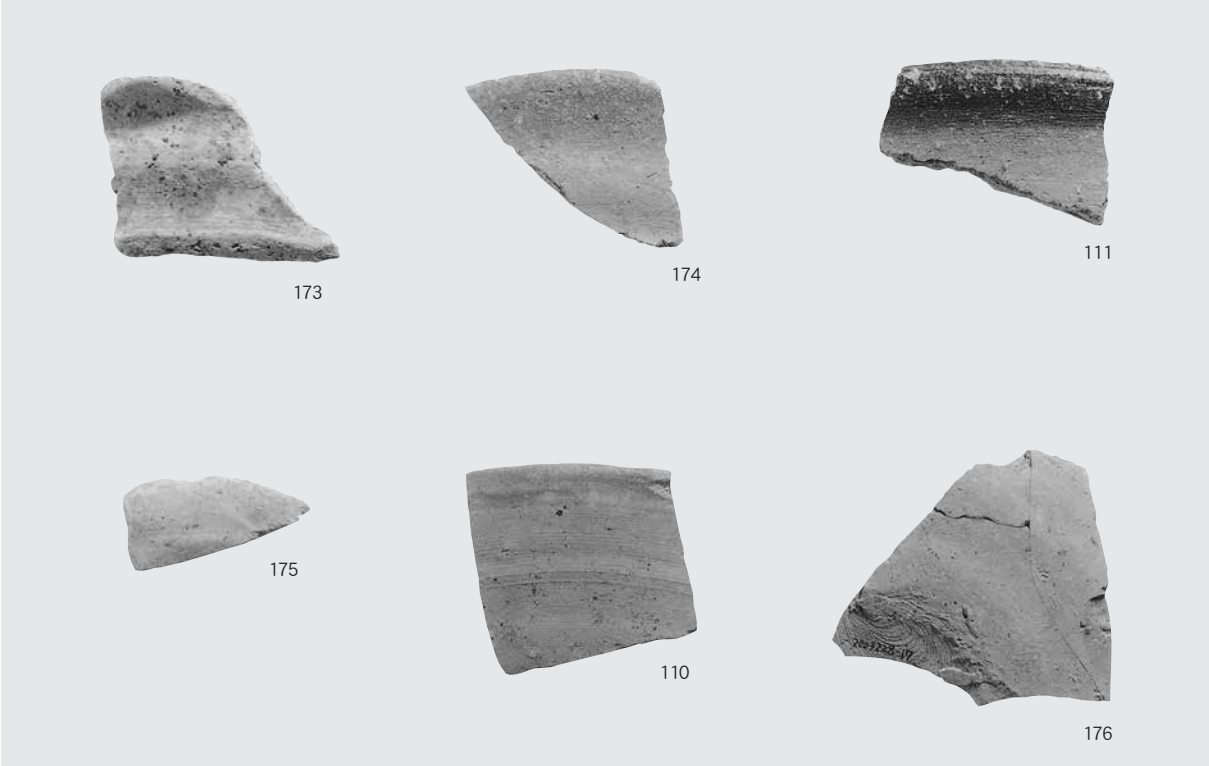


包含層出土縄紋土器

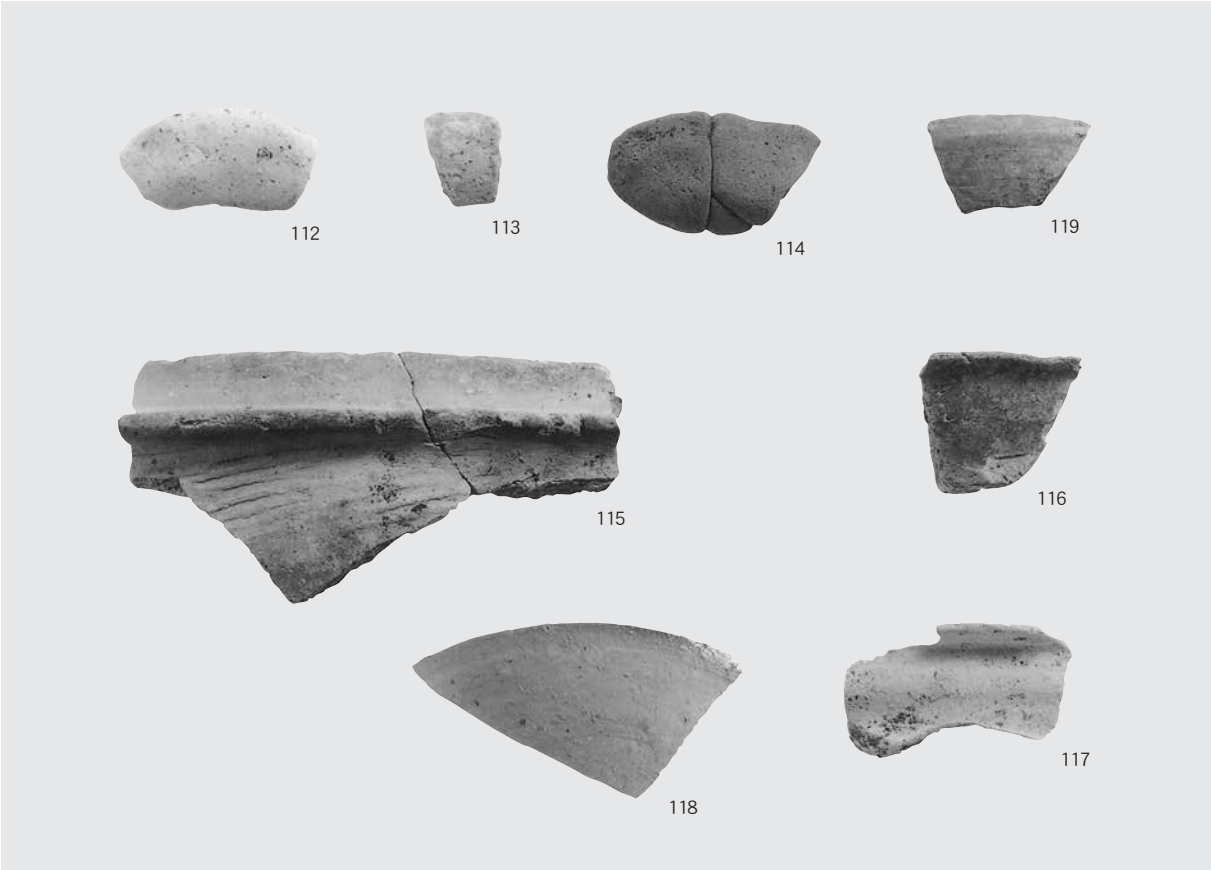


包含層出土縄紋土器

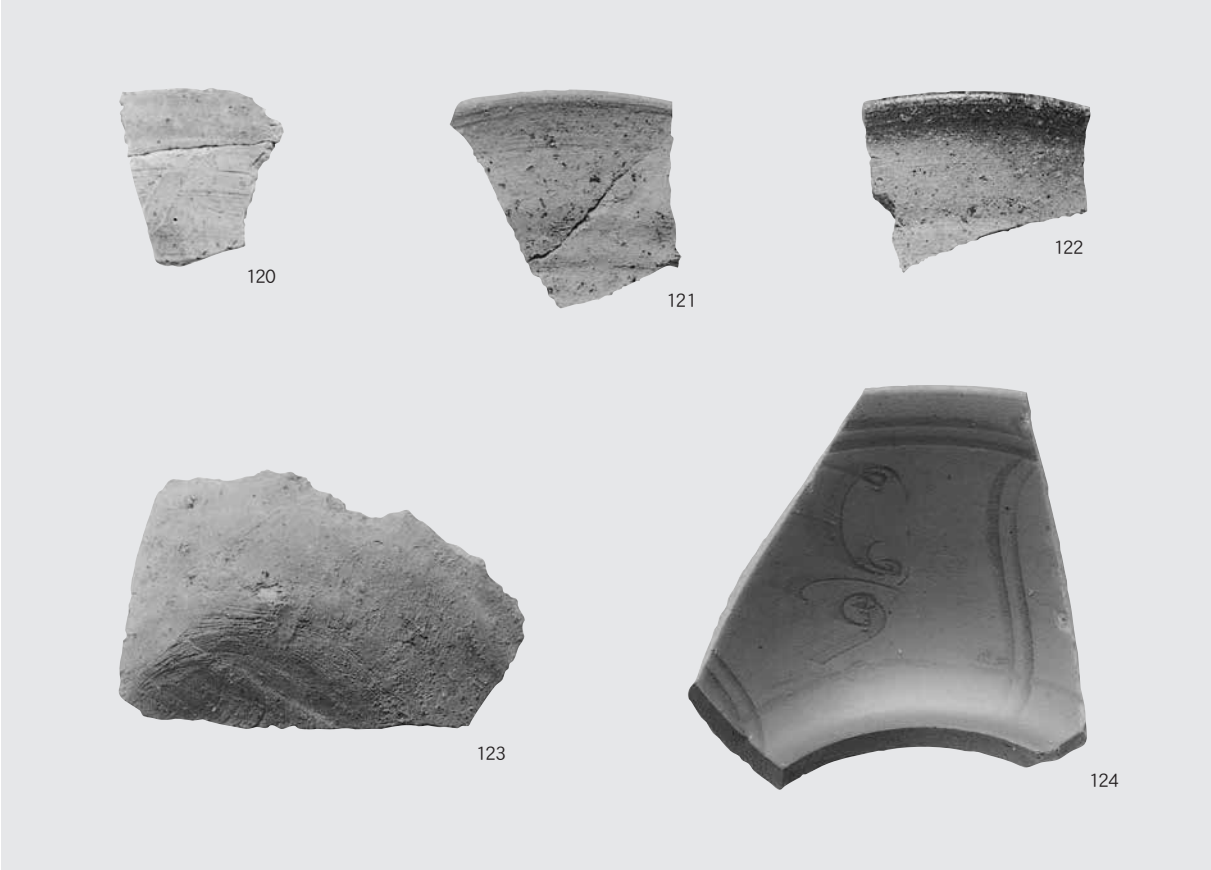




掘立柱建物跡ＳＢ２・３・柱穴出土土器



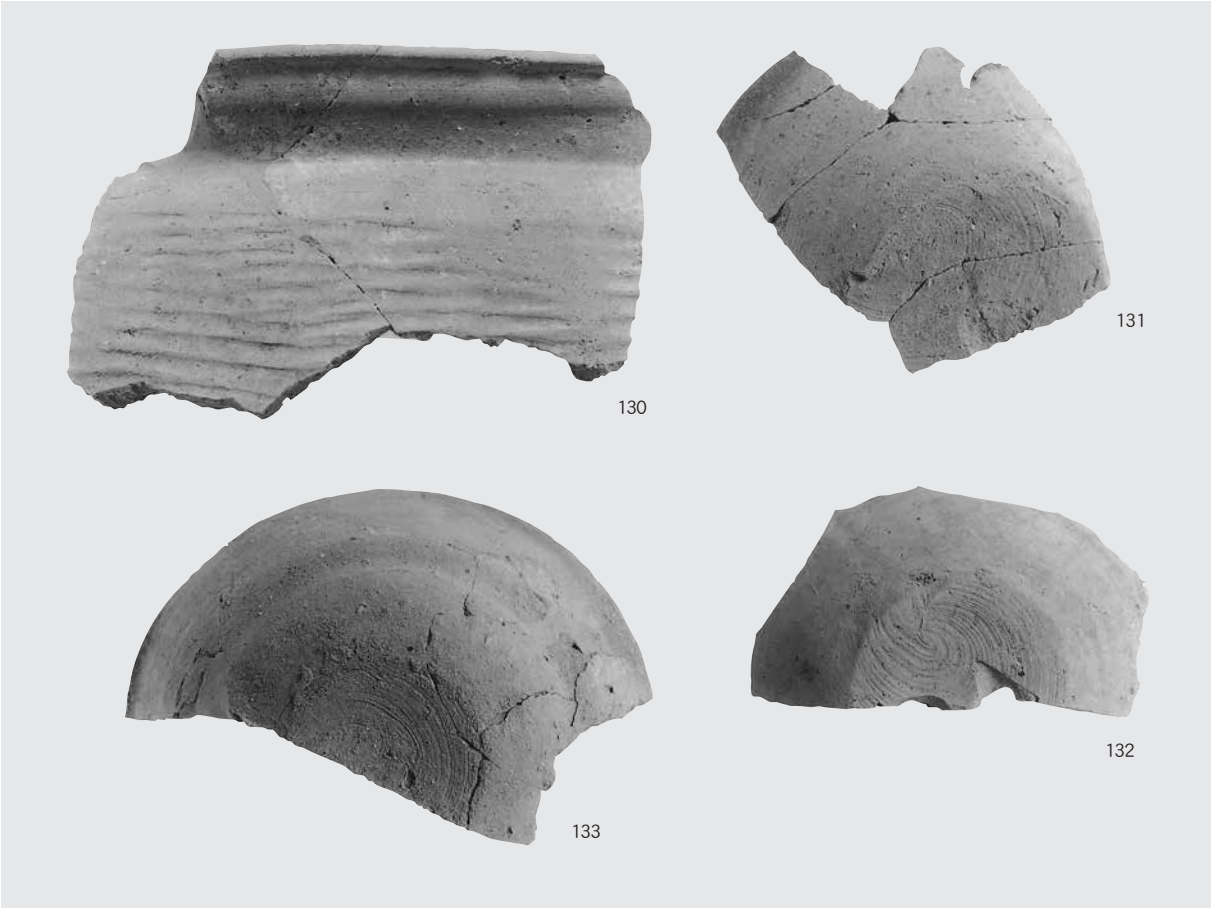
柱穴出土土器



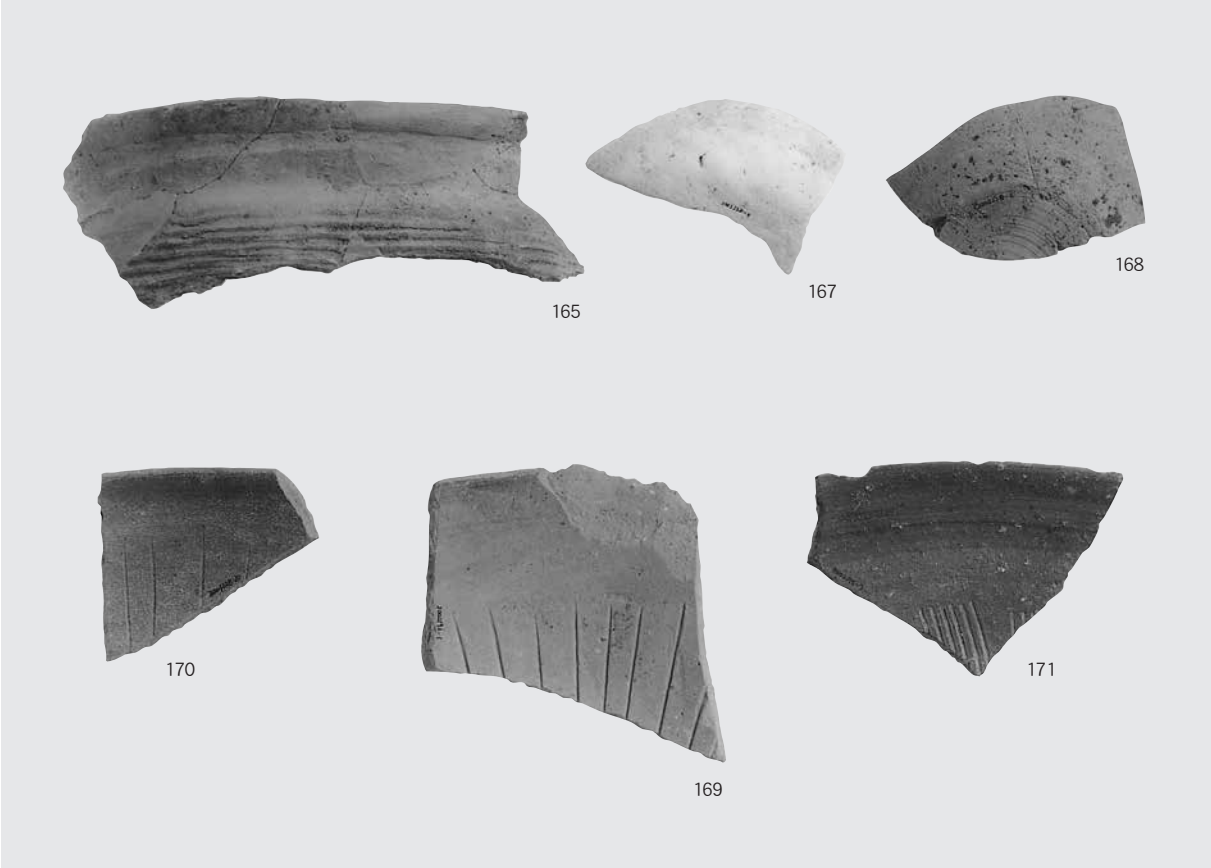
柱穴出土土器

ＳＫ３出土土器

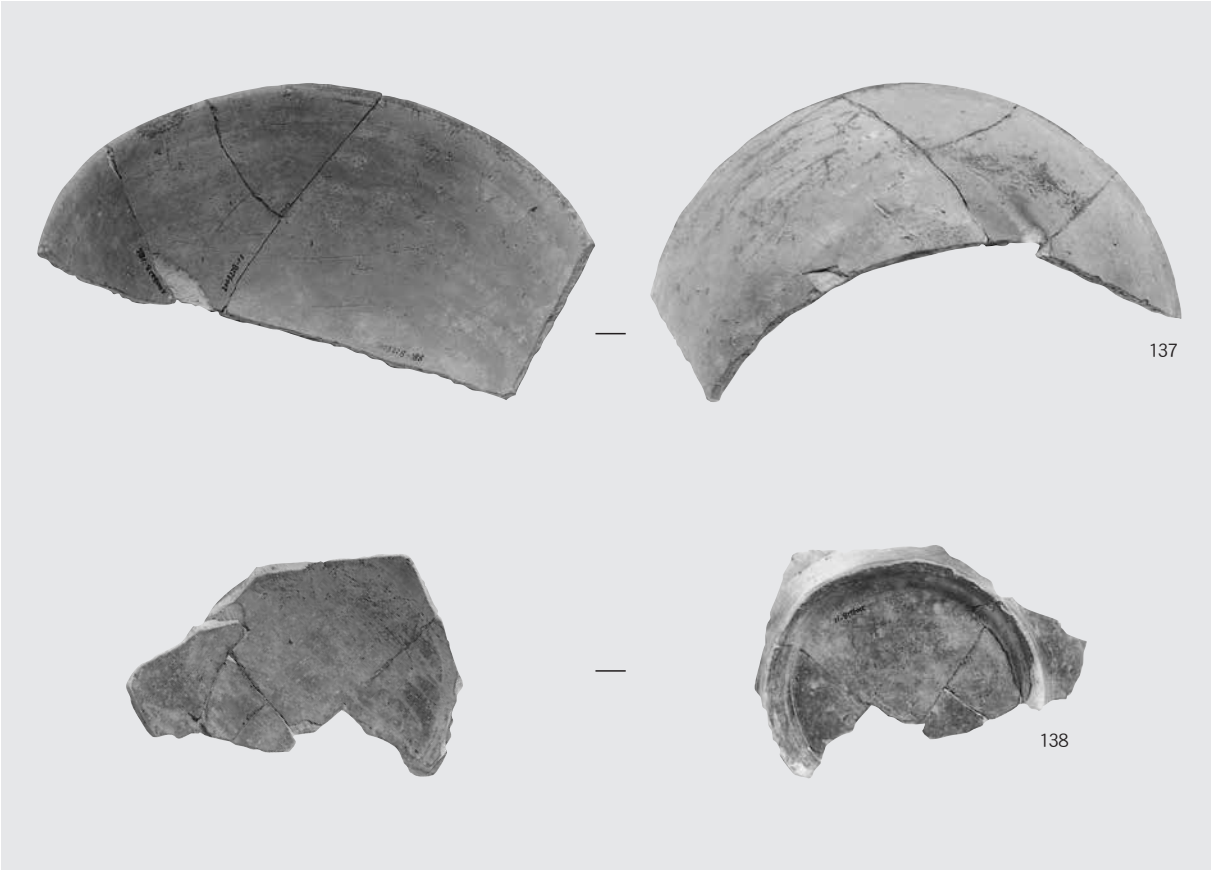
ＳＫ３出土土器



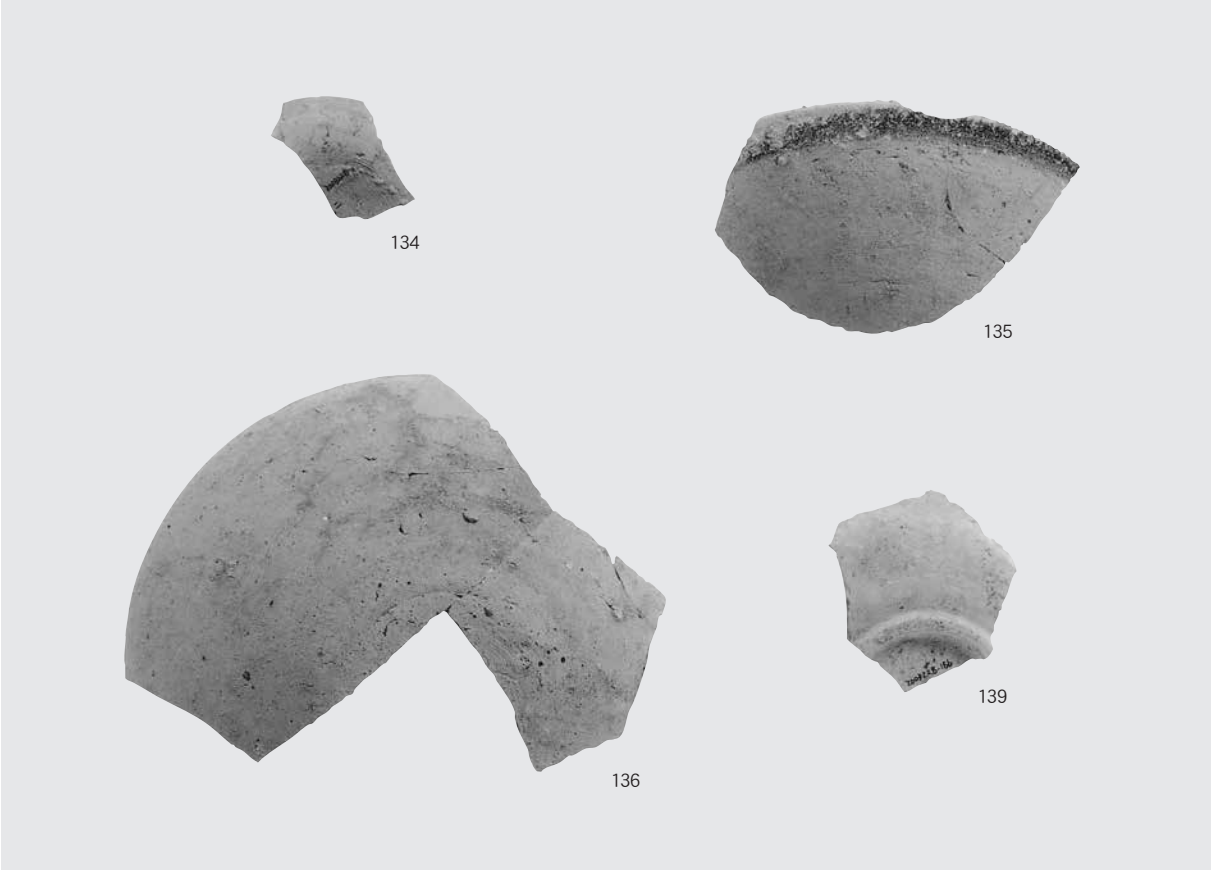
ＳＫ５出土土器



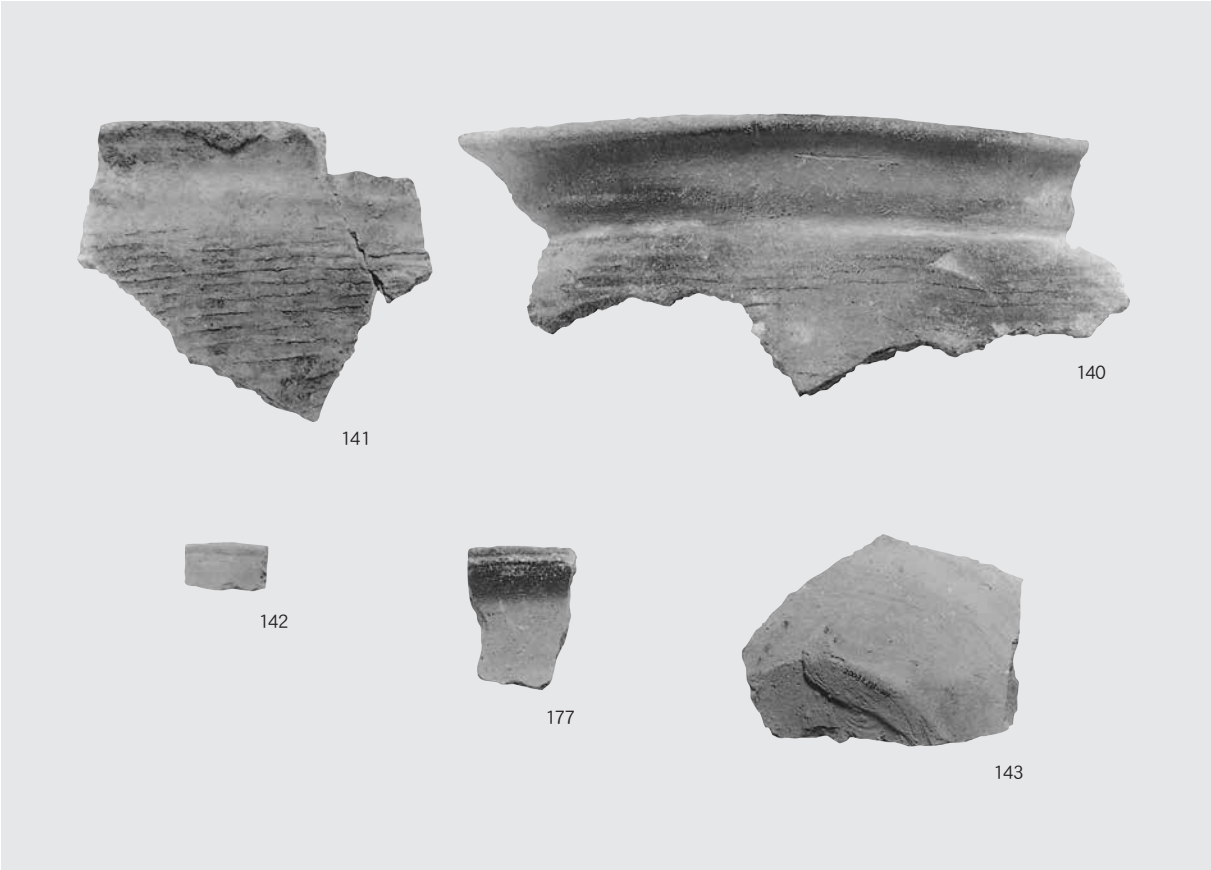
包含層出土土器



ＳＸ１出土土器

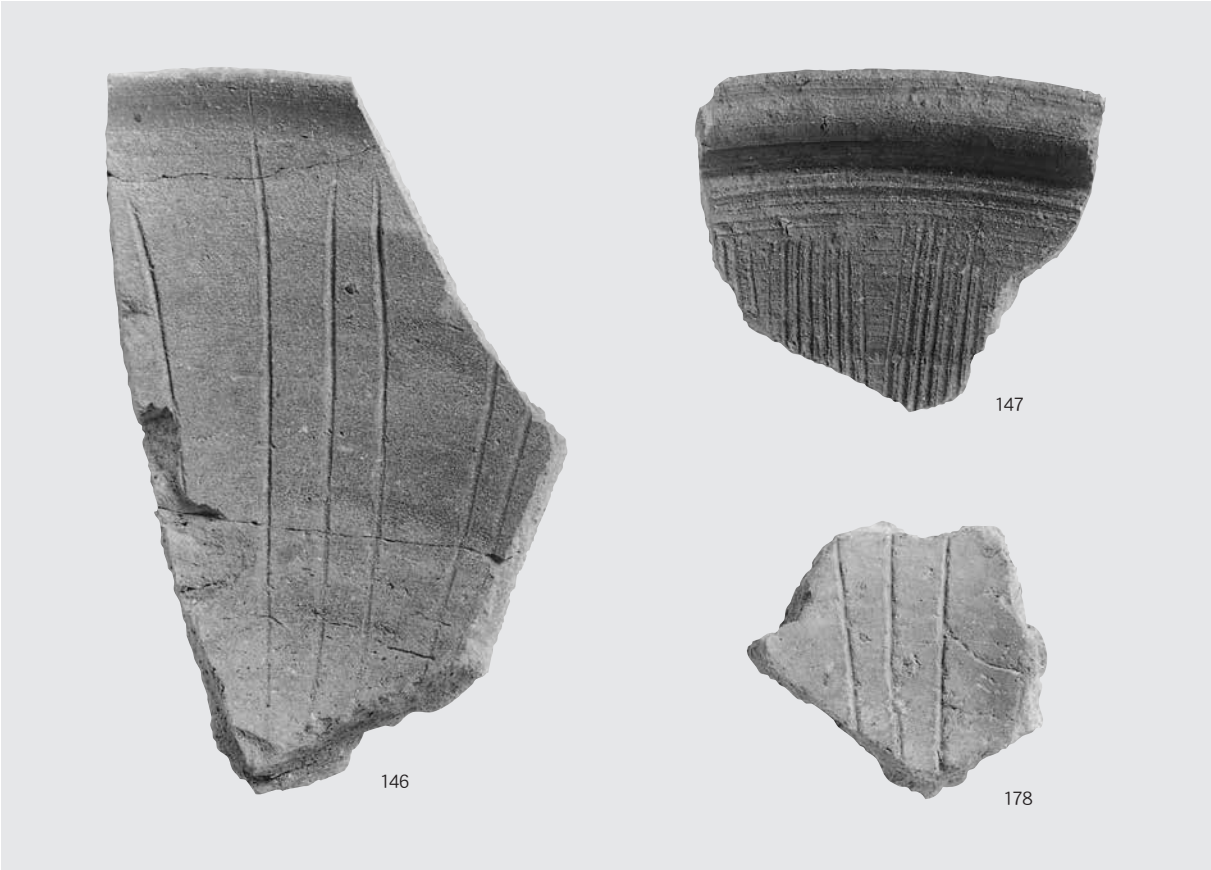


ＳＸ１出土土器

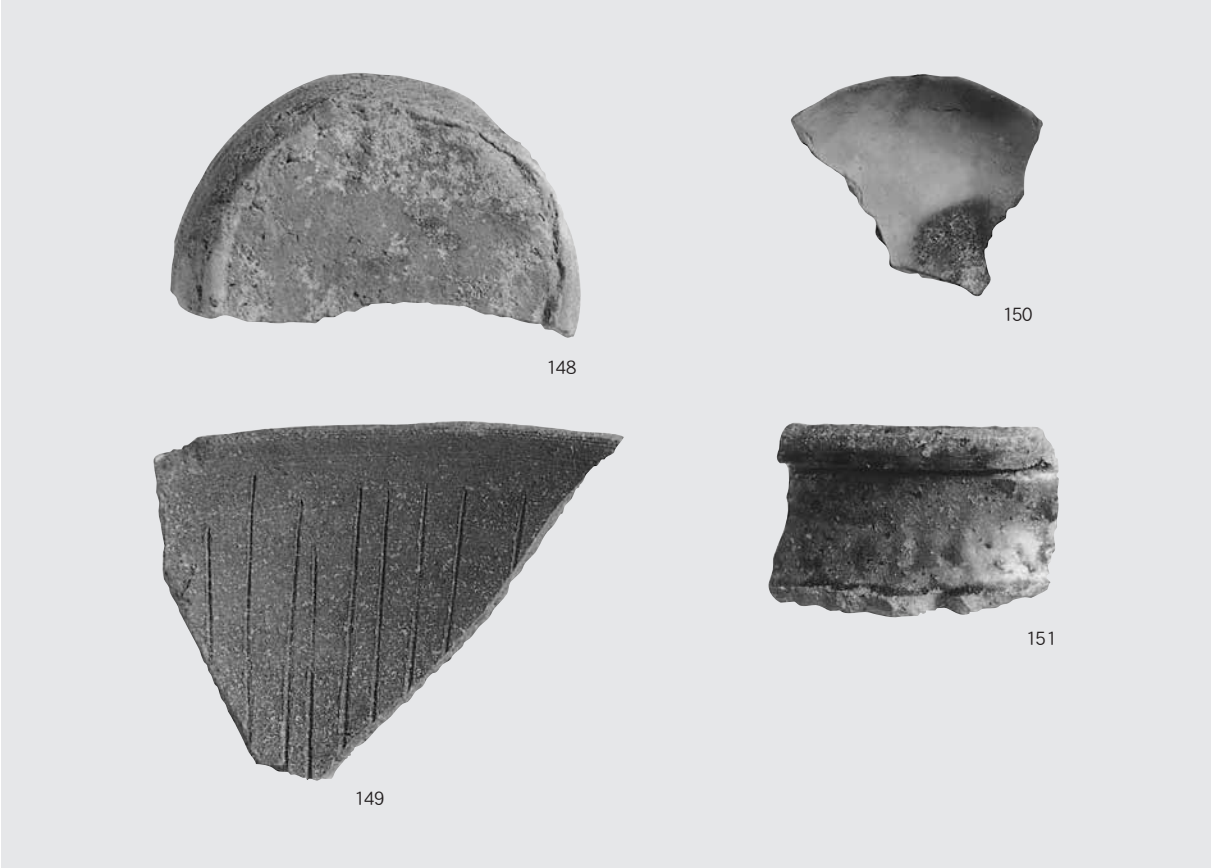


ＳＸ２出土土器

ＳＸ２出土土器

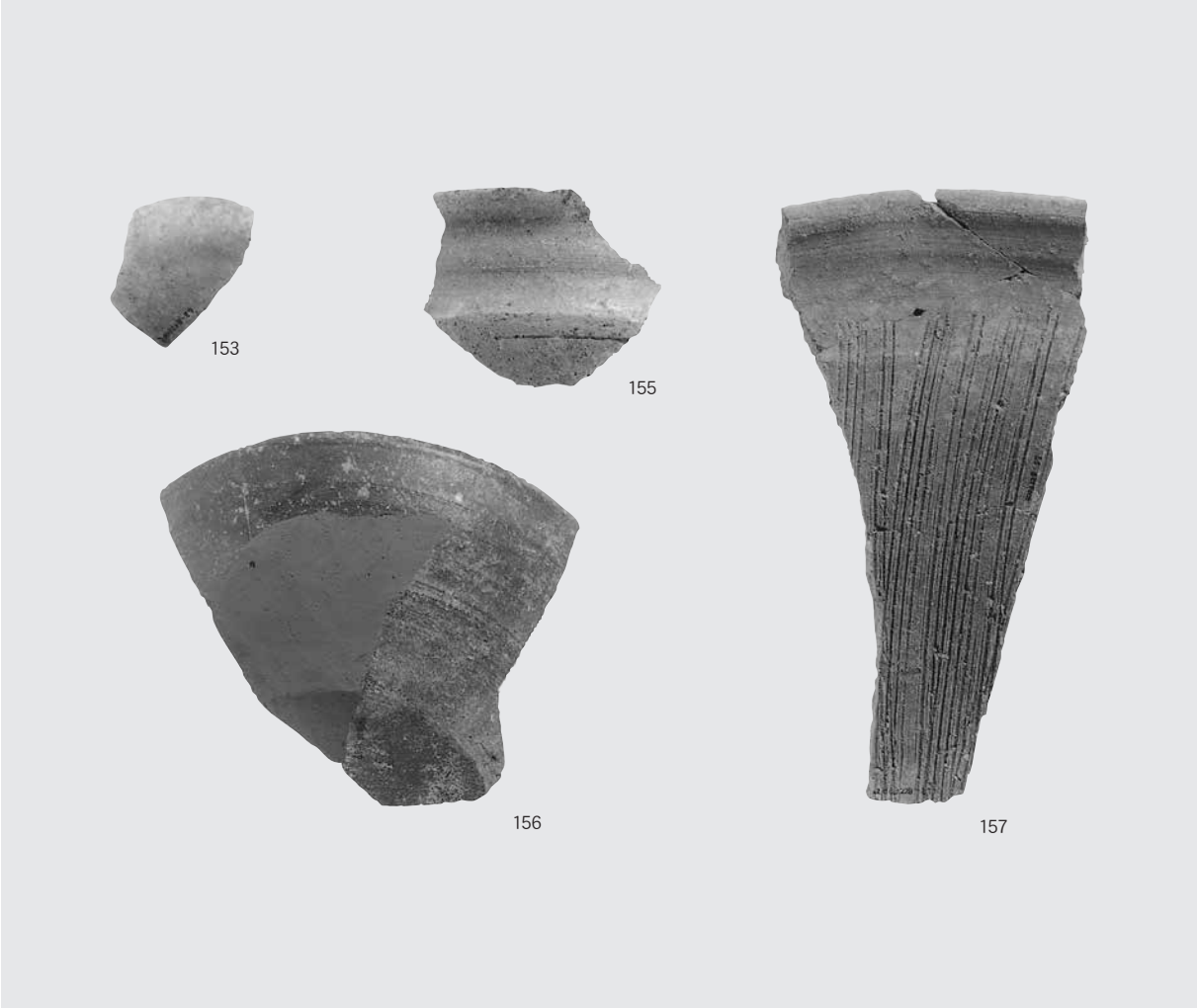


ＳＸ３出土土器

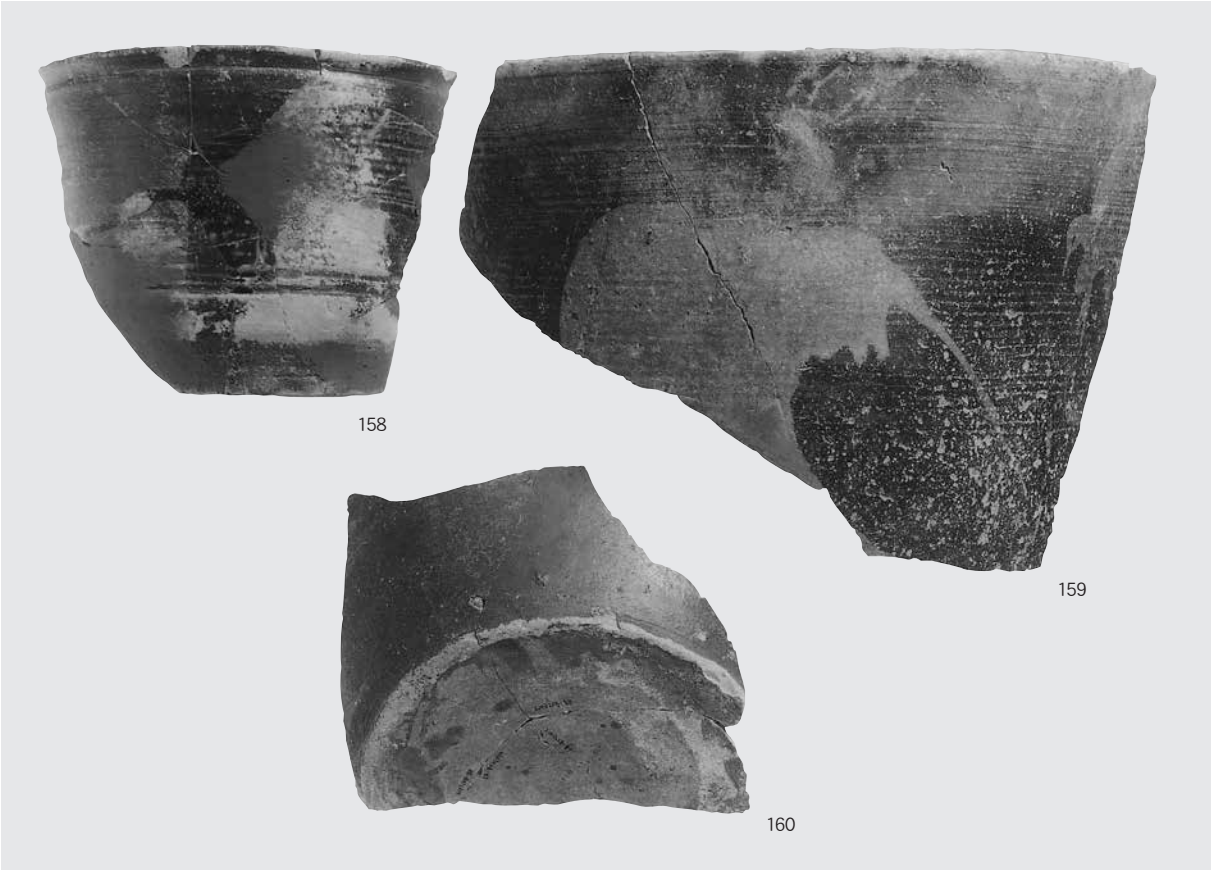


ＳＥ２・３出土土器

ＳＥ５出土土器

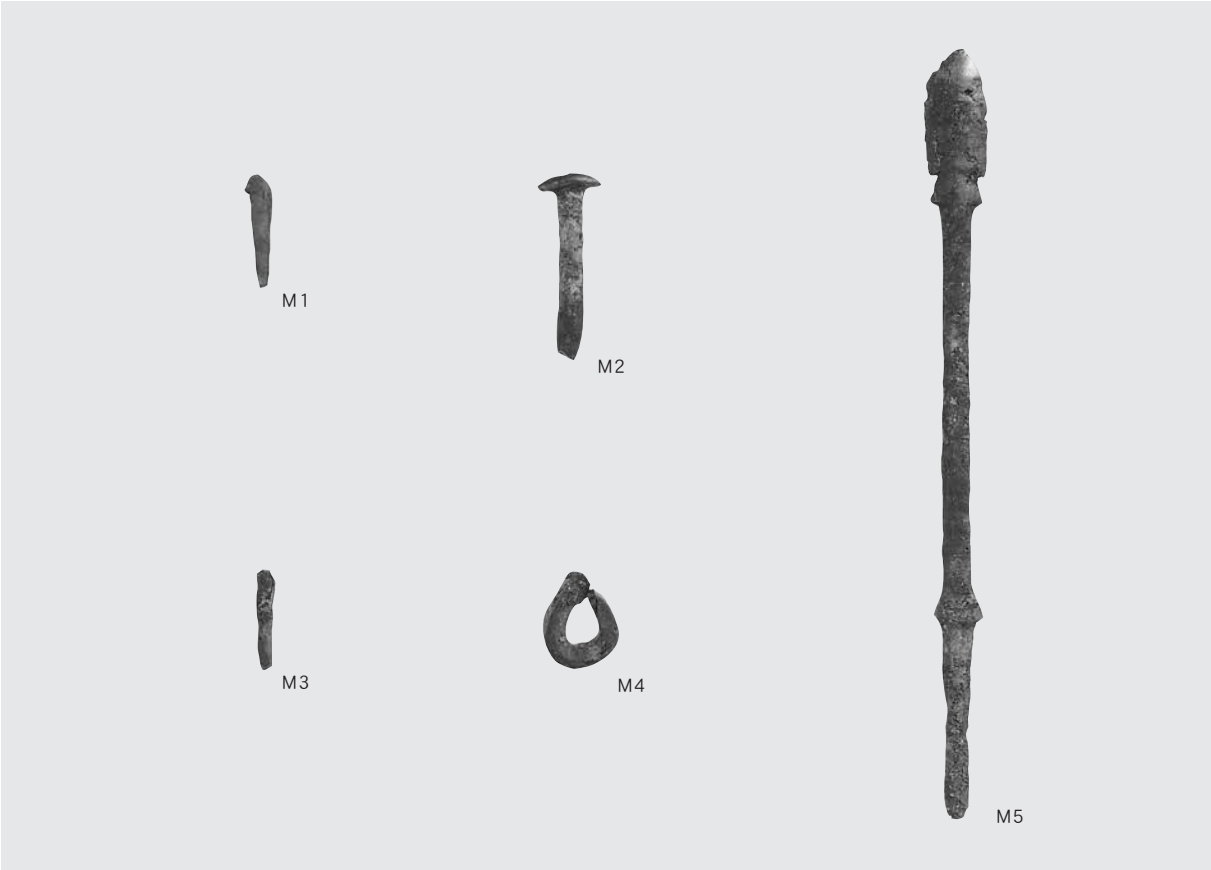


ＳＥ５出土土器

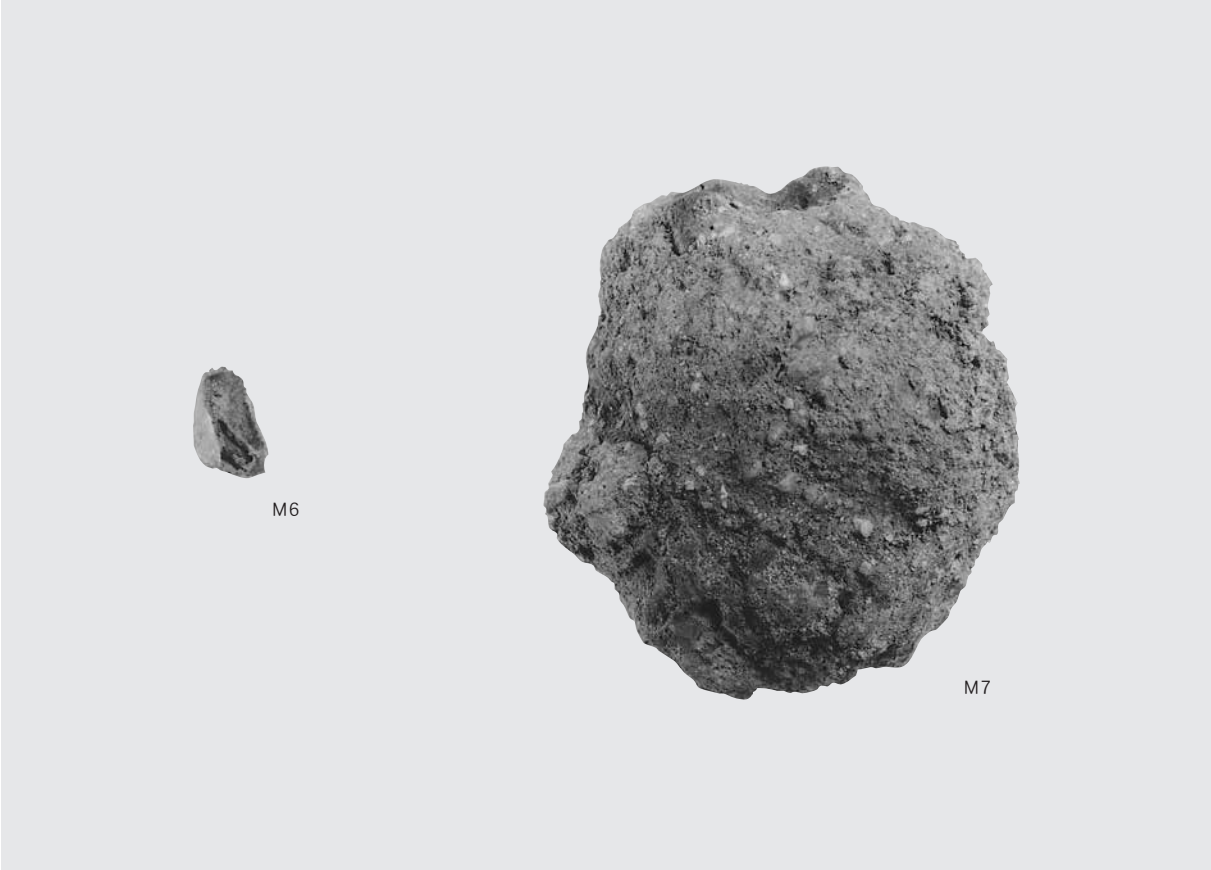


ＳＥ５出土土器

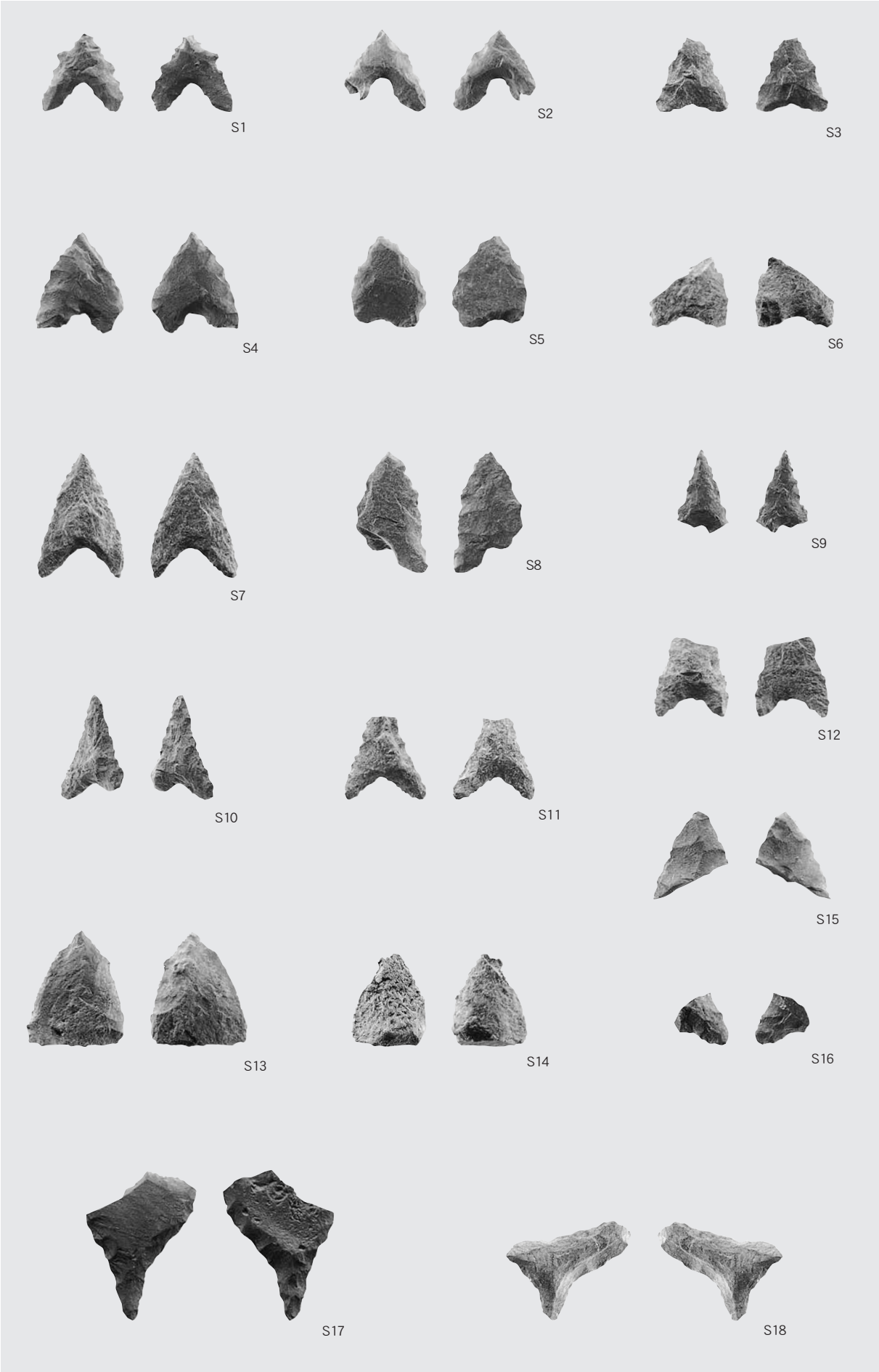
ＳＥ６・８・９出土土器



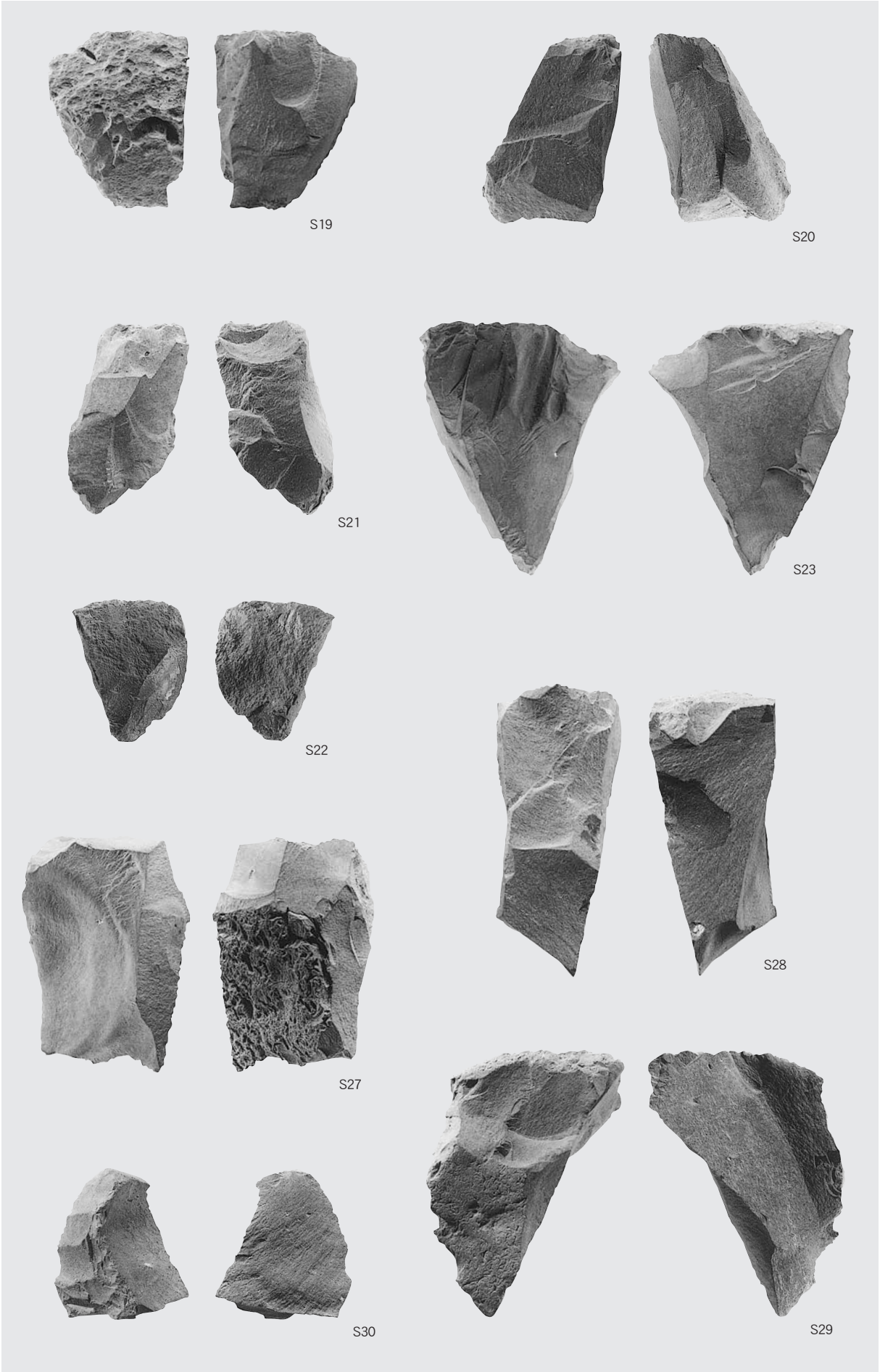
出土金属器



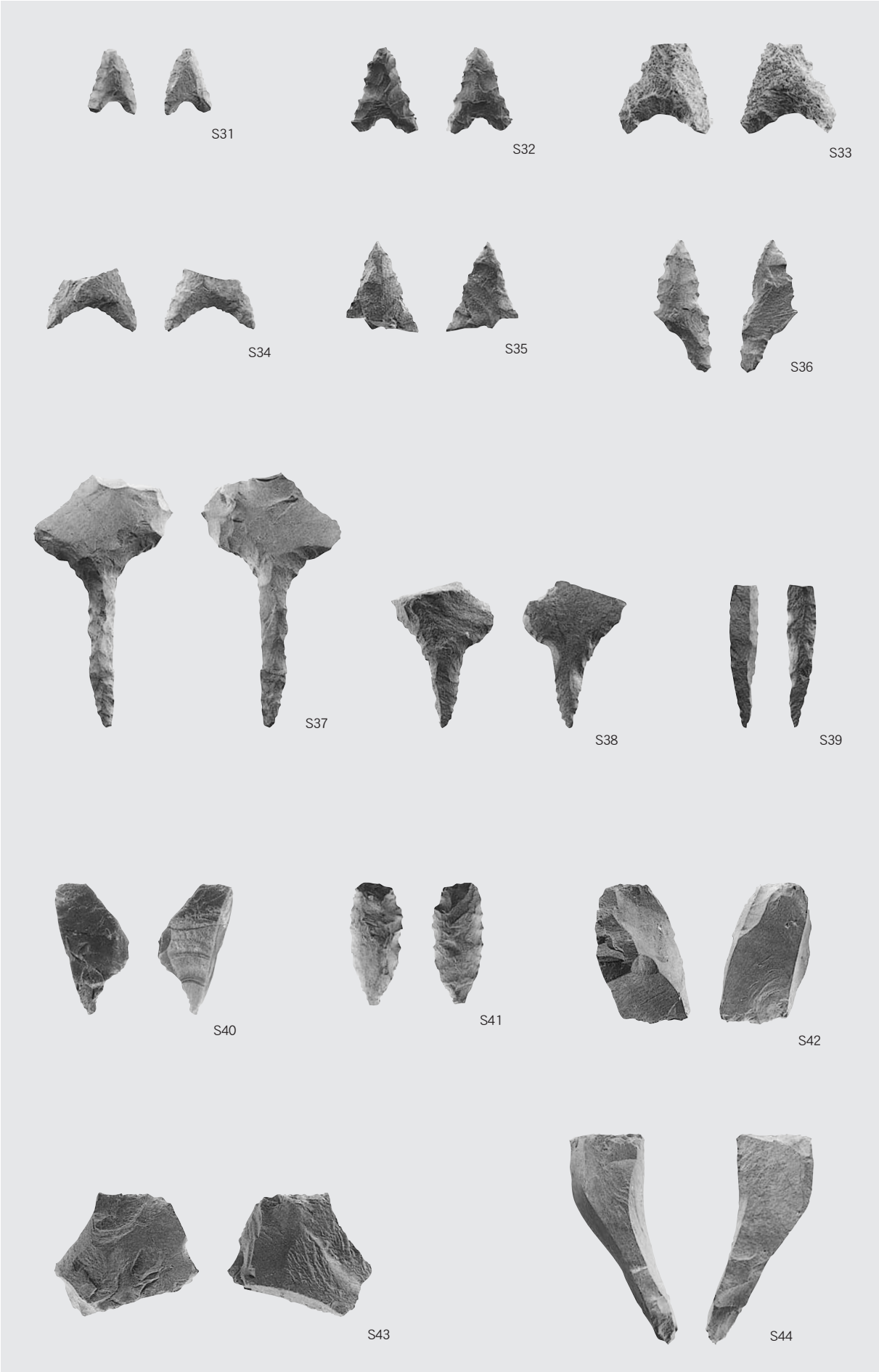
出土金属製品



縄紋包含層上層出土石器

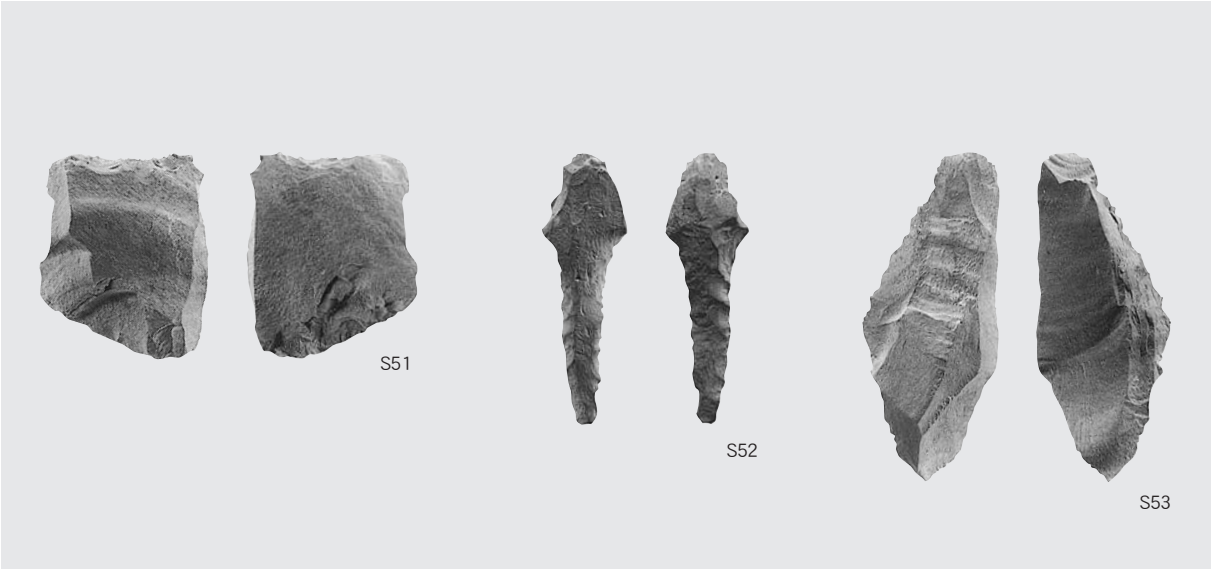


縄紋包含層上層出土石器



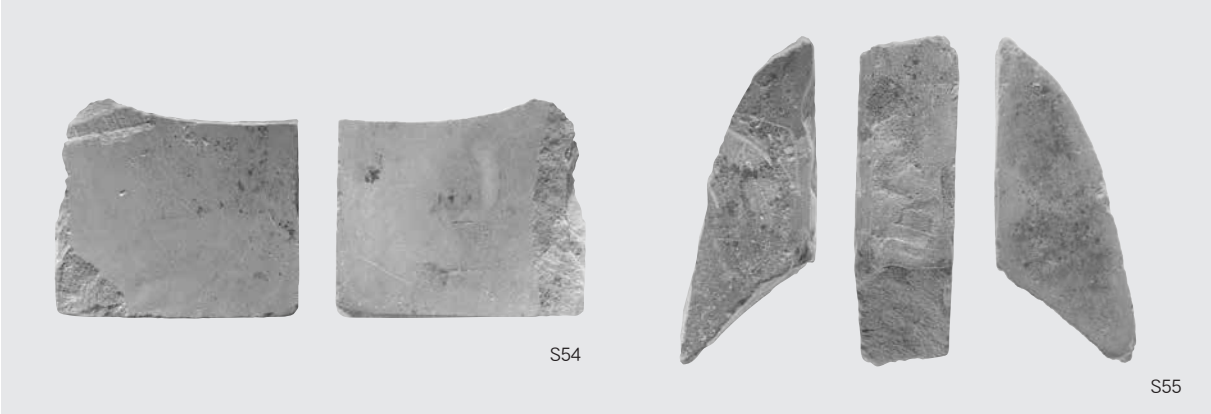
縄紋包含層下層出土石器

縄紋包含層下層出土石器



遊離遺物

出土磨製石器他



出土石製品

ＳＥ６出土石製品

ＳＥ９出土木製品

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いせがい　いせき
書　　名	伊勢貝遺跡
副　書　名	（主）三田篠山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第430冊
編 著 者 名	岸本一宏、別府洋二、久保弘幸、竹原弘展（パレオ・ラボ）、㈱加速器分析研究所
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　℡ 079-437-5589
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　℡ 078-341-7711
発行年月日	2012（平成24）年３月29日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伊勢貝遺跡（いせがいいせき）	三田市（さんだし） 小野字（おのあざ） 伊勢貝（いせがい）	28219	200528	34度 56分 53秒	135度 14分 4秒	平成15年 12月25日～ 平成16年 ２月27日	1,015㎡	道路新設 工事
遺跡調査番号	2003228		確認調査番号 2002175 2002192 2002220 2003215					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊勢貝遺跡	集落址	縄紋後期 古墳後期 中世 近世	竪穴住居・土坑 掘立柱建物・土坑 土坑・井戸	縄紋土器・石器・弥生土器 須恵器・土師器・鉄器 陶器・磁器	

要　　約	縄紋時代後期末の土器および石器が出土。古墳時代後期のオンドル付竪穴住居跡を検出。 中近世の集落も検出。

兵庫県文化財調査報告　第430冊

伊 勢 貝 遺 跡

（主）三田篠山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成24（2012）年３月29日

編　　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL 079－437－5589

発　　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　　刷　株式会社ソーエイ
〒673-0898　明石市樽屋町６－６